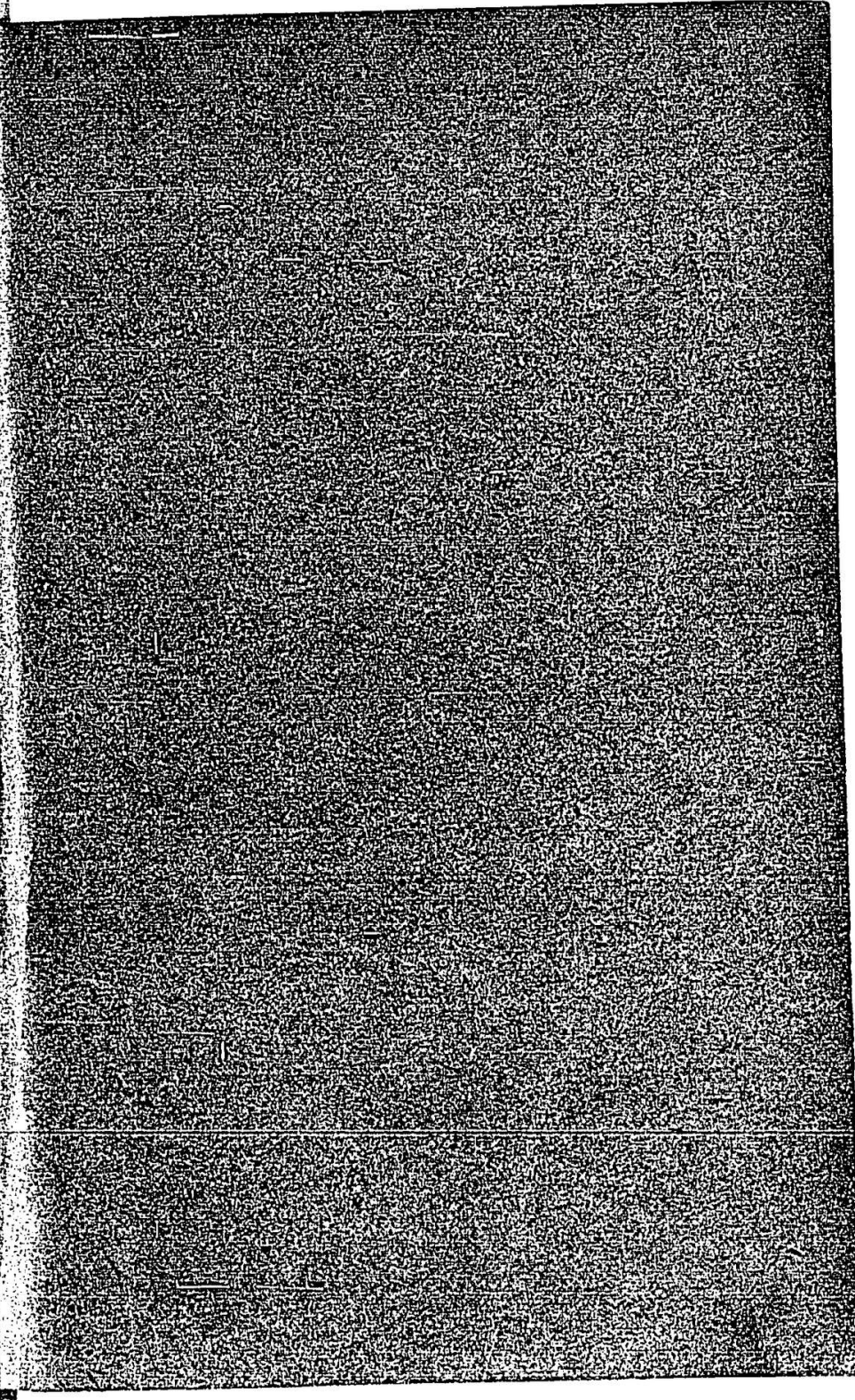
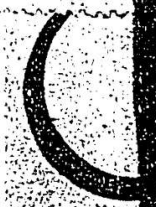
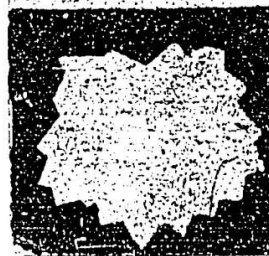
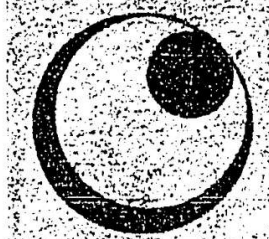
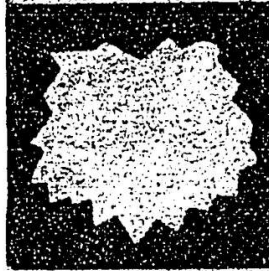
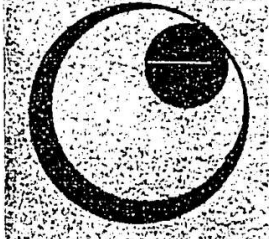
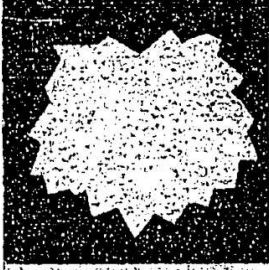
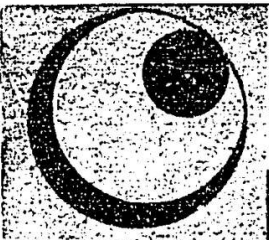
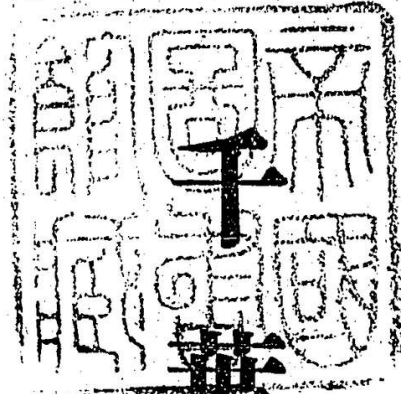


82
680

子集町案内



82-685



千葉町案内

44, 4. 27
内交

は し か き

- 二、本書は部門を設けて分類したれども便宜他部へ収めしも有り、必ずしも拘らず。
- 一、文章は平易を旨とせるが、共進會前に發刊せんと取急ぎし爲め、體の統一を缺ける點なきを保せず、不備の箇所は近く版を重ねるに當て訂正すべし。
- 一、繪畫は總て太平洋會藤井義一氏の筆に成る。表紙寫の葉は千葉附近の菰野爲繁に因み、月の輪に一點星は千葉家の紋所、白旗は千葉氏が始めより源家に深く、中興の祖常胤の時に至り完く鎌倉幕府下に屬せりしに依る。
- 一、本書を判行せるに當り、町長加藤久太郎君、友人白鳥健君兩氏は種々力を添へられ、本縣師範校講師板倉折枝氏は表題を撰筆せられたり。共に其好意を謝す。

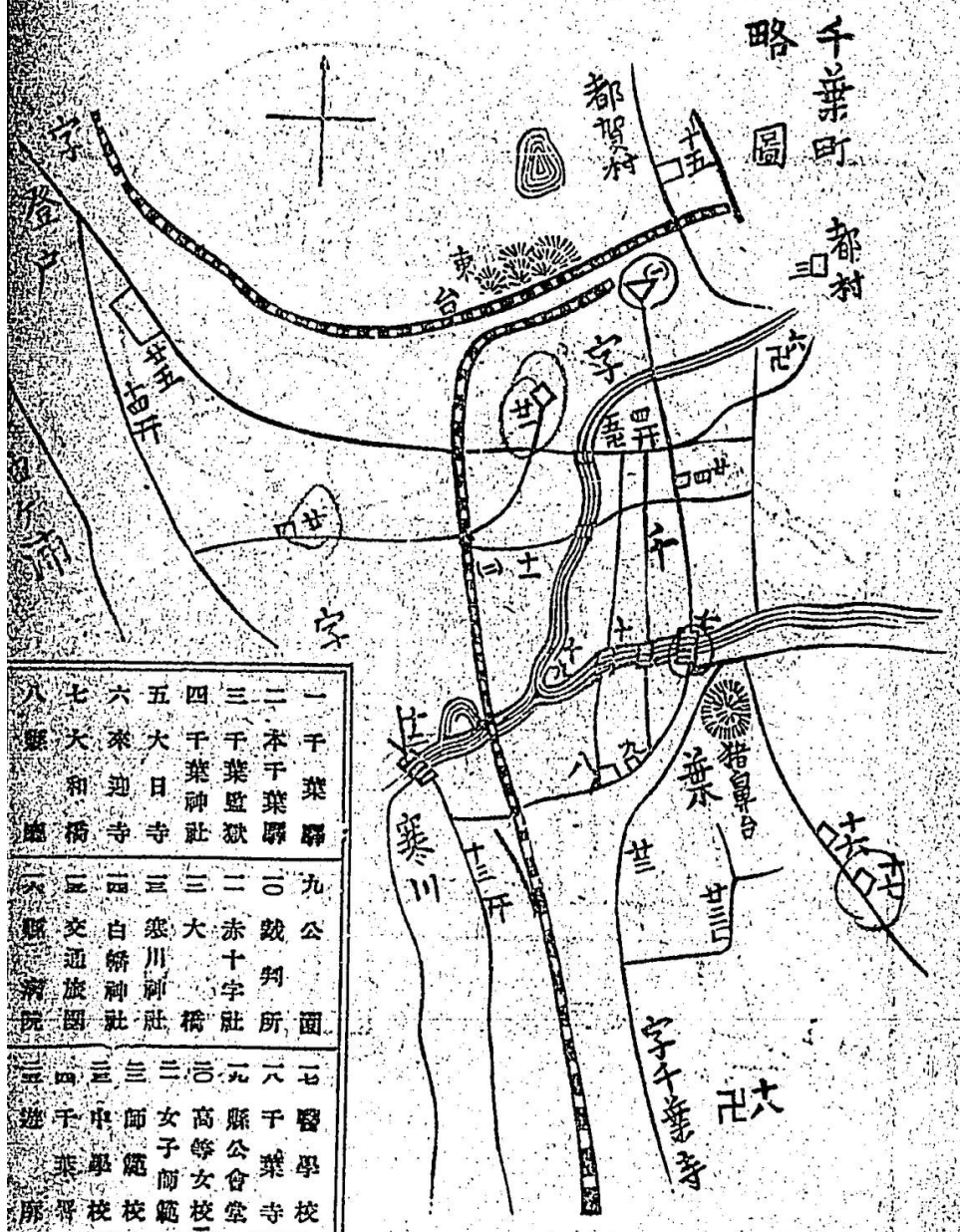
嗚呼怪しき吾心かな、否、これ吾心の怪しきに非ず。撲み馴れたる土地にありては、日に周囲の事物に馴れて人は容易に人生の意味を感獲し得るものに非ず、これ吾が経験せる事實なり。我亦て千葉地方に旅せし事あり、日暮れて露も亦迷ふ時、疲れたる足を曳きて漸くに千葉街外れに到着して、忽然寂しき田園より人聲に入りたる時、直ぐ家並の上を蔽ふ煙、彼方此方の街頭に明滅する燈火、小兒の叫ぶ聲犬の吠ゆる聲、豆腐賣の聲、空車を引きて薄暗き横道に入りし男、軒端に茫然と立つ女、見ざる物、明く物總べて吾が旅行の心に觸れし時、これ等のありふれたる光景の如何に強く新しく人間生活の形を我に示したるぞ。

(入郷の記の一節「獨歩」)

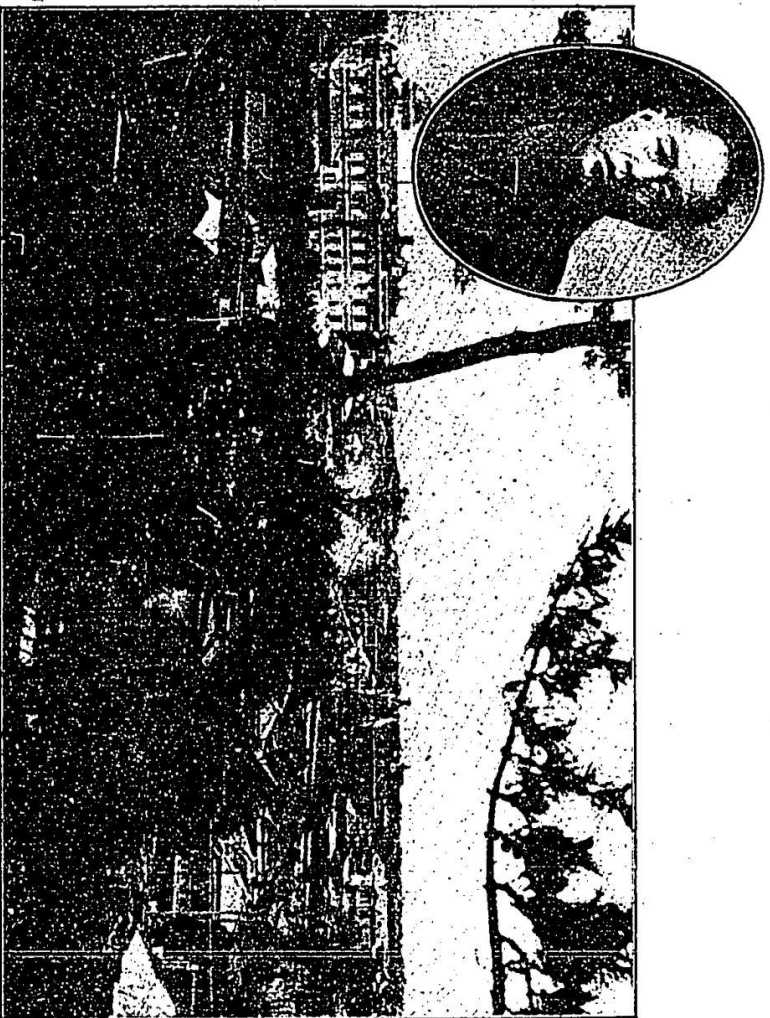
目次

地誌	一
沿革	八
神社佛閣	一五
名所舊蹟	三四
一 東南部	三四
二 中央部	三九
三 西部及北部	四三
四 七不思議	四七
五 千葉八景	五一
勸業	五九
官公署及公設物	五九

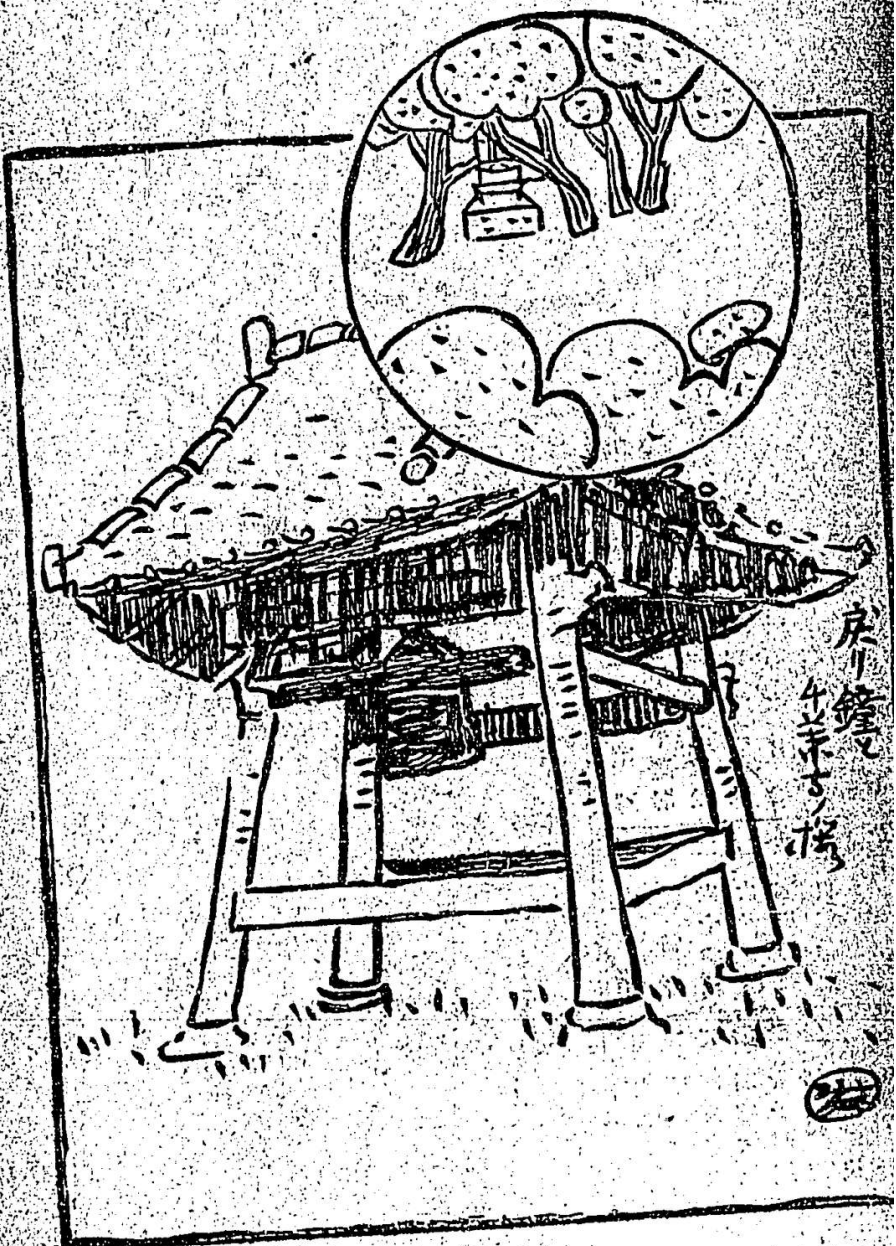
學事	六六
行事及風俗	七〇
遊覽及娛樂	七九
偉人小傳	八六
千葉三郎兵衛、忠藏、布施丹後、安井敏雄、長松	
附近名勝古蹟	九四
蘇我、更科、佐倉及成田、檢見川、船橋、市川及中山の各方面	
寫真版參照	一一一



一	千葉驛	九	公面	七	醫學校
二	本千葉驛	〇	裁判所	六	千葉寺
三	千葉監獄	一	赤十字社	五	縣公會堂
四	千葉神社	二	大橋	四	高等女校
五	大日寺	三	寒川神社	三	女子師範
六	來迎寺	四	白橋神社	三	師範校
七	大和橋	五	交通旅館	三	中學校
八	大和橋	六	交通旅館	三	千葉學校

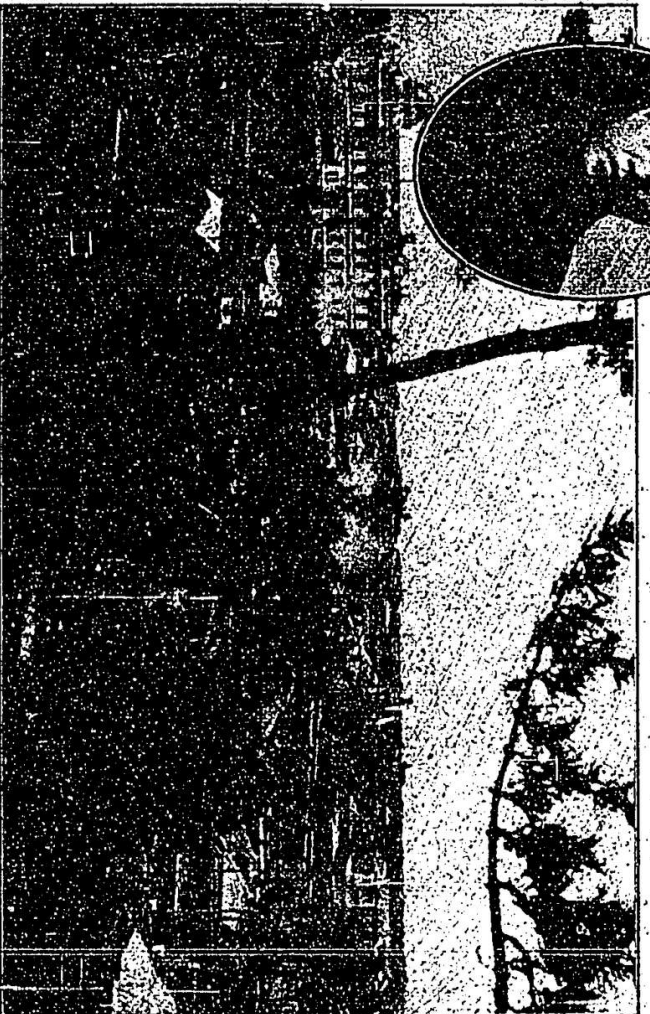


氏郎太久藤加長町と景全葉千し見リと築泉猪

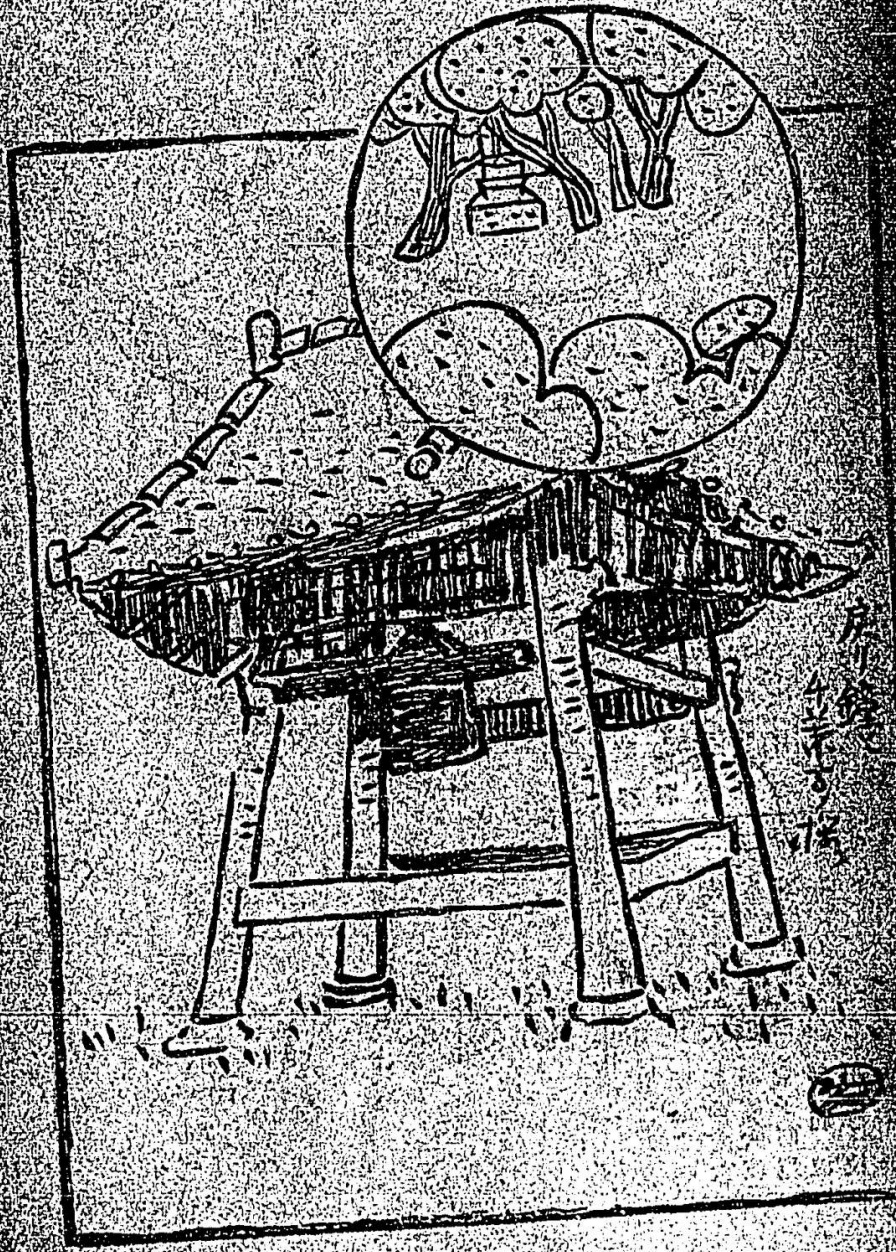


庚子鐘
午羊子ノ橋



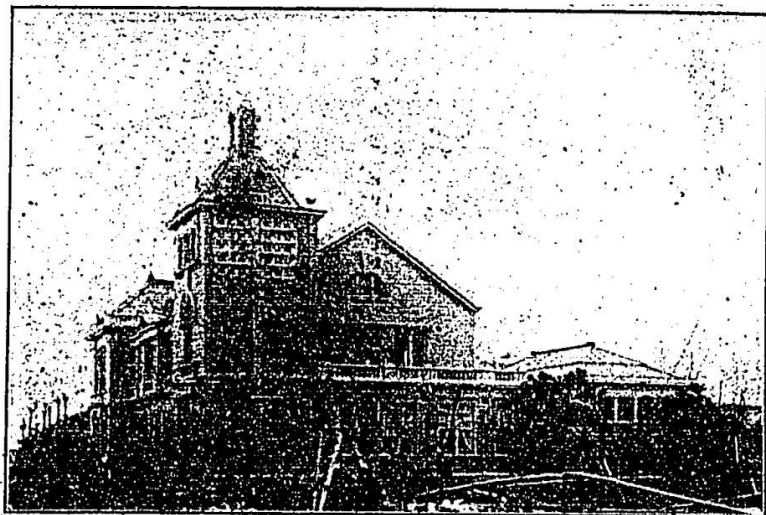


氏郎太久藤加長町之景全葉千し見リ上登鼻猪



氏郎太久藤加長町之景全葉千し見リ上登鼻猪

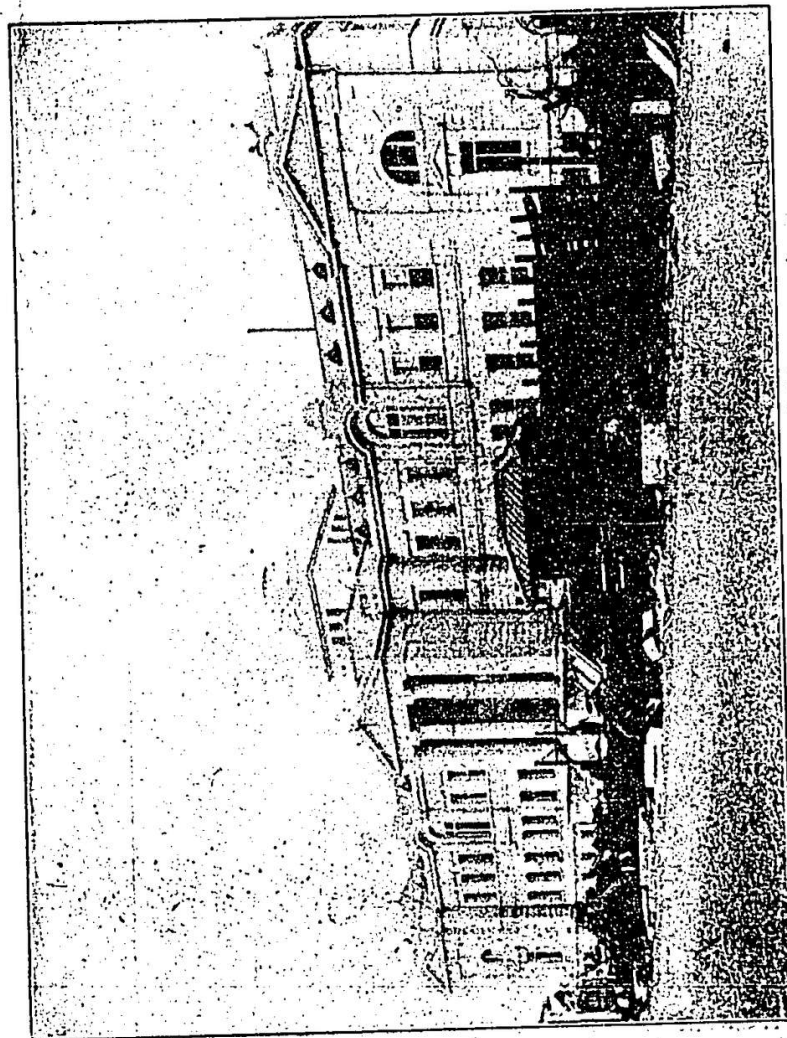




縣 公 會 堂



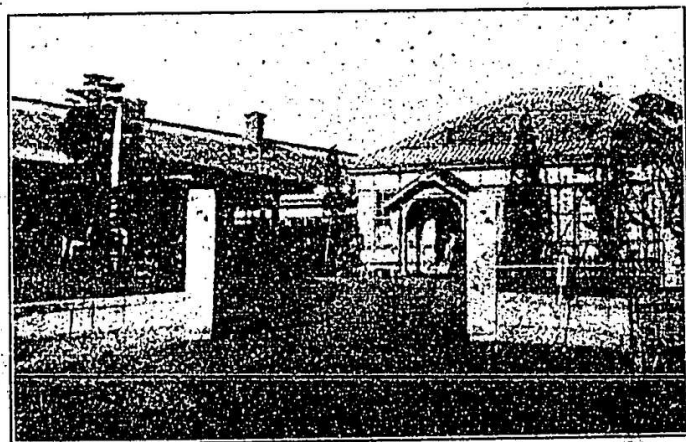
交 通 兵 旅 團



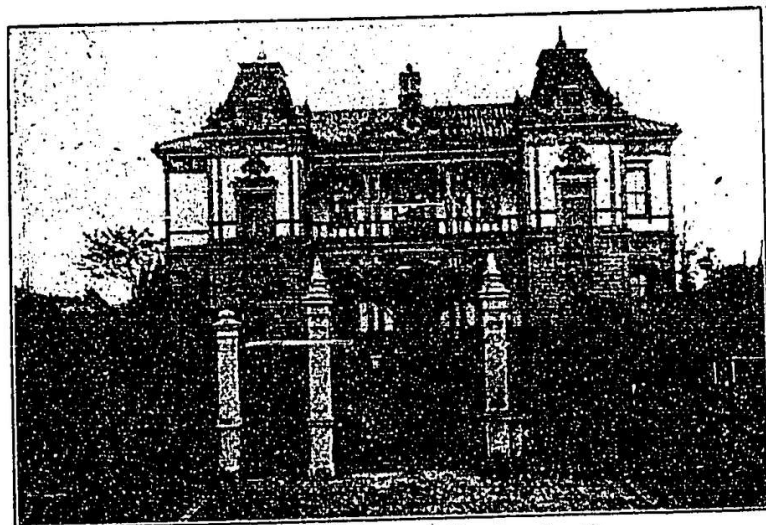
新 築 縣 署 舍



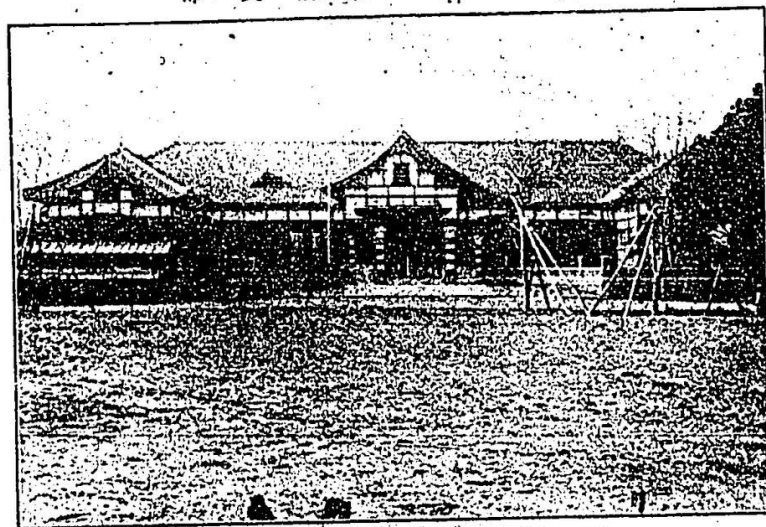
公 園 (右 側 羽 衣 松)



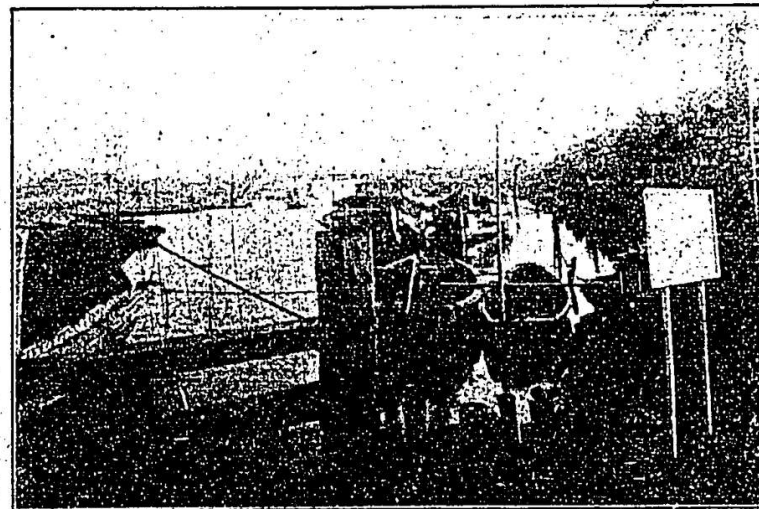
縣 立 千 葉 病 院



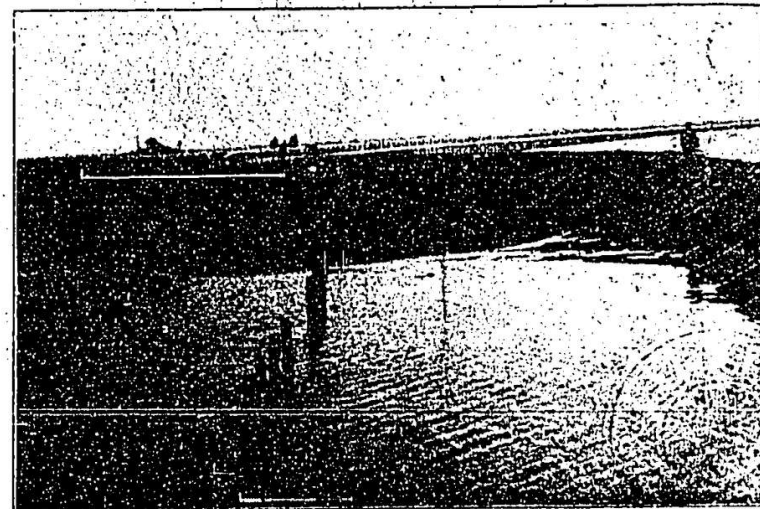
赤 十字 社 千 葉 縣 支 部



千 葉 地 方 裁 判 所

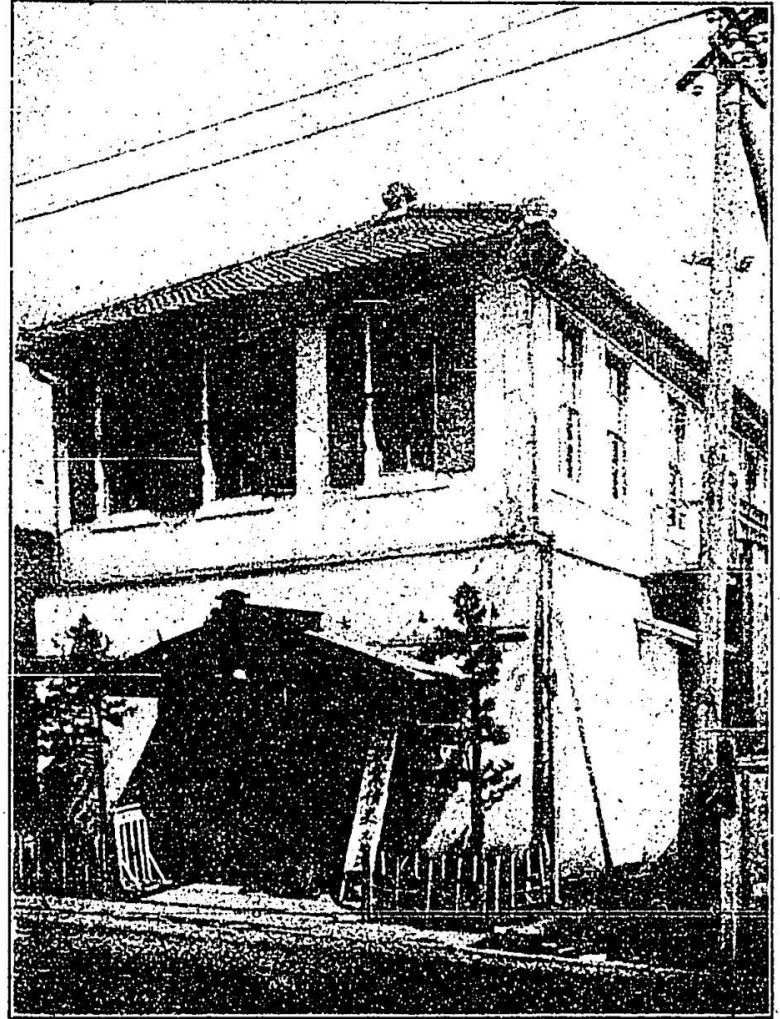
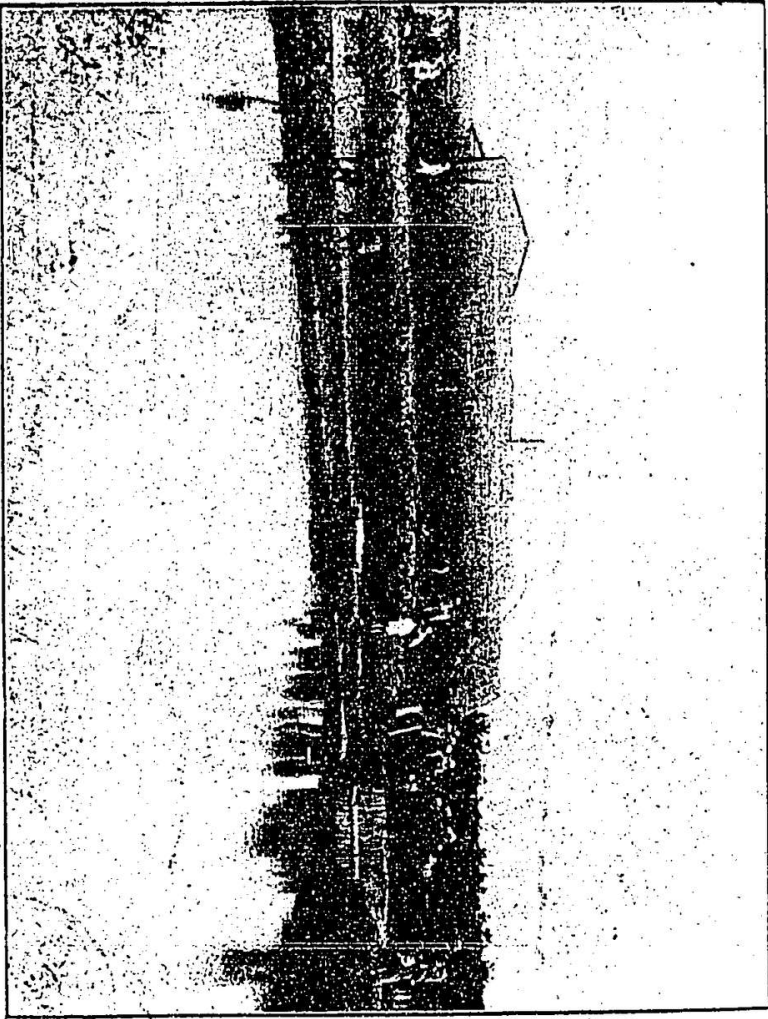


大橋上り川、河口を望む



千川田橋(波瀾船遊) (原)

津田沼登魚會社(株式會社)



千葉割引銀行

地誌

△位置廣袤 縣の中央部西隅千葉郡の中に在つて、西は袖ヶ浦一帯の海に面し、東は都村に隣し更科を經、北部は都賀村に隣し馬渡を經て共に印幡郡に接して居り。東南は譽田村に隣し白井を經て山武郡に、南は蘇我野を經て生實濱野村から市原郡に、西は檢見川町に接し津田沼を經て東葛飾郡に界して居る。而して廣袤は東西六里十八丁南北七里十五丁。面積は十八方里四十三丁を占めてゐる。

△市街 市街を大別して五つとし、中央部及び北部は都賀村東部は都村の境迄を總て大字千葉と云ひ、檢見川町に接して町の西北部に當る海邊の地を、大字登戸及び黒砂と云ひ、大橋の左右から南に向ひ蘇我町に迄走れる地を大字寒川と云ひ、寒川の濱に平行した東方の丘地を大字千葉寺區と云ふ。中て登戸區は

登戸權之介定胤等の居城が茲に在つたものらしく、千葉寺は斯の千葉寺の名を其儘に借用したものであらう、寒川は近年になつてからの稱で、往古は此邊の海を呼んで寒川の海と云つたもので、丘は結城の郷と云つた事は萬葉集等を見ても明かに顯れて居る。尙其頃の區分を云へば今の市場區猪鼻臺から醫學校方面の地を池田の郷と云ひ、結城郷を除いた其他の地を總て千葉の郷と云つたのである。昔はそうであつたが今は前述した五區に別れて居る、而して一番地區の廣いのは大字千葉で、中に本町、市場、吾妻町、道場、院内、通町、新町等の小字があつて最も繁盛の地となつてゐる。

以上の中市場區は大和橋以南の地で、妙見社記録の一節にも「自橋至御達報(今の千葉寺區字五田保)。宿町人屋敷。而恒開市仍稱市場云。」と記してある。其名の存する所以であらう、吾妻町區は千葉氏時代に家中の私宅が此邊に在つたの

て、吾妻と名付くるに至り、道場區の稱は徳川家康が東金に狩獵の途次、此地に假營を設け其處で滿譽上人の説法を聽聞し、其假營を道場と呼んだからであつて、院内は妙見社の周圍である爲め字の名に用ひ、新町は曾ては松原であつたのを、千葉大和屋の萬平が開拓したのである。

△河川橋梁 山武郡土氣の邊から發して東金街道に沿ひ、龜井、旭町を経て、本町を横斷し、縣廳裏を抜けて寒川の海に注ぐ河を都川と云つて、幅六七間だが千葉では一番大きい川である。往古は宮後川と書いて居たと云ふ事は事實だが、其頃今の妙見社が此河邊にあり、其の流れて居たから宮後川と云ふたのだと云ふ説は甚だ信じ難い。該河に架つてゐる橋を上流から記せば龜井橋、旭橋、大和橋、吾妻橋、羽ごろも橋、都橋、大橋である。尙此外に譽田村から道場の裏に出で、千葉停車場前を過ぎ南折して新町富士見橋及び房總驛通り一

本橋下を流れて都川に合する僅か幅二三間の小流がある。

△氣温 氣温の最高は茲數年間を通じて見ると凡攝氏の十八度八分位、最低は十四度八分位であるから平均十六度八分許である。

△戸口 戸數五千十戸、人口本籍一萬五千八十人寄留一萬七千六百二十三人計三萬二千七百三人(四十二年十二月三十一日現在)

△道路 當町を通ずる國道は船橋稻毛から海岸に沿ふて登戸にかゝり、右曲して新町通町を經、千葉神社門前迄來て更に南折し、本町通を縣廳舎の前迄に至る、舊稱上總街道の一路で、縣廳舎前から寒川に至り大橋の袂を五田保に至るの一道、千葉神社から道場通を都村貝塚に至る舊稱佐倉街道、都川の邊り病院下を通ぜる舊東金街道及び本町旅館松葉館の角から俗に云ふ正面横丁を曲つて房總線本千葉驛に至る一道は孰れも縣道で、其他里道等は日に月に開通の機運

に進みつゝある。

△鐵道 東京兩國を起點とし佐倉、成田、佐原、成東、横芝、八日市橋から銚子に迄通ずる總武線停車場「千葉驛」は町の北端に位し、毎月平均各二萬餘の乗降客があり、又大網、東金、茂原、一の宮、大原に至る舊房總線の「本千葉驛」は町の西端に位し寒川に在り、毎年夏期には避暑客の運搬に忙しく毎月平均の乗降客は各四萬足らずある。

△水運 本町は海邊の地であり乍ら由來水運の便は甚だ開けず、汽船は東京灣汽船會社の汽船が僅か日に一度靈岸島を出て横濱を廻り、蘇我町を經て都川尻に寄つて東京に戻るのがあるさりで、他は各運送店の貨物船が往復するのみである。乍併去る四十二年縣會に於て可決された寒川浚渫事業が近く竣工した曉は、本町が水陸交通の連絡上大に利便を得るは明らかなる事である。

△馬車人力 馬車は一頭挽の箱馬車が千葉驛前を出て本町通を寒川へ向ひ生實濱野を経て、市原郡の八幡迄行き、人力車は本年警察部からの命令に依つて、各區間の賃錢を公定せられた。

△遞信 千葉郵便局は本町一丁目に在り、毎月取扱ふ書狀は平均約十七萬、葉書は五十餘萬の多きに昇り、四十三年から開通した電話加入者は三百内外に達して居る。

△里程 千葉縣應前元標から各地の里程は左の如くである

東京府	一〇、一四 ^里	茨城縣	三〇、〇六 ^里
神奈川縣	一八、三八	松戸町	八、〇五
佐倉町	四、二九	茂原町	八、〇四
東金町	六、二二	佐原町	一六、〇五

銚子町	二二、〇二	木更津町	九、二一
大多喜町	一一、二一	北條町	二六、二三
福岡町	一三、〇六	船橋町	四、二〇
木下町	九、二八	佐貫町	一三、二七
鴨川町	二二、一五	一の宮	一〇、二〇

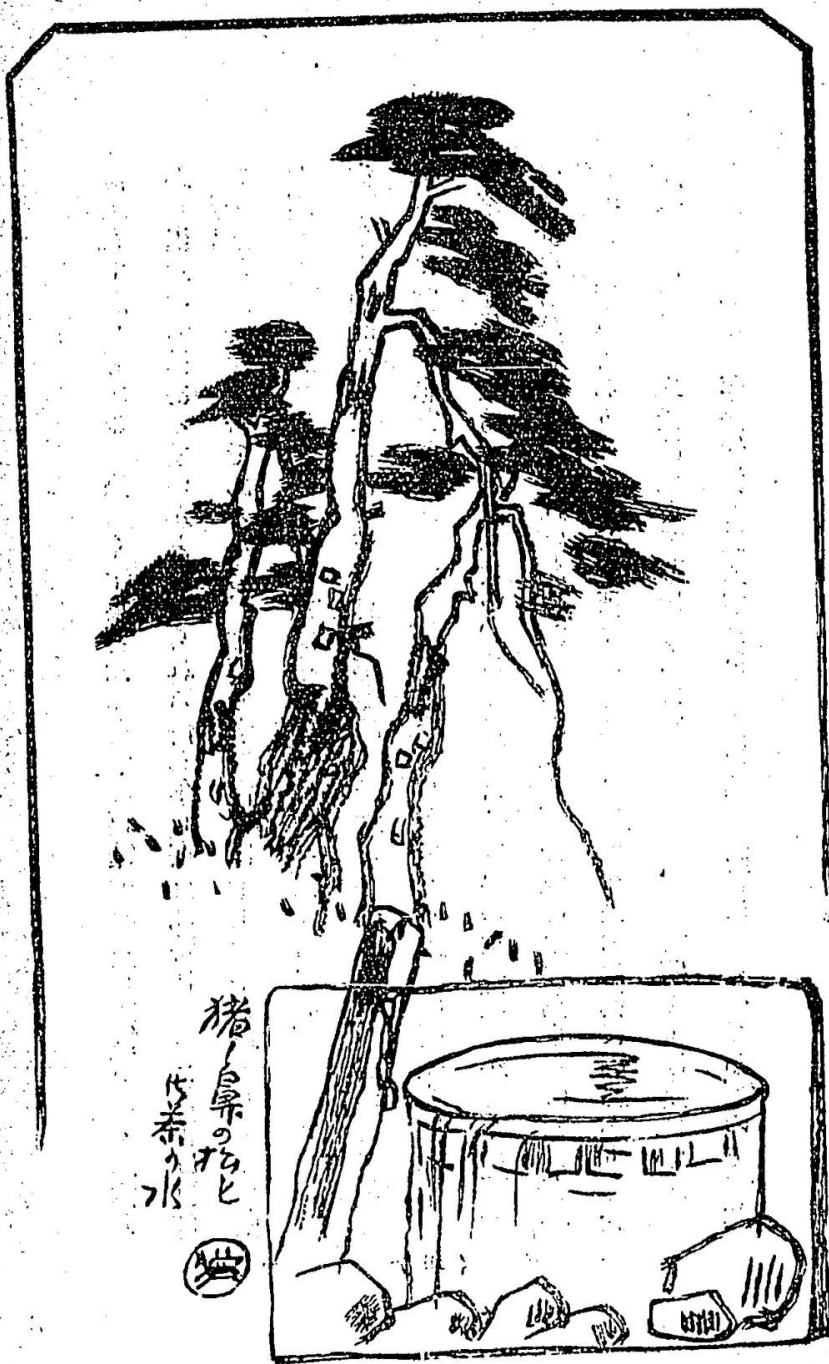
榎ありしのめと云ふ、此市街中割烹家の巨擘なり、(東京では小指位)就て食ふ、會席料理共の價廿五錢亦廉なる哉、漁史未だ本地の妓流が如何の歌舞を知らず故に試に一招せんと欲し榎婢に命ず、且つ問ふて曰く本縣の官員様は時々遊びに来るか、婢曰くどうして、縣の官員方は料理も召上りに御出でなされませぬ、況て藝者衆杯を呼ぶは御法度同様です、たまにお出なさるは裁判所のお方計りですと一既にして歌舞來る一兩個皆云妾は東京ツ子なりと、蓋し場末の脱走妓なるべし、本地の妓流幾名有りやと問へば、答へて云ふ往きに十餘名有りしが、今は減じて八人となれり(柳北一千葉土産の一節)

沿 草

△ちばの字義 千葉と云ふ言葉が、明かに書物の上に現はされたのは、今から千二百年前、古事記の中に「知婆能。加豆奴衰美禮婆云云」と記された事で、其後日本紀、續日本紀、日本後紀、和名鈔等の書にも、知婆若しくは知波と云ふ字を往々見受けるし、萬葉集の中にも

幾世經て兒手拍^{こて}や知波の野にふた面なき君をしたひて

の歌があつて、知波と記してある。尤も茲に云ふ知波の地は今のはちば町をさして云ふた譯では無く、今のちば町の地は往昔は葛繁(今葛飾と記す)の一部分であつたのである。知波の字が古事記の出づる頃から存してゐたと云ふ事は夫れで判つた。されば千葉と云ふ字は何時頃生れたのであらうかと云へば、是れは又古事記の出づる三年前なる和銅二年に、ちばの南端に一寺を建立し千葉寺と



猪ノ鼻のちば
代茶の水



命名してからである。恐らく千葉と云ふ文字は葛繁の葛の葉が繁ると云ふ意ろから出たのではあるまいかと察せられる併し乍ら奈良朝時代に千葉と書けば即ち千葉せんちと讀ませる筈であるから、知婆の字に代るに千葉の字を以てして、ちばと訓讀させるようになったのは遙か後の事てなければならぬ。

尙千葉家の記録に依ると、平の忠常が始めて千葉の地へ来て、池田の郷に城を構へるに當り、忠常の言として「此地を千葉と稱するのは、我祖先葛原親王の御名に意を借りたものに違ひない、さすれば吾等は葛の葉の繁るが如くに蔓延つて世に勢ひを示さなければならぬ、のみならず知波の語は萬葉集の如き古書の中にも用ひてあり、吾等が此所に城を構ふるに至つたのは洵に因縁ありと云ふべしだ。故に以後は氏を千葉氏と名付けようとして、子常將よりは是れを氏とした」とある。乍併知波と云ふ字は萬葉集以前の諸書にも見へてゐるので、其

一事を以ても、武人忠常は斯る事には多く頓着しなかつた事は察せられるし、葛原親玉の御名から、千葉の字を案出するに至つたのであらう杯云ふに至つては餘りに我田引水の説ではあるまいか。

△千葉氏以前以下少しく千葉町の沿革に就て記せば、成武天皇の御代に、國縣の制が布かれ、千葉の地に國造くにつくりの置かれた以後の事は國史にも明らかになされてゐる處で、續いて千二百年前元正天皇の御代に、里を廢して郷の置かれた時、千葉の郷となし、代々其の制に依つて居た處、降つて藤原氏が權勢を振ふやうになつて、國司と雖是れを自由に制し難く、私有地の制を設けて开を莊園と名付る事になつて以後は、千葉の地は何人の所有に屬してゐたものか今夫れを知る事は出來ない。

△千葉氏の代 以上は千葉氏以前の歴史の大要である。夫れより永承年間に至

り、平良文の孫なる忠常の子常將は下總權介に任せらるゝに際し、前述した如く、千葉氏を名乗るに至り、猪鼻に城を構へ、三代常兼の世に及んで一度び上總の大権に移つたが大治元年六月一日再び千葉の地に移つて、愈々此所を居城と定める事になつたのである。千葉常將から五代の孫は即ち千葉家に一新紀元を劃した、千葉常胤の代である。時に源頼朝が兵を起し、鎌倉幕府を創始するに當つて、常胤は頼朝の旗下に馳せ、爾來平氏なりし千葉家は茲に變じて源家に屬する事になつたのである。(尤も其の以前常將の代より源家とは關係が深かつた)されば一度び平氏亡びて源氏の世となるや、常胤の一族は勢ひを得、各所より千葉の地に集り來るもの多く、百般の事漸く盛んならんとするに至つたのである。千葉集は記して曰く、「大治元年丙午六月朔、始めて千葉を立つ(町の事なるべし)凡そ一萬六千軒なり、表八千軒裏八千軒、小路表裏。五百八十餘、

會場應大明神より御達報稻荷の宮の御前まで七里の間御宿なり(六丁一里なるべし)云々、以て當時如何に繁盛であつたかと云ふ事は察するに餘りあらうと思ふ。斯くして謙倉源氏は過ぎ、南北朝時代には、千葉家は北朝に屬して尊氏に従ひ、後寛永十年六月十六日千葉の介重胤は江戸に於て客死した、そこで千葉氏の宗統は意に亡びた。是れ始めて千葉家を起せし常將の時より算して實に約六百年である。

△千葉氏滅後 一度び千葉氏の有を離れた千葉街は、其後屢々領主が變つて、徳川の代には所謂「千葉宿」となつて存し、佐倉領に屬して巨商富豪は門を閉じ、或ひは去つて、花卉隠約たりし庭苑も雜草の蓬生するに任せるに至つた。後世享和の俳人成美が或時千葉に旅して

若菜摘む人さへ見へず千葉屋敷

の句を遺してゐる。其衰亡以て察するに餘りあるては無いか、然るに世は明治維新の王政復古となり、明治四年七月廢藩置縣と共に大小區の制布かるゝや、當時の千葉宿は第十一大區五小區に屬し、其取扱所を此處に置かるゝに於て、六年六月印旛、木更津の二縣を廢し、始めて此地に縣廳を移されて千葉町と稱するに至つてかたら云ふもの、諸官衙、軍營、學校等の此處に設けらるゝもの又従つて多く、數多の商賈は軒を並べて再び昔の繁榮に返り、今ては戸數即ち五千餘戸、人口參萬餘に昇り、百般の施設整備し、四十四年五月には縣共進會を千葉町に開き、新築縣廳舎内等に、縣下の生産品を陳列するに至り、當町の發展史上一層の光彩を添ふるを得たのは大に嘉すべきであつて、此上の冀望は一日も早く市制の布かるゝに至らん事である。

神社佛閣

(一) 神社

△千葉神社(妙見社) 千葉町本町通の端れに石の華表が高く立ち、朱塗の山門奥床しく見ゆる社がある。是れ即ち縣社千葉神社である。今本社沿革に就き千葉集等の書に現れてゐる物を參照し左に少しく是れを記せば
在昔承平年間平の將門が叛旗を翻へした時、常陸大椽國香は是を打たんとして敗つて歸し、承平二年十二月の末つ方平良文出で、戦つた處、是れ又大に敗れて粟飯原文次郎常時等の七騎と共に積雪深き上州の山中に遁れた。茲に七騎の強者は死を決し、染谷川に旗を揚げ陣を布いた處、味方四方から參集して漸く一隊を爲した、時に俄然迅雷響くと共に乾坤爲めに晦冥となつたと思ふや否、

雲時にして暗雲晴れ天地は一掃された如く開明となつたので、武夫等は大に生氣を得、軍を進ませると、南風激しく起つて敵の射り出す矢は悉く吹き戻されたと記す位、味方は斯くて益々勢ひを得攻め進んで、遂に大捷を納めた。是れ翌る萬平三年正月三日の事である。すると或る月明の夜一人の童子が來て良文を誘ふので、其跡について行くと童子は武甲山の邊りに行きかき消す如くに姿を無くして了つたので、良文は愈々不思議に思ひ、臣等と共に一心に祈願をこめた處、夢にお告げがあつて「吾れば汝が未だ母の胎内に在りし時、母來つて詣て出生する子は何卒男子なるよう。且つ其男子には行くく名を成さしめた」と願ひたるにより吾れ汝を助く」と宣つた由、其處で良文は愈々崇敬し、再び臣等と共に祈願して、如何なる御佛かと御伺ひをしたら、「吾れば群馬郡花園村七星山息災寺（天笠毘首羯摩天の作）の一なる寅童子なり」と宣旨

したので良文等は相列つて息災寺に赴き參詣し、常時を三年間其地に止め守護を致させ、自らは秩父に歸り軍に臨むに際しては、遙かに息災寺の方に向つて祈願を上げるに必ず利があつたと云ふ。而して其後良文は居城の地に尊體を移すに付て、花園村息災寺は花園院帝の勸請で建立した寺故、致底容易に寅童子の尊體丈を移す事は出来ぬので、常時をして童子に宣旨を請はしめると、堂の扉は自然に開いたので常時は畏こみ、御尊體を背負つて私かに息災寺を落ちて良文の許に赴き、後武藏の藤田、秩父の大宮及び鎌倉等に移し大治元年良文の嫡孫忠常の世に一度び千葉に移したが、兎に角花園村から私かに持つて來た物なので、寅童子としては祀れぬので、妙見堂と稱へて其中へ寅童子を祀る事にした。後上總の大椎を経て千葉の地に安置する事になつた（目下上總にも其の移しあり）。而して長保二年覺等大僧正は別當を立て、妙見寺と名付けた、是れ

現時千葉神社に鎮座せる所謂妙見尊王の由來である。而して後年一條天皇は勅旨して此所を勅願所と定められ、千葉家卅一代の間綿續し、徳川家康公又深く當寺を崇敬し祭典料として永代二百石を寄附せられて來たが、明治戊辰の春王政復古となり神佛混淆改制に當り、寺院では祭典が出來ないので、妙見寺の稱を改めて妙見社とし、天御中主命を祭り、相殿には輕津主命と日本武命の二神を祭り、後再び縣社千葉神社と稱せらるゝに至つたのである。本社は古へは堂宇壯麗を極めて居たが、明治七年火災の爲め堂塔悉く烏有に歸して見るべきものは無くなつた其後屢々再築の議は唱へられたが兎角遷延に付せられ、僅か十六坪程の假堂の儘になつてゐるのは誠に惜しむべきである。有志の主唱に依り夫れ／＼準備をして居るから名社千葉神社の再建を見るも恐らく遠い事ではあるまい。尙境内には十二小社を祀れる外、千葉招魂社

を建て、戦死者の忠魂を祭る靈場となつてゐる。

△寒川神社 寒川宇仲宿、都川河口の邊にあり。祭神は天照大御神、寒川比古命、寒川比賣命の三神を祀る。勸請の年月等は詳らかでないが、千葉家盛衰記、佐倉風土記等に依つて見ても、延喜式内の古社であると云ふ事は明らかだ。尙本社宮殿の下には石櫃に納めたものがあつて靈驗顯著との説あり、往古は海上を走る船も、當社の前を過ぐる時は禮帆と云つて、帆を少し下げて行き、乗馬者は馬を下り忝しく禮をして過ぎた。若し一度ひ犯す時は神の祟を受けるとの事、又神事の砌は鎰取の者葺を以て庭籬を焚いたと云ふ事である。而して社殿は文明十三年辛丑九月二十日破損した爲め原胤次が改築したが、後又焼失したので、今では三尺四方の小祠がある許り、近く改築の工事を起す由。境内には大消、稻荷等の七社を祀つてゐる。

△同末社及攝社 神明諏訪合社 寒川片町上町にある。天明大明神と健美名方主神を祭る。

王子社 向寒川下町にある、僅か一尺五寸四方位な小さな祠で、祭神由緒等更に不明である。

道神社 今は寒川堀込にあるが、始めは新田の地にあつたのを、明治十三年十二月廿九日火災の厄に逢つて堀込へ移されたのである。此社に付ての由緒等は今詳らかになつて居らなす。

龍王社 場所は寒川新宿、海津見神を祀り、境内には尙風神社と云ふのがある。

海津見社 寒川字下町にある小祠で、由緒等は不明である、祭神は貫玉彦命

香取社 字穴川に在る。餘りに古くもない、小さな祠だ。

巖島社 寒川片町に在り、祭神は市杵島比賣命である。(以上末社)

神明社 向寒川上町にあり。境内は百三十三坪、八雲神社、稻荷社、疱瘡守護神等をも併せ祀る。

龍藏神社 北長洲の海岸に存し、祭神は海津見神、信者は多く附近の漁師である。(以上攝社)

△登渡神社 村社登渡神社は千葉通町から新地遊廓の側を通つて行き、寒川からの海道と合する處の右側丘陵の上にある社で、袖ヶ浦の風光は眼前に開かるゝの好望地で祭神は天御中主命、相殿には神皇産靈神及び高皇産靈神を祭り。

本社は正保元年九月千葉家遺族登戸権介平定胤の勸請する所、古へは千葉氏元服の守護神であつたが、中古廢類し見る蔭もなくなつたのを、近年又修築せられたのであつて、境内には水神八坂等十三社が併せ祀られてある。

鷲神社 (攝社)新地遊廓の西字鷲塚にあつて、天日鷲命を祀る。

△白幡神社 千葉町の果寒川新宿にあり、祭神は譽田別命、息長足姬命で、勸請年月等は不詳であるが、治承年間に頼朝公が安房から上總を經、白幡を押し立て、千葉城へ乗込んで來た時に、率ゆる處の兵一千中、主なる士大將等は千葉城内に宿營したが、數多の士卒は、漑ね此處に野營をする事になつた。并して戦ひ勝つに及んで、此處に白旗幾流かを納めたので、白幡神社の名が残つてゐるのである。尙此外白幡神社は謙倉に一ヶ所、房州にも亦一ヶ所の總て三ヶ所にあるとの事である。而して此社は目下寒川神社の攝社になつて居て、境内には琴平神社等都合五社が併せ祀られてある。

△五社稻荷社 千葉寺區字五田保にある村社で、創立の年月等は詳らかで無いが、古老の云ふに、昔日本武命が戦ひに勝つて此所に來た時、樹へ駒を繫いだので駒ヶ原稻荷の名があり、閑院宮殿下御筆の正一位駒ヶ原稻荷大明神と云ふ

遍額がある。降つて千葉氏の世に及んでは常兼が千葉を居城とするに當つて、當社を鎮護神と仰ぎ五社稻荷と稱して、社殿は悉く千葉家の營繕に成つたものださうだ。が千葉氏没落後は村民が力を協せて、社殿の補理をする事になり、寛政七年には京都の稻荷大社から正一位五社稻荷の神號を賜はつた。而して境内には天神、三玉、琴平等の七社が併せ祀られてある。

△淺間社 場所は黒砂字干場、由緒等は詳らかでないが、社格は村社で木花咲耶比賣の命を祀り、境内には三室神社外三社がある。

(末社)天神社 黒砂字稻毛臺所在、菅原道眞の靈を祀る。

(同)道祖神社 黒砂村字道祖神所在、祭は神八衢比臺神と久那戸神。

△石尊神社 村社で、場所は穴川。文政九年六月、村民吉右衛門なる者が、千葉外三ヶ村の入會野地百餘町開墾の儀を當時の領主堀田相摸守へ出願した處、

お聞及びになつたので、領主相摸守を祀つたのである。

△瀧藏神社 村社瀧藏神社は千葉寺宇久保臺に在る古い社で、海津見命を祀り、境内には八神、稻荷、巖島、三玉、大杉、三峰、八幡、道祖の八ツの祠がある。

△香取神社 仁和元年九月二十五日の勸請だと云ふから千葉神社の創立よりも百五十年も前で、院内に在り、地民之れを千葉神社地主の神と稱してゐる。

△其他 穴川道祖社 千葉町字穴川區に三百坪許りの境内を有してゐるが、無格社で祠は小さい。祭神は衢彦神、文政九年九月八日の勸請である。

神明社 市場區に在り、文明元年正月廿日の勸請で、天照皇大神を祭る。

天神社 場所は字新町區、文治元年九月廿五日の勸請で、境内は百七十坪餘ある。

八坂神社 字横宿區にあり、祭神は素盞雄命、何年頃建てられたのだから今は不明

である。

二巖島社 寒川神明下及び下池尻に各石祠に祭られてゐる。

○市川の湯の壺錢、若くは壺錢登願なるに、ながしの八厘は東京にくらべて、釣合はぬ事なり。出て來りたる三助の年六十とばかりにても、巳に異なるを重ね、異なるは、女なり、ばい様なり。かの大金のおきくならねば、これは此方より薄氣味わるきま、お断りを申しぬ。
○おなじく市川の理髮店にて、組合の直段附なるものを見たるに、菊込いくら、顔刺いくら子供いくら末に、僧侶四錢とありしは、勿論倍なるべし。これは坊様の謂にあらざ坊主頭になるの義なり。(縁雨—ひかへ帳)

(二) 佛 閣

△千葉寺 せんすうじ 阪東三十三ヶ所觀世音、二十九番の靈場、海上山千葉寺は、千葉町の南端なだらに高さ千葉寺區にあり。眞言宗の中本寺で、新義派に屬し、和銅二己酉年行基菩薩が此地に來り、櫻樹を以て十一面觀世音を刻み、唐の西明寺宗鑑大師の作聖觀音を腹籠として是れを安置し開山した。後聖武天皇より道場を三界六道に、寺號を海照山(後に海上山と書く)觀音院青蓮千葉寺と勅錠を賜はり、伽藍頗る壯嚴でめつたが、永曆元年雷火の爲めに、多くの什寶等と共に悉く燬焼した。時に本尊の觀世音は西方八丁も隔つてゐる。高地の櫻樹に懸つて災厄を免れたので、爾來該櫻樹を眞木まきと稱へ、大治元年千葉介常重之れを修築、堂宇を眞木の側らに移し、建久三年常胤是れを營繕した。夫れ等の譯から村民は今でも櫻を薪材には用いないとの事である。并して曩に雷火に罹つた永曆か

ら安政に至る迄には、前後四回の兵燹に罹つたとの事である。而して往古寺領は千葉寺村を統轄して居たのだが、織田信長天下に令し、一旦所領を十分の一に減せしめられ、後天正十九年辛卯十一月徳川家康の幕府になつて、先の如く朱印地百石を賜はる事になつた。

△來迦寺 本寺は北道場に在り、本尊は毘首羯磨の作にかゝる阿彌陀如來の立像で日本三體の一に數へられてゐる。健治年間時宗の開祖一遍上人の創立にかゝり、京都智恩院の末寺で知東山來光寺と號してゐたが、天正十八年萬里小路秀房卿の男正親町天皇の御猶子滿譽尊照大僧正が、家康の命に依つて是れを中興し、淨土宗とし來迎寺と改め代々千葉氏の歸依する所となつて、氏郷等七基の墓碑は現に同寺に存してゐる。

△大日寺 阿比留山大日寺は天平寶字元年仁生菩薩の開基で、眞言宗に屬し

現に千葉神社の隣にあり。千葉氏累代の菩提所であつたが、中世以後は頗る荒れすさみ、寶物等は多く千葉寺に歸した。併し常將三代の孫千葉介常兼以降胤將迄十六世の墳塋は今も境内に在る。尙境内の薬師堂は本堂と共に、明治十四年火災の際に焼失し、什物等は悉皆烏有に歸したので、現に残つてゐる主な物は、月日星三光の御鏡と云ふ直徑一尺位の鏡である。是れは安元年中胤政の奥方が子が無いのを憂ひて、薬師堂へ七日間午の刻參りをしたら、其の曉に月日星三光の鏡が胎内に入つた夢を見、忽ち懷妊して長子加曾利權之介を生み、後十一人迄設けたので、此鏡を本寺へ奉納し、爾來此鏡を子安鏡と名付け、鏡の裏面を摺物にして子の無い女の裸守（むだまもり）にすると靈驗忽ち現に懷妊すると云ふ事である。

△滿藏寺 場所は寒川片町、本尊には阿彌陀如來を安置し、曹洞宗である。而して本寺は、後華園院の御宇、赤松滿祐の軍と足利の軍と相闘つた所なので、

結城山と號してゐる。其の時斃れ死した士卒の甚だ多かつたので、追福を祈る爲め、永享十二年足利の老臣中川關之丞良久に依つて創建された。稱名堂外に滿ち、偏く萬徳を藏むる故に滿藏寺と命名するに至つたのであると。

△光明寺 吾妻町二丁目に在る。今其の由結を聞けば、千葉家二十五代勝胤の六男なる當時の本寺妙見寺座主常覺大僧都が、永祿九年に創建（たて）たもので、天正十九年には徳川家康公東金御巡行の折妙見寺へ御止宿になり、其節境内除地として、下されたと云ふ事である。本尊は不動明王、境内虚空藏堂は明治十四年火災の爲め焼失した。

△正妙寺 是れ宗祖日蓮の徒弟師阿闍梨日高が、正和元壬子年の四月に創立し、本尊は多寶佛、釋迦佛及び宗祖日蓮であつた、場所は本町一丁目だが、明治廿九年長崎縣下へ移轉して今は無し。

△東禪寺 曹洞宗、千葉家十三代重胤の創立で、明治十二年三月一度び祝融の災に遇ひ、灰燼に歸したので、堂宇は明治十五年再健された。場所は西猪の鼻臺、本尊は薬師如来。

△本圓寺 本町一丁目に在り、永徳元年三月、日什聖人の開基である。本尊は多寶佛、釋迦、日蓮の諸佛で、境内は總て八百卅五坪、門内の池には、菖蒲杜若が多く殖えられてある上、苑の内には雜草好き程に繁つて居るので、夏の朝など此處に來るとすがくしい感じがする。

△胤重寺 宇西猪の鼻臺に在り、開山は千葉介常胤の四男武石三郎胤重の末孫武石三郎胤盛の弟が、祖先胤重の爲め、永録年中是れを建立したので、胤重寺の號がある。淨土宗鎮西派で來迎寺の本寺になつてゐる。本尊は阿陀陀如来。

△寶幢院 勝胤の男妙見寺第十四世覺胤僧都が元龜二年に堂宇を院内の地に創

立した。光明寺と同じく天正十九年徳川家康公東金御巡行の折、妙見寺へ御止宿になり、其節境内を除地として下された。宗は眞言に屬し、本尊は如意輪觀世音である。

△本敬寺 本寺は長生郡茂原の巨剎藻原寺の末寺で、本堂には多寶佛、釋迦佛、十界諸尊、日蓮の諸佛像を安置してゐる。明應元年壬子年七月二日日傳聖人の創立にかゝり、場所は本町二丁目である。

△宗胤寺 延徳二年、千葉介胤の次男宗胤が開いたので、宗胤寺の名がある。曹洞宗で、聖觀世音菩薩を載き場所は宇川崎裁判所の裏手にあり、境内には毎年白梅咲き、靜寂な趣がある。

△高德寺 曹洞宗高德寺は西猪鼻臺に在り、宗徳寺の末寺で、貞治四年千葉介胤の息男胤高の開基にかゝり、本尊は地藏尊である。

△海藏寺 寒川片町にあり、足利七代義勝の開基で、嘉吉二年に創建され、本尊は觀世音菩薩、曹洞宗である。

△知光院 市場師範學校の並びにある。真言宗で本尊は不動明王、千葉家廿一代康胤康正年中に於て開かれたとの事だが、詳らかには判つて居らない。尙同寺内には弘法大師の堂宇もある。

△眞福寺 寒川宇上町にある真言宗の寺で、本尊は藥師如來である、由緒不明。

△光明院 寒川仲宿にあり、本尊は不動王、境内には大師堂がある。
本町は千葉氏の昔から、明治二十年頃に至る迄に、幾度びか大火があつた爲め、未だ一回も其の災ひを蒙らぬと云ふ社寺は無いので、折角の古寺名利も什器賣物の残るもの、甚だ劣しいのは遺憾である。夫れに此町は徳川幕府の末には人家も殆んど數ふる程に衰頽したのを、其後縣廳の移さるゝに及んで、他地方か

ら流れて來た者が多きを占るようになったので、随つた夫れ等の人々は此地の寺院等を崇敬するの念に乏しく、自然荒廢するもの、益す夥しくなるに、一向願慮しなかつた爲め、近年名のみ存して、堂宇等の影も止めないもの、漸く多くなつて來たのは憂ふべき事ではあるまいか。

尙此他宗教の團社としては千葉教院あり、又學生を中心とせる樹徳會もあつて、時々佛教に關する講演等をして居り、キリスト教に至つては、日本キリスト教會(市場)同盟教會(通町)普及福音教會(本町三)聖公會講義所(富士見町)旭橋講藤所(旭町)及び天主教會(市場)等があつて、何れも上下を通じて多くの信徒を有してゐる。

名所舊蹟

(一) 東 南 部 (猪鼻城より 千葉寺方面)

◎猪の鼻臺 街の中央部東の方に當り、嶙峋として聳えてゐる山は是れ千葉町第一の勝地猪の鼻城の古跡だ。臺の上に亭々たる古松の一枝は垂れて街を臨眺してゐるやうである。扱臺に登つて眼下を見れば、織るが如き町の賑ひ、其處此處に建つ公設官衙、停車場から寒川に向つて走れる一筋の道、道の端れには漁家と覺しい疎末な屋根が重なり合つて見える。其の先は町よりは高く、遙か斜めに傾きかゝつてゐる浩淼たる海面で、飛び交ふ鷗、往來の白帆も眺められ、西北の方潮續きには、寄せた藻のつら一列青々と残つて居る登戸の磯や、稻毛黒砂の丘や洲が、模糊として霞み。更に目を轉じて東北の方を望めば町とは一帯の

田畑を隔て、千葉監獄の赤瓦、東臺の丘には鐵道聯隊の營舎も見える。更に夫れ南方の展望は、相馬日記に「安房上總の山々も海のあなた及ぶ計りに見渡さるゝ所なり」と記してある如くである。而して此所を猪の鼻と稱する所以は、平良文の曾孫常將が下總權介に任ぜられたに次で、其孫常兼も亦下總權介に任ぜられ、居城を上總の大椎に移した處、其子常重は大椎は守介の地に適しないのを知つて大治元年此地に城を構ふるに至つたので、猪は獸類の中でも最も勇なるもので殊に其鼻の先に恐ろしい力があるから、猪鼻城と名付けたとも云ひ、又此地町の戌亥の方位に當つて突出して居るので斯く名付くるに至つたとも云て明かでない。そは兎も角當時猪鼻城の廣さは醫學専門學校から鮎田の池に迄及び宏壯たるものであつたが、後年千葉介胤直の世に、同族中寒川の領主原越後守胤房と千葉寺附近の主圓城寺下野守尙任とが、權を争つて確執を生じ

遂に相闘ふに至つた時、胤直は圓城寺方に黨したので、胤房の激怒する處となり大兵を率ひて、攻め寄せ火を猪鼻城に放つたので、さしも堅牢な城壁も灰燼に歸して了つたのは實に惜んでも餘りある事である。而して臺の中幅から頂にかげ一面櫻樹が植付けられてあるので、花咲き滿つる時は彌望皜然白雲の如く、遠く緑の海と相對して、美しい一幅の畫のやうな景を呈する。

千葉殿の狩屋引いたり枯尾花

蕪村

◎御茶水　お茶の水の舊跡は猪の鼻臺の下、萬菊樓の前にある小さな祠の下の井戸で、縣道に添ふて居る目抜な場所であるが人多く是を知らない。其お茶の水と云ふ所以は往古頼朝が安房上總を経て千葉に來り猪鼻城に憩ふた時、此井戸から水を汲んでお茶を入れて進めたら殊の外賞美されたと云ふので其名がある。井水は今も絶えず吹き流れて居て、又不動の瀧とも呼ばれてゐる。

◎七ツ塚　七つ塚は千葉常胤の子七人を七天王と稱して祀つたと云ふ説が専ら傳はつてゐるか、七天王は房總三州の各地に亘り離居して居た事故七つ塚の所因も疑はしい。今も醫學校の中に三箇所、其圍圍にも三箇所の都合六つ丈は残つてゐて、何れも塚には巨松が殖えてある。

◎龍田　旭町の裏猪の鼻の丘陵に龍田りゅうだと稱へる水田がある。其昔龍が其所から昇天したとでも云ふ話があるのだらう。維新前千葉神社祭典の折、十二段の舞ひをし乍ら本町通りへかゝつて來る大船の中、龍頭を冠つた舞方は遙かに東方此田の方に向ひ恭しく一禮した。

◎観音塚　今の海上山千葉寺から東方に去る八丁、永曆元年焔燒前同寺の存した處は聖武帝より三界六道の勅額を賜はつた舊蹟として今も遺つてゐる。

◎姥ヶ臺　千葉寺に姥ヶ臺御殿と云ふのがある。之は千葉家の姥が千葉寺邊に

住んでゐて、能く忠節を盡したので、死後特に塚を基て、其の冥福を祈つた處だとの事である。

○總 武 鐵 道 (子規)

昔は隅田川が武總下總の境を流れけん今は此川を間にして市川より先は下總なり總じて此國には山といふものなく只一望の平野大波を打ちて少しづゝの高低ある春畑蕪畑は時々二三十戸の村落と饒十程の松原とに破らるゝのみ遊かに見ゆる山の眞白に地を離れて望えたる霜月の富士は東京にて見るよりも大きやかなり

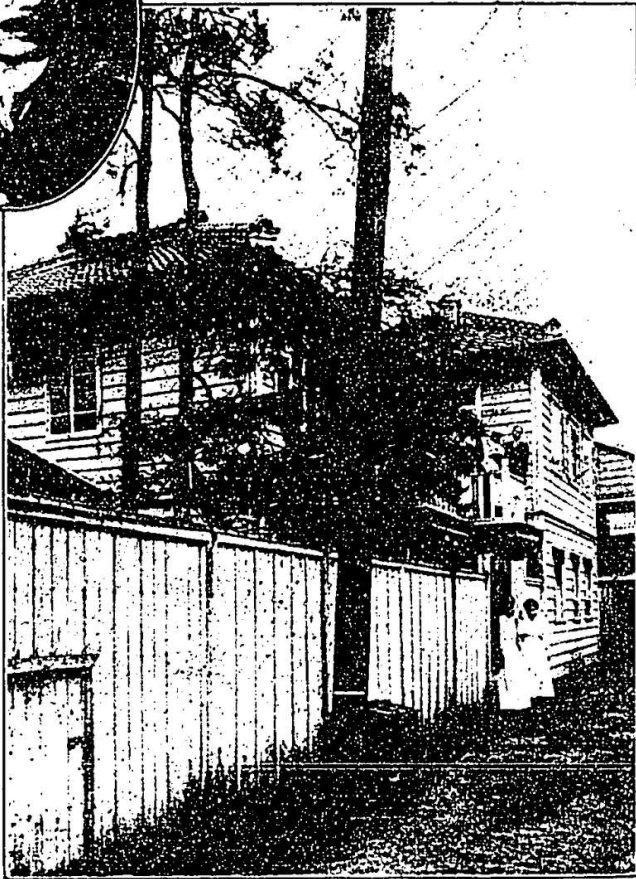
麥の芽のほのかに青し朝の霜

(二) 中 央 部 (市場音葉町附近)

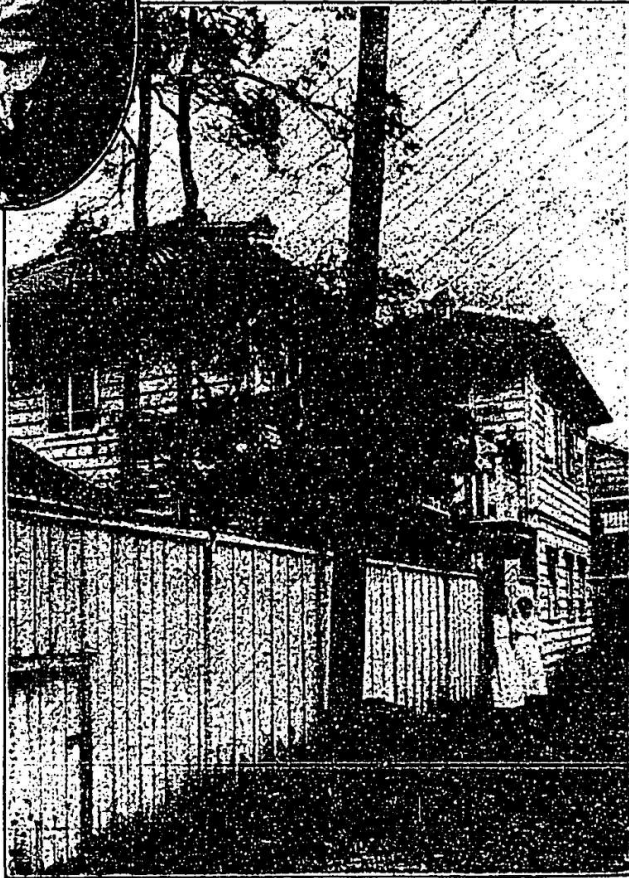
◎羽衣の松と池 羽衣の松は縣廳舎の側公園(たな)の中央に在り、幹丈餘青々として形好く、蟠根九泉に入るの感がある。此松に就ては種々の傳説がある。千葉介常胤公一日池邊を逍遙して居ると松の枝に羽衣が掛けてあつて、尙池の邊りには蓮の糸を手繰つ居る天女の姿を見たので、公大に喜び遂に婚して七子を産ませしめ一人は僧に他は千葉の六黨になつたとの説がある。并して川田甕江の千葉縣慰忠碑にも「天女降兮猪鼻臺爵古松兮桂羽衣七夕兒兮化七兒弧矢利兮昌本支齊東歸兮語怪奇」との語がある、依て羽衣の松と云ひ、池を羽衣松と云ふらしい。併し此處に今一つ斯う云ふ説がある。夫れは常胤の孫成胤と云ふ眉目清秀の才子が京師へ上つた時官女それがし(或云ふ吾孫子の宮)に戀慕され袂をひかへて去なされたので、と二人は連れ立つて千葉へ來は來たが、其頃の風習とし

て武人と云へば卑しめられ、宮方から下婚する事は六つヶしいので、丁度今の羽衣の松の在る處迄来て、官衣を脱ぎ捨て、松の枝に懸け、其他の物は池中に投げ入れて、其身は成胤と共に入城した。後武士等は其官衣を見付けて慥しみた女が天降つたのに異ひないと云ひ出したと云ふ優艶な物語もある、眞偽は兎も角として此話が一番詩的で面白い。

◎妙見田、是れは口碑に遺つてゐるのみであるから時代年月等は定かでないが上州花園村から持つて来た寅童子の尊像を後年千葉に移す時も、夜陰に乘じ窃かに負ふて、今の縣廳の邊まで來ると、彼方から花園村と書いた提灯が二つ走つて來るので今の師範校下の當時字三隅田に遁れて田の泥中に尊像を埋めた處後日夫れを掘出そうとするに當つて如何にするも場所が判らなかつたので、金剛寺の覺山大僧正に乞ひ都橋の邊かたで、讀經とくきやうをしてゐると先の夜埋めた場所に



(氏郎三六村田長院)院病村田

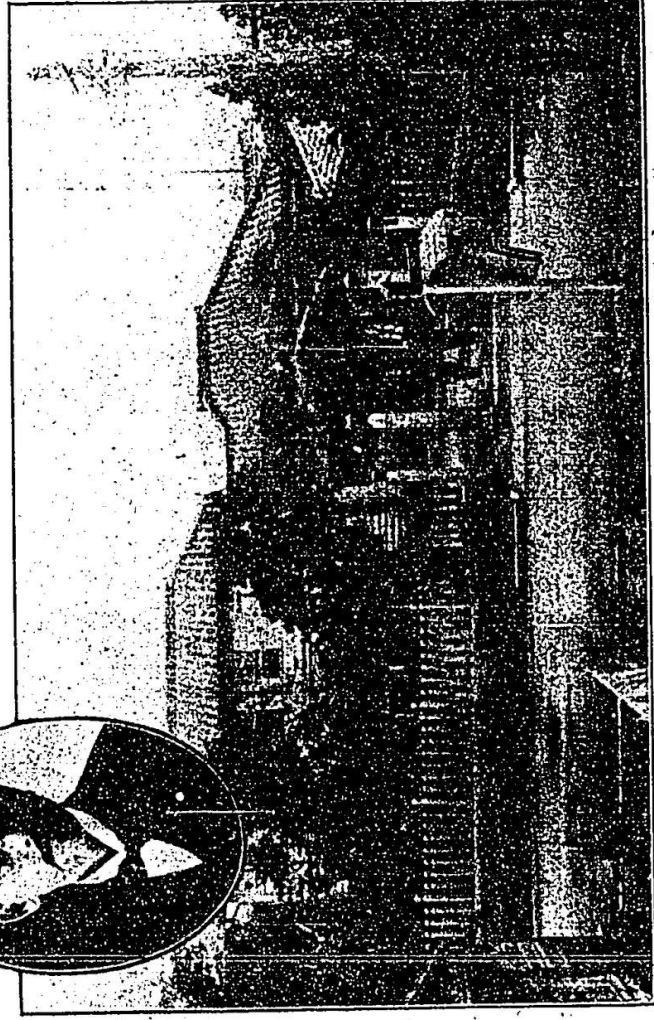
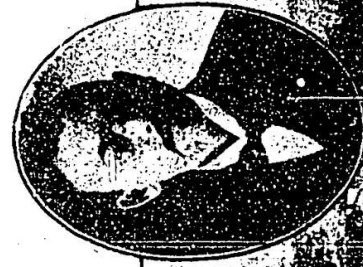
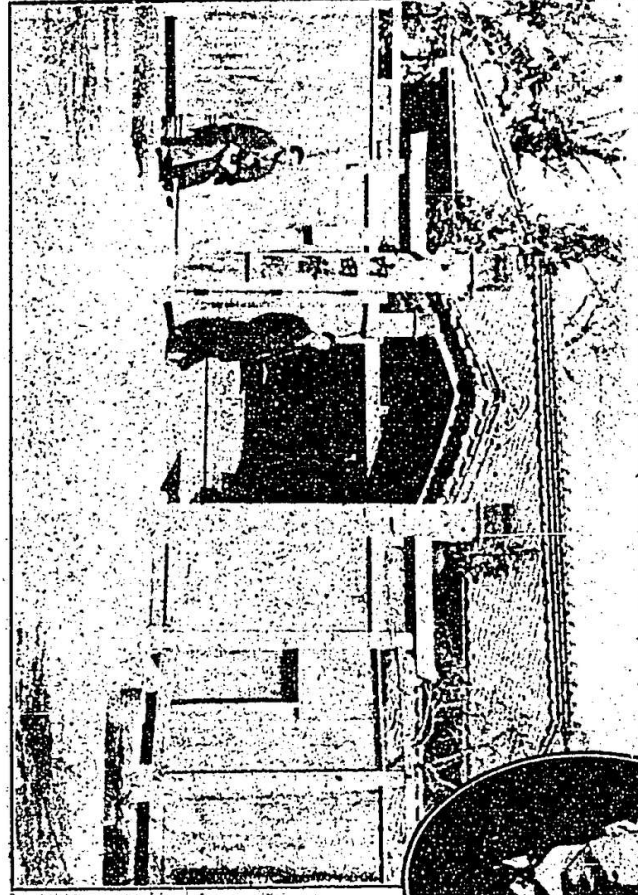


(氏郎三六村田長院)院病村田

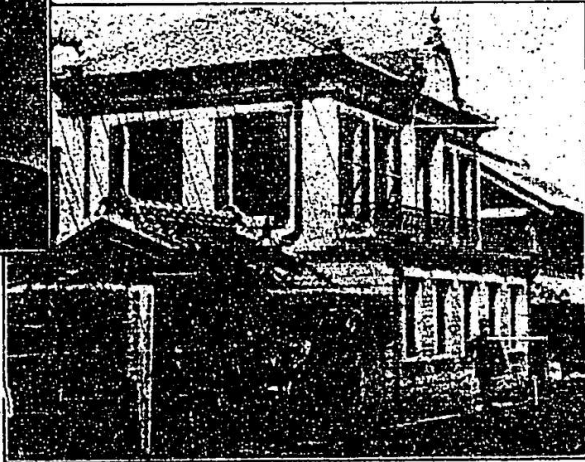
を武人と云へば卑しめられ、宮方から下婚する事は六づヶしいので、丁度今の羽衣の松の在る處迄来て、官衣を脱ぎ捨て、松の枝に懸け、其他の物は池中に投げ入れて、其身は成胤と共に入城した。後武土等は其官衣を見付けを悩むみ天女が天降つたのに異ひないと云ひ出したと云ふ優艶な物語もある、眞偽は兎も角として此話が一番詩的で面白い。

●妙見田、是れは口碑に遺つてゐるのみであるが、時代年月等は定かでないが上州花園村から持つて来た貧童子の尊像を後年千葉に移す時、夜陰に乗じ奇かに負ふて、今の縣廳の邊まで来ると、彼方から花園村と書いた提灯が二つ走つて来るので今の師範校下の當時字三隅田に通れ、田の泥中に尊像を埋めた處、梅田夫ねを堀出さないとすると、如何に窮む場所が判らなかつたので、金剛寺の覺山大僧正に乞ひ都橋の邊まで、護經をしてゐると先の夜埋めた場所に

內田醫院院長內實氏



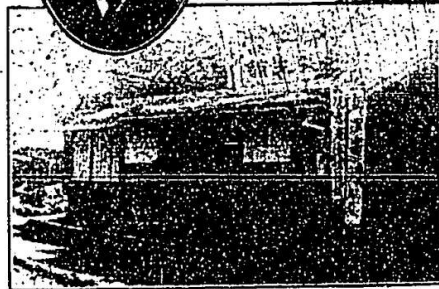
仁山臺病院久城一起氏



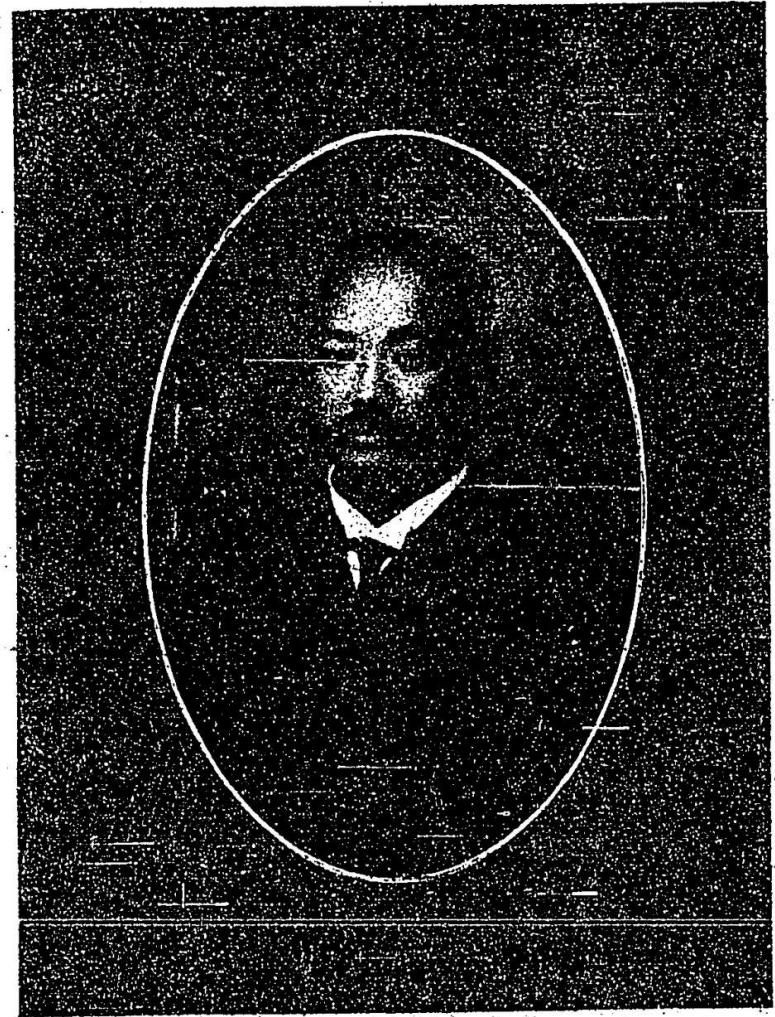
(氏春義塚大 長院) 院 醫 堂 吉 有



館 生 長 前 院 病 立 縣

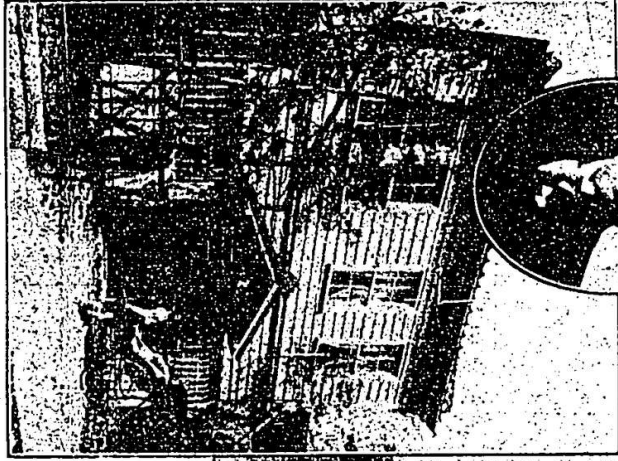


(氏郎次香倉鹿人主) 面 表 同

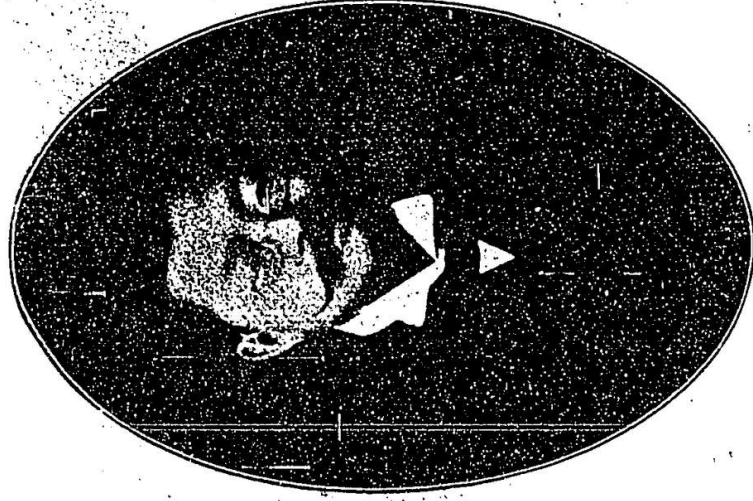
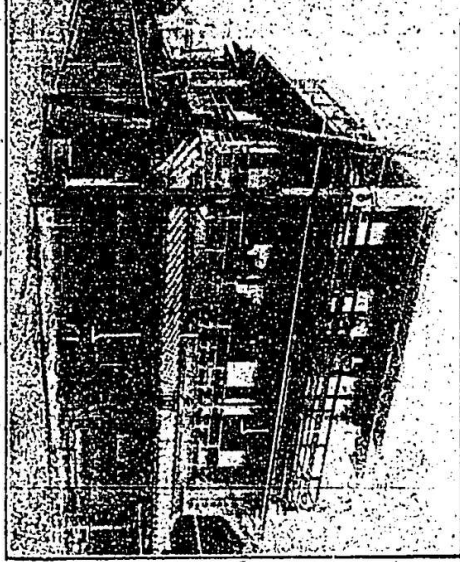


氏 吉 平 古 清 士 護 辯

所務事員請築建祖元秋



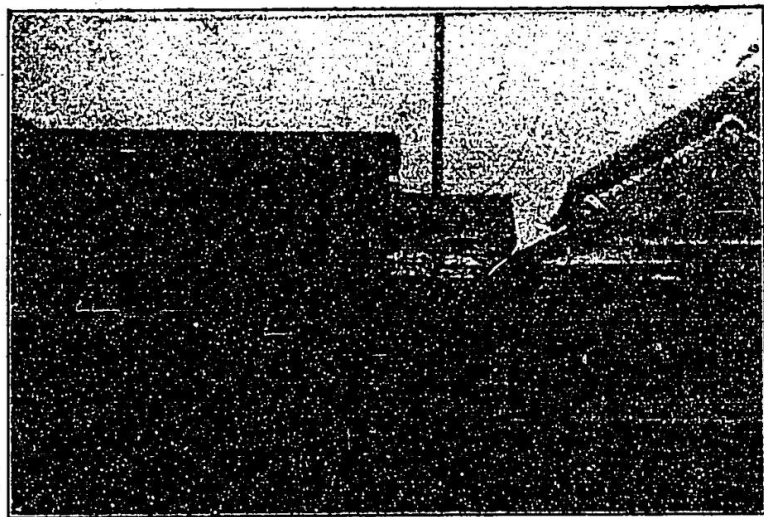
(氏茂、元秋、主館)附奉松館藍町本



氏郎太眞川中士誠辯



氏吉正野矢 主店女堂賣多利藩



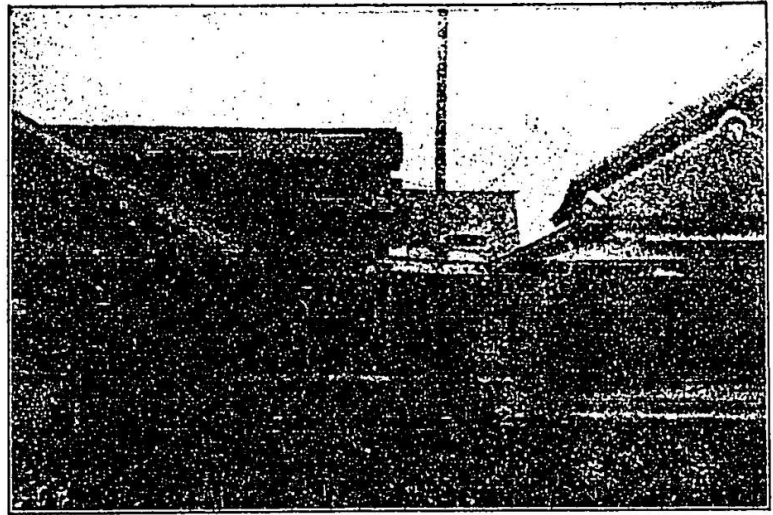
蘇我町今井製紙場



蘇我町小泉製紙場

當つて御光が輝いたので早速手で掘り上げ、近所の甘酒屋の小家を叩いて老夫婦を起したら、夫婦は早速有合ふ甘酒で鄭重に御尊體を洗つたので夫れを一先づ市場迄持つて来て休んだものらしく、爲めに同所にも假屋が定められたのだと云ふ説もある。而して三隅田は夫れより妙見田と稱へられ、田の中に妙見塚と建てられ一切不祥な肥料を用いずに耕作せられてゐたが二三十年前埋められて了つた。

●御殿地 今裁判所のある所は維新前には千葉三郎兵衛の屋敷跡なので御殿地と云ひ、東側に正門があつたものと見へ其の通りを俗に御殿前と云つた。而して御殿跡の周圍には幅四間許りの土手と濠があつて堀は其儘田にして稻を作つて居た處、恰度外交問題の八釜間敷くなつた當時、同所及猪鼻臺へ都合百二十匁の家を構へ佐倉侯が家臣等を廻して置いて沖を曲かに黒船が通ると見せや、



蘇我町今井製紙場



蘇我町小泉製紙場

嘗つて御光が輝いたので早速手で掘り上げ、近所の甘酒屋の小家を叩いて老夫婦を起したら、夫婦は早速有合ふ甘酒で鄭重に御尊體を洗つたので夫れを一先づ市場迄持つて来て休んだものらしく、爲めに同所にお假屋が定められたのだと云ふ説もある。而して三隅田は夫れより妙見田と稱へられ、田の中に妙見塚と建てられ一切不祥な肥料を用いずに耕作せられてゐたが二三十年前埋められて了つた。

◎御殿地 今裁判所のある所は維新前には千葉三郎兵衛の屋敷跡なので御殿地と云ひ、東側に正門があつたものと見へ其の通りを俗に御殿前と云つた。而して御殿跡の周囲には幅四間許りの土手と濠があつて堀は其儘田にして稻を作つて居た處、恰度外交問題の八笠間敷くなつた當時、同所及猪鼻臺へ都合百二十竈の家を構へ佐倉侯が家臣等を廻して置いて沖を曲かに黒船が通ると見るや、

俄かに寒川の満藏寺海藏寺等に集まり炊出をさせなどし萬一の備へをしたものださうだ。

漁史の寓せし梅松樓の側に堂有り不動明王を祭る、蓋し成田の出店ならん、二十八日には獲日に當れり、堂の前面に商賈蟻集す、其の景況府下の縁日と一般、但だ其の賣る所の物多くは農具漁具に屬す、鋤有り鎌有り網有り、小兒の手遊びの如きは最も粗品にして、雜るに古攤古人形の類を以てす、其の俗の淳朴なる推して知る可し、此の夕少しく閑なり、出で、市街を歩す、寄席あり其の紙燈に大書して田邊大南龍と云ふ、僕獨かに聞ふ、南龍は東京屈指の講談師なり、宜なる哉此の地に來れば尊號を加へて大と云ふや、是れ歐洲に於て非常の武英なる帝王にセザレト(即ち大)の稱號を加ふるに同じからんと、因て從者をして是れを窺はしむれば、何ぞ圖らん小の最も小なる者、即ち南龍先生の荷禪弟子なり、嗚呼狡黠兒の田舎漢を愚にするも亦甚しい哉(成島柳北——千葉土産の一節)

(三) 西部及北部 (寒川、通町、 院内方面)

◎君待橋 寒川の通を真直に行つて、左五田保の方へ行く途と、大橋の方へ出る途と、二筋に分れる所にある小さな石橋こそ、聞くからにしほらしい名の君待橋である、往古都川には今の君待橋と大橋との間邊りを流れて海に注いで居たので、従つて其處に架つてゐる橋ももつと大きいものであつたに違ひなく、人家杯も稀に、草離々として繁つて居たとの事である。此橋に就ての傳説としては治承年間千葉之介常胤が源頼朝公の駕を此所に迎へた時、公は橋の名を問はれたが誰あつて答へる者の無いのに、常胤の季子東六郎胤頼が見え、隠れ八重の沙路の待つ橋を渡りもあへず歸る船人

と詠進したと云ふ昔武夫の風流談がある。君待橋の名は因つて起つたのであらう。又藤原實方朝臣は歌枕見にと奥州へ左遷されて此處を過ぐる時、村人に橋

の名を問ふたら、君待橋と答へたので、實方は懷紙を出して

寒川や袖師ヶ浦に立つ煙君を待つ橋身にぞ知らる、

の歌を記して去つたと云ふ事もある。又橋に就て或る老人の話として傳はつて居る一説は、中古此橋の邊に美人が居て、常に橋の袂に佇立して、長州から來る情人を待ち待ちした。處で或日雨が激しく降つて、濁流汨々として渦巻き遂に橋を流して了つたので、美人は呆然と立つて居ると、情人は斯くても厭はず通ふて來た處が橋の無いのに驚き早り、衣を脱いで水中に這入つた處、忽ち激流の爲めに浚はれて、見る／＼渦中に卷かれて行くを、美人は救ふにも救はれず、喪心し情郎の跡を追ふて、共に身を濁水の中に投じた依て君待橋と名付くるに至つたのだと云ふ小説的な哀れな話もある。

●綿打の池 綿打と云ふのは千葉停車場の北交通兵旅團の下に在るので、是

は舊幕の末千葉の大和屋が松原新田（新町）を開いたので作草部區民は快からず、夫れ等が因て其池の邊の地籍が寒川作草部兩地民間に争ひとなつた時、寒川の綿打に太郎兵衛と云と云ふ氣轉の利いた男かゝて、寒川辨天の石と云ふのを獨りて擔が出し、夜の間に行つて其池の側へに立て、了つた爲めに、とう／＼其處等は寒川の地區になつたので（或ひは甕も池中に埋めしと云ふ）寒川村民は大に喜び、綿打の池と命じたのだと云ふ。

●甘酒の祠 妙見田から掘出した寅童子の尊體を甘酒で洗つたと云ふ甘酒屋夫婦は死後妙見社内に小やかな祠を建てられ今でも竹筒、瓶、徳利等に甘酒を容れて御格子に吊してある、是れは何か祈願（殊に風邪全快）をかけた時成就したら御禮として甘酒を進める事になつてゐるのだ。

●富士見橋 富士見橋は寒川新田と通町の間架つて居てそう古い名の橋では

ない。只此の橋の上に立つと正面に富士が見へるので斯く名づけるに至つたの
じやない。

下 穂 に て

旭のさすや紅うかぶ霜の富士 子 規

○總 武 鐵 道 (子規)

海見えて白帆遠く右に見ゆる烟突の高きは行徳にやあらん
左に見ゆる藪のならびは船橋なるべし

朝霜や屋根のつゞきの安房の海

船橋を後にして千葉に着けば此處にて車を下る者多し次の
停車場を四つ街道となん呼べる

梅杭や四つ街道の冬木立

(四) 七不思議

千葉の七不思議と云ふが何れと何れて七つであるのか確かに定まては居らぬ。
左に是等も七不思議の中に數へられようと思ふ程の物二三を書き蒐めて見た。
◎其一紅嶽水源池 紅嶽と云ふ名が既に沃怪趣味ではないか、こは街にあるの
ではないが、街の附近の田へ灌ぐ水は多く此池から出る。場所は町を去る事約
一里半の都賀村に在る小高い丘で、其中幅にある泉が夫れた。泉の廣さは僅か
三坪程ではあるが、水は四季絶えず滾々として二尺餘りも噴き上げて湧いてゐ
るのが、怎うして其處から斯く水が湧出するのであるか、其原因が判らない爲
め七不思議の一つに數へられて居るのである。そして湧き出た水は小流れや、
赤土の間を涓々と流れ農田に灌漑の價を與へて居るのだ。泉の周圍は盡く谷田
で夏は蛇夥しく、人此丘に遊び池畔の辨天社に參ると一種の靈氣に打たれる。

●其二焼米 千葉胤直の代、原圓城寺の合戦に原勢が胤直を怨み猪鼻城を焼打した時の事であらう、千葉家の家臣等は兵糧武器も其儘にして城を遁れたので、其跡に遺棄された多くの米が焼て地に埋まつて居るので、今でも時々焼米が出て来て盡る事がないと言ひ傳へられてゐる。

●其三池田坂米の石 猪鼻臺の邊を往時は猪鼻臺と云つた事は地區の項に是を説いた。而して今も猪鼻臺の後方圖書館跡から師範校の方へ下りる細い坂があつて其下に小やかな板橋のある事は知つて居る人は多からう、併し此の坂此の橋に池田坂池田橋の名のある事を知つて居る人は少ない。まして其坂には米の瀧と云ふ奇警な逸事が残つてゐる事を傳へ聞いては益々面白くなる。是れも矢張原圓城寺の戦ひの時と思ふ。敵勢は裏木戸に當る此坂口へ激しく寄せて來るのを遙かに望んだ一將は、機智を出し坂の上から幾俵か白米の俵を割き開いた

ので、坂に沿ふて滾々と落つる米粒は恰も瀧の如くに見へたので、敵兵は進んでも益の無い事を知つて引き返したと、而して其米は池田橋の邊に落ちて後石に化したとか云ふ。

●其四薄墨の繪旨 平貞盛、良文及び藤原の秀郷等の功に依つて、天慶三年二月十四日遂に將門を討戮した、其の由を京師に奏上した際授賞のあつた事は勿論であるが、夫れに付て一條天皇から薄墨の繪旨と云ふを賜はり今も存して千葉寺に在る。是れは墨色甚だ薄く、常は如何に日光に晒すも判讀する事は出來ないが、千葉家に亂が起る前とか、又は將に衰亡に傾いて來る時には必ず繪旨の文字が明かになつて讀み得られるので、幾度びか災厄を未然に防いだとの事である。

●其五戻り鐘 千葉寺の境内に鐘樓があつて今も破鐘が吊してある、是は龜山

帝の弘長元年改鑄を企て、江戸へ送つた時、鑄金師は近い中其の仕事にかゝらうと鐘を細工場に置くと、夜更になつて「千葉寺、千葉寺」と泣き出して古郷を慕ふ爲め遂に其儘千葉寺へ送り戻したので戻鐘の名がある。

地つゞきに下總見ゆる柳かな

昌

作

(五) 千葉八景

一、猪鼻の秋月 猪の鼻臺は櫻花も好く、又白雲が降り積んだ静かな日、遙かに町から仰ぎ見た景も捨て難い趣きではあるが、槎材たる古松の一枝へ正に一魂の月が蒐つて、幽かに寒川の海が夢の様に浮んで見える景は又格別である。

二、千葉寺の晩鐘 千葉寺の鐘は別項千葉寺の條に書いた彼の戻鐘の事で、境内の鐘樓に今も釣しては有るが、昔ながらの破鐘で、歸る人の後から、花ヒラヒラと散りかゝる春の夕の淋しくとも、無情を告る術だに知らないのは却て一入の哀れを増すかも知れぬ。尙千葉寺で最も勝れてゐるのは、櫻花蔭に遅櫻で、花の頃は日頃寂しい千葉寺通りも人の往來絶えず、境内には茶店が出る、露店が出る。莫産を敷き蓆を筵べて、其上で重の物を開くもあれば、盃を交はして三昧を弾かせる酔興な者もあつて仲々に賑ふ。

三、大橋の晴嵐 大橋は都川の河口に架つて居る千葉町で一番大きな橋だ。千葉の町から行く人は、此所へ来て始めてバツと明るい海を眺める事が出来る。橋の上に立つて海を見渡すのは心地の好いものである。川上には遙か畑中に赤十字の白聖が見へ、遠く沖には漁る小船、近く橋下には傳馬船が舳を揃へて並び、海へ注ぎ入る一波々々は、血のやうな色の夕燒雲に染んで赤い。晴嵐とは夕燒を云ふのである。

四、羽衣松の夜雨 蒼翠繪の如く、容瀟洒たる羽衣の松にさら〜と雨が降り灌ぐ、如何にも静かな感じてある。天女が魂の迷つて來るも、斯かる夜にぞ。

三、寒川浦の歸帆 幽かに續いて居る上總あたりの浦々も今は漸く暮れて行く時、三四十艘の漁船は遅く速く洲を指して歸つて來る、その眞帆片帆に海面は暫く處狭き途になる、美しい景色だ。夕炊きして待つ船夫が妻等の心や如何に。

六、東臺の暮雪 東臺は猪の鼻と相對して千葉の街の北端に位し、停車場の上に當つて、コンモリとした森影の中に二三の樓の見える所である。迷濛と日の暮れる時、頻りに雪の降り積るさまを町から仰ぎ見た景色には又勝れた趣がある。

七、鮒田の落雁 鮒田(或るは舟田)の池は猪の鼻臺の後にあつて、葦や芒に圍繞された、青苔蒼然たる古池である。昔は其邊も猪の鼻城の壁内にあつたものだとの事、毎年冬雲の重く垂れる頃になると幾列雁の竿は腸の千斷れるやうな聲で啼き乍ら其池に落て來る。

八、登戸の夕照 登戸は千葉町の西の端れて蟹舎が散在して居る蟹村である。登戸の町を過ぎると左は葦芳芒の草叢、右は小松原で砂濱は直線に稻毛迄も續いて居る、海の景色の最も廣く見渡される所である。晴れた日も暮迫り遠い國

の山々は薄く黒ずんで行く海の果に、眞珠でも溶かした如ごとに沈んで行く夕日の影は美し。

△主なる旅館 梅松屋 加納屋 松葉館 萬菊樓 吉田屋 油屋 梅老屋 時田屋 牧野屋 羽田屋 松島屋 森川屋 晋妻屋等

下總の國に山なし菊の花

保 吉

勸業

△水産業 常町の水産は寒川で取れる鯛、蛤を始めバカ貝等の貝類が主で、是等の貝類は漁業組合の監理の下に飼育されて居て、附近各地及び東京へも出し魚類としては鯛、鱈、鰯、鰯等て多くは市民の需要に供する位な額よりか捕れぬが、中で背黒鯛、小鰯の栗漬及び貝煎餅は名物になつてゐる。

△澱粉製造 五田保から蘇我野へ行く途に數多の澱粉製造所がある、是れは多く千葉東葛飾附近から取れる甘薯を用ひ其の皮を削ぎ、精製して日に濡し粉にするので、主として機業者の用に供せられる

會社及銀行

△千葉電燈會社 本社は明治卅九年新町の地に創立され、資本金は十萬圓、發動機は百五十キロと七十五キロの物が各一臺づゝあつて廣く供給をして居るが

町の繁榮と共に、電燈の需要は益々増加する傾向があるので、近く今一臺最新式機械を輸入するとの事、社長は紅谷四郎平氏、重役は孰れも當町知名の士、支配人今井與志雄氏、技師杉本武之助氏は共に勤勉を以て聞へてゐる。

△千葉縣農工銀行 本行の目的は地方農産業の發展を計るにあつて、農産業者に對する資金融通の機關となつてゐる。而して資本金は八十萬圓、債券發行高は三十萬圓に及び、四十三年度下半期に於ける年賦貸付金八十六萬八千餘圓、保證年賦貸付八十五萬九千餘圓に達し益々行務は擴張されつゝある。場所は寒川新田(頭取) 宇佐美敬三郎氏

△千葉割引銀行 場所は町の中央大和橋の袂、株式組織で資本金十二萬圓、頭取は紅谷四郎平氏として町の信用は殊に厚く、四十三年末現在の預金高は三十七萬餘圓て其運用宜しきを得て居る爲め每期一割以上の配當をして居る。

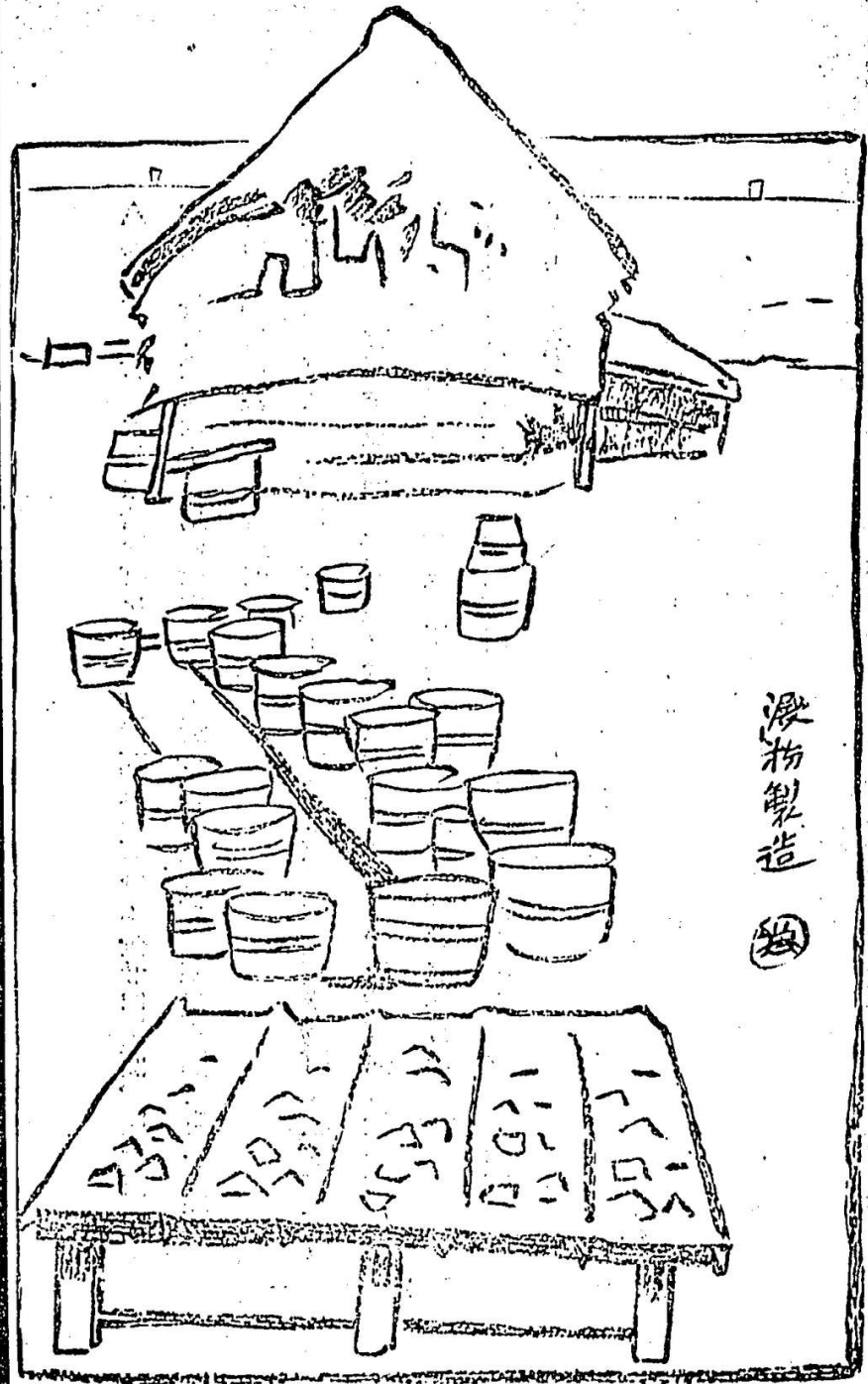
△九十八銀行 本行は新通町に在り、株式組織で資本金廿四萬圓、四十三年下半期に於て既に六十五期の年度を経て居る古い銀行で、基礎も隨て堅い(頭取)

奥山三郎氏(監督)安田善三郎氏

△川崎銀行支店 支店は本町二丁目、本店は東京日本橋區槍物町に在り、合資組織で、資本金百萬圓に對し積立金百三十九萬圓有り、同貯蓄部も世の信用厚く基礎甚だ鞏固である。(頭取)川崎金三郎氏(支店長)香取健吉氏
其他青物市場株式會社(院内) 屠畜株式會社(寒川新宿)メタルシート株式會社(寒川)等がある。

下總へ半ば落ちけり天の川

ひろみ



漆物製造 (4)

官公署及公設物

◎縣廳 明治六年二月印旛、木更津の二縣を廢して始めて縣廳を千葉の地に置かれたのである。爾後年を経るに従ひ縣廳舍も追々狹隘を感じ破損の箇所亦多きに至つたに付て幾回修繕を施した結果、卅九年の通常縣會に於て、四ヶ年繼續て新築の事に議一決して、四十一年五月から工事に着手し、四十四年五月に全部竣工、五月五日千葉共進會の第一日を下し盛なる開廳式を行ふ運びに至つた。廳舍の位置は寒川通の國道に而して門を構へ、裏は都川を狭んで公會堂と相對してゐる。總面積六百九十八坪餘、室の數は階上廿九室、階下三十六室、地下十六室、設立費は約四十萬圓に昇つたとの事である。

◎公會堂 千葉縣公會堂は一般諸會、式場等に充て又慈善、公共の事を目的とする集會に貸與へる爲め、一萬八千餘圓を投じ、四十四年一月始めて都川の邊

り體育會跡に創設されたものである。堂の建坪は百五十九坪階上は七十五坪の大廣間で中央に百燭の電燈を二個布かれ、大會式場等に充てられ、階下は俱樂部、食堂、應接室、喫煙室、酒保等を設けられ、俱樂部には玉突、ピンポン、輪投げ、蓄音器、オルガン等の設備があつて、何人も十錢の入場料を拂へば自由に遊ぶ事の出来る便宜な方法になつて居る。并して三階は娛樂室に充て基や將棋の設備もあり、猪の鼻臺から東臺、遠くは寒川の沖迄一眸の中に見渡され眺望は極めて佳絶である。

◎裁判所 千葉地方裁判所及び區裁判所は都川の北岸吾妻町區にあり。同所は卅九年九月の暴徒事件の際全焼の厄に遇ひ、翌四十年に改築せられた。宏壯な建物であつて、且つ苑廣く草色青々とし、十數株の櫻は三四月の交美しい花は咲くが、白洲に拽かれ行く囚徒の編笠に繽紛と散りかゝる態を見ては、轉無情

の威に堪へぬ。

◎監獄署 千葉監獄署は以前は寒川の新築移轉した。總煉瓦の宏壯な建物で汽車中よりも遙かに是れを望む事が出来る、全國の模範監獄となつてゐる。

◎交通兵旅團 東臺の後方にある營舎は交通兵旅團司令部と鐵道聯隊の二個大隊で、鐵道隊は全國を通じ此處に一箇所あるのみである。

◎日本赤十字社 日本赤十字社千葉支部は、以前は縣廳内の一隅に在つたが餘りに狹隘な上、救護材料等も縣廳所屬の倉庫の一部に藏置して來た爲め、縣廳所藏の物品と混淆する憂ひがあつたので、明治三十四年新築の議起り、寄附金一萬餘圓を募り夫に補助金等を併せて、今の房總線本千葉驛の側に事務所及び材料廳の新築工事に係り卅六年六月中に全部竣工した。事務所本館は西洋造木

造二階建坪總て百餘坪の大建物である。現會員は縣下に三萬六千人を有し、看護人及び看護婦の養生所なる救護班は猪の鼻臺の上にあつて、校長には三輪博士、講師には縣立病院各醫長及び軍醫の諸氏が教鞭を執つて居るので、其成績は常に全國各班の上位を占めて居る。支部長は現任知事、常務幹部は永井謙藏氏である。

⑨縣立千葉病院 縣立千葉病院は千葉醫學專門學校と共に、猪の鼻後方二萬七千坪の地を領して居る宏大な建物で庭前には、荻生現校長の在職廿五年祝賀の銅像と、前校長故長尾精一氏の銅像とが建つて居る。本院の起源は醫學學校と共に共立病院の時に始まつてゐるので、診察室、手術室、傳染病、小兒科、皮科耳鼻咽喉科、眼科、婦人科、精神病科の各室修繕又は増設され、病室は總て百室患者は二百三十人を收容する事が出来る事になつて居る。

⑩千葉郡役所 千葉郡役所は新築縣廳舎と向ひ合ふてゐる建物で、此所は始め郡制施行以前には千葉市原郡役所と云つたのであるが、其以後市原と頼るゝに付き千葉郡役所となつたのである。本館は他の建物に比し痛く朽廢したので近く改築さるゝ説專である。

⑪千葉稅務署 千葉稅務署は院内區に假設されてあつたのが、四十二年中改築落成と共に今の郡役所並びに移つたのである。二階建總ペンキ塗て美しい建物だ。

⑫町役場 千葉町役場は市場區にあつたのだが、町村制施行當時の建物で、損壞の箇所も多い上、漸時町の發展に共ひ吏員又増加するので、且つ狹隘を感じ改築する事に決し着々進捗しつゝある。

⑬千葉警察署 千葉警察署は本町二丁目に在る總練瓦の建物である。

◎ 巡查教習所 千葉縣巡查教習所は蠶病豫防事務所と共に新築に決し、公會堂側に一萬五千五十坪の敷地を取り、四十三年三月中竣工した。

◎ 度量衡檢定所 縣廳舎の内にある。

其他千葉町所在の會團及び同業組合の主なる種類は左の如くてある、

縣農會、郡農會、千葉町農會、諸産業組合、漁業組合、酒造組合、蠶業組合
落花生組合、水産組合、購買組合、販賣組合、購買販賣組合等

下 總 々 冬 丸 太 一 か に 麥 畑

子 規

宮内省御用 室內壁紙製造

●當所製品ハ從來海外輸出ヲ主トセシキ業務擴張ノ結果内地向趣味ノモノ及模紙ヲ製出シ今ヤ内外ノ需用ニ應答スルニ至リケル

●當所製品ハ時好ヲ趨キテ最新ノ意匠ヲ採リ其飾ノ意匠ヲ録テ受ケタルモノ已ニ數百種又別ニ布地壁紙ノ特許ヲ得タリ

●當所製品ノ種類ハ最モ多シ且其質堅韌ナルニ依リ塵埃ハ潔レル布ニテ拭ヒ得ベク又厚密ナルガ故耐久ノ効力アリ

●當所ハ幸ニ内外顧客ノ信用ヲ得テ年中御注文ノ絶ミナルニ感謝スル所ニシテ是ニ酬ユルニ製品ノ進歩精良ニ勉勵セリ

●今ヤ海外舶來ノ壁紙輸入ノ内地ニ於テ大ニ御需用アル景況ニ至ルは從來ノ壁紙

紙ハ金唐紙ト稱シ美麗ト堅牢トノ二點ア其長ク内地趣味ニ乏シキ缺點アリ因リ反テ海外壁紙ノ需用多キ故ナラン因テ當所ハ安ニ注目シ更ニ内地趣味

味ノモノヲ**新調**セリ

●當所ハ明治二十三年ノ創立ニシテ當時製造所主ハ印刷局ニ奉職壁紙製造主任タリシガ同局ニ於テ同年此製造事業廢止ノ際罷職トナリ更ニ大藏大臣ノ認可ヲ得テ此壁紙製造業ヲ開始シ引續キ現今ニ至レリ是同局ニ於テ御使用ノ版圖模樣等悉皆保存シアルニ因リ今回獨逸皇室ノ御買上ノ榮ヲ辱ヒ奉リ六式ニ示

- 皇太子殿下御所御新築ノ際御用命ノ榮ヲ得タルハ當工場ノ深ク感謝スル所ナリ
- 大阪博覽會ニ於テ二等賞ヲ及東亞勸業共進會ニ於テ二等賞ヲ得タルハ
- 日英博覽會ニ於テ**金牌**ヲ受領セリ
- 見本ハ御報次第送呈ス多少ニ拘ハラス御用命ヲ乞フ

東京市小石川區大塚坂下町 一五四三三五 一五六番地 **山路壁紙製造所** 電話番町 二九四七番

東京市牛込區水道町 四十一番地 **山路** 電話番町 三一七番

監督 安田善三郎

頭取 奥山三郎

支配人 栗原久作



株式會社

第九十八銀行

電話 千葉 六九番

振替貯金口座 二六三〇番

本店 千葉郡千葉町
 東金支店 山武郡東金町
 津田沼支店 千葉郡津田沼町
 六軒支店 千印旗郡大柱村六軒
 横芝出張所 山武郡横芝町

千葉町吾妻町三丁目

荒井兵次郎

戸籍事務所

電話 六一番

牛豚鳥

なへらわ

御中喰 親子丼

千葉縣千葉町本町三丁目

市原肉店

確御旅館

千葉町の中央部に於いて

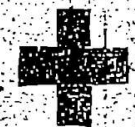
諸官衙學校等に最も接

近し居れり

千葉町大和橋際

時田屋

大 勉 強



武 田 靴 店

御一報次第本持參可仕候
千葉縣千葉町横

御 旅 館

佐倉町中央各地方全面至便の地

平 山

千葉縣印旛郡佐倉町裏新町

鳥 料 理 本 齋 馬
御 料 理

新 鮮 美 味

千葉町不動境内

常 盤 樓

内 敷 橋 電話 二一七番

手 製 品 を 採 集 薬 出

御 手 輕 御 料 理

仕 出 し

千葉縣千葉町長洲

千 歳 庵

內外科皮膚泌尿科梅毒

佐倉町濟生堂醫院
醫學士長 濱野昇

生殖器婦人科其他傳染病室の設あり

浩生堂醫院

千葉町吾妻町三丁目

武本爲訓

電話一六五番

諸大醫處方調劑

千葉縣千葉町師範校下

賣藥 化粧品 矢澤藥店

內外博覽會賞牌受領
登錄商標



最上

醬油釀造元

醬油

柴甲龜和明
創業年

荷井問澤

東京市京橋區富島町

中井半三郎

高梨仁三郎

東京市麻布區全井町

鹿島利左衛門

東京市京橋區新堀町

蜂須賀與平

千葉縣千葉郡千葉町
近江屋木店號

柴田仁兵衛

電話一三七番 (電路三三)

御下駄商

嶄新流行履物各種

千葉縣千葉町市場

常陸屋

和田幸次郎

海水浴
御料理

夏季ハ海水浴ノ清遊

ニ適ス新鮮ノ魚貝類

弊店特長ナリ

千葉縣千葉町寒川

長崎屋

公債株式諸債券
地金銀賣買

千葉縣千葉町吾妻町二丁目

田 瀬尾兩替店

電話 二〇九番
二二三番

武藤齒科醫院

二三番

千葉市千葉区
千葉縣千葉町市場

院長 武藤切次郎

電話一六八番

御手打

御料理

牛のち

昔

千葉町市場
中田屋本店

中田屋支店

同龜井橋際
田中屋支店

吉野牛乳

千葉縣千葉郡千葉寺

吉野牛乳店

弊堂の特色印文、章法、刀法に注意彫刻するが故に印章として價値あり

○實印、検印の如き時に至急を要するものは即刻彫刻の御需に應ず

○創業二昔幾多の經驗を経たれば印刷木版の如きは如何なるものにも確實
至廉に調達す

雅俗 印電篆刻 森羅木版密刻

職

千葉町長洲

諸官衙御用印鋪

田代製印鋪

高尚御名刺調製 (特ニ至急ヲ要セラハ)

優美 (時ハ即刻筆耕應盡)

營業品目

海産肥料 流酸アノモニア
知利消石 大豆粕
各種燻燐酸肥料
米 雜穀 砂糖 海産物

炭石

好間炭鑛株式會社
入山探炭株式會社特約店
豊前探炭株式會社特約店
舊總武及房總各線運賃特引割引)

契約



鹽野淺太郎

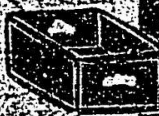
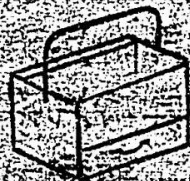
千葉縣千葉町市場

●東京隅田川倉庫渡シモ精々勉強仕候

電話 二四八番

磨木細工式

森 侯
調 製

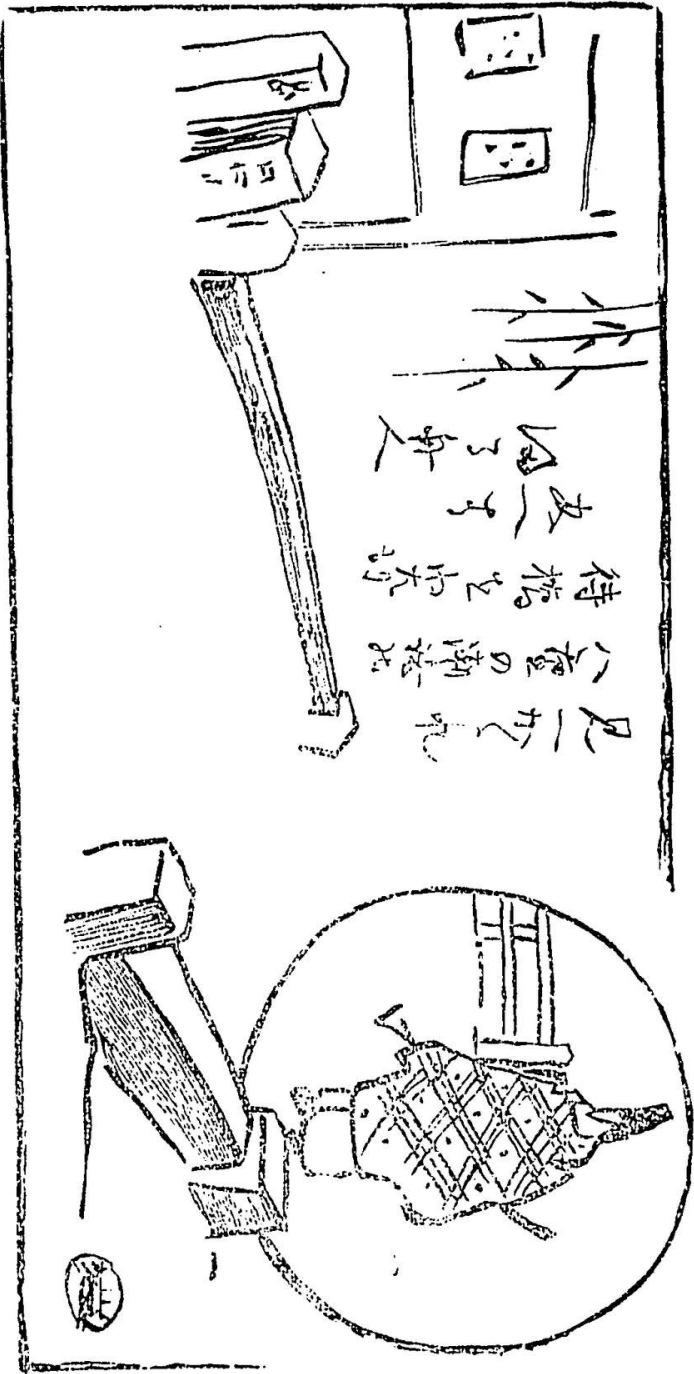


千葉 永 世
郡 後 可 裏 通

指 物 師

和 田 貞 三 助

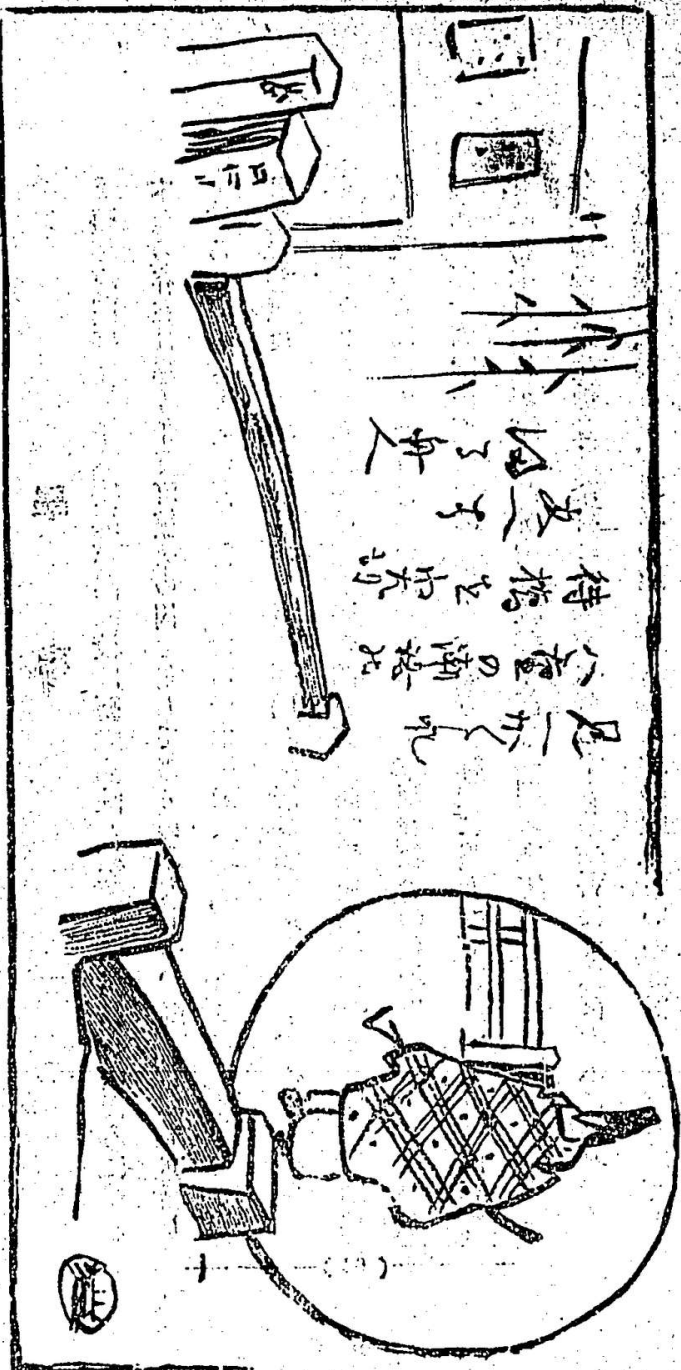
昔 今 の 橋 本 君



是 一 か げ
八 重 の 漸 進 地
待 橋 本 永 世
女 一 才
風 三 軒



昔今の橋と未君



學 事

◎醫學專門學校 千葉醫學專門學校は縣立病院と相接して猪鼻臺の後ろに在る本校の存在は獨り千葉町繁榮の因を爲してゐるのみならず、縣としても亦驕りとするに足るべきものだ。抑々本校の沿革を云ふ時は其起源は遠く明治七年三井組の首唱による共立病院の設置に胚胎して居るが、以後法令、校則の變更に共つて幾變遷をした結果は三十四年四月第一高等學校醫學部を千葉醫學專門學校と改められ以て今日となつたのであつて、現在校舎の建坪は二千五百坪許りであるが、周圍の苑は極めて廣く、北方は都川に邊りまで及んでゐる。而して廿二年七月本校が第一高等中學校醫學部第一回の卒業生を出して以來、四十三年度迄の卒業生總數は醫科に於て千七百七十人藥學科にて二百七人に昇り、多くは開業して居るが、孰れの地に於ても世評の頗る好いのは何人も知る處である。

る。尙同校に於ては毎年十月解剖祭をなし、同時に内臟外科の研究科では、犬塚の祭を營む事となつてゐる。

◎縣教育會 千葉縣教育會は四十二年猪鼻臺上から縣廳舎側の物産陳列館跡へ移された。本會の事業としては一、教育圖書館(約一萬冊の書を藏す)二、巡回文庫(元縣廳の事業であつたのを本會に托され縣よりも毎年従前の支出を續ける事となつた)三、幼稚園(市場師範學校側にあつて縣の補助を受く)四、教員講習所(男子部と女子部に別たれ主として師範校入學の階梯となり又助教員をも養成す)大體以上の如くであるが、尙其他に通俗講談會及び教育會雜誌發行の事も本會の仕事の一となつて居る。

◎師範學校 縣立千葉師範學校は猪鼻下市場にあり、同じく女子師範學校は新町通りにある。

●高等女學校 縣立高等女學校は新町裏寒川新田に在る、昔は此邊に原の居城があつたとの事だ。

●中學校 縣立千葉中學校は千葉寺通猪鼻臺に續いた高地、眼下に袖ヶ浦を見渡すを得、空氣清新の處に在り。縣下の中學校中では最も古く、前名を千葉尋常中學校と云つたが、尙其前から千葉中學校として存在して居たのである。

小 學 校

●尋常高等小學 通町にあり、運動場も廣く校舎の建築も完全なものである

●第一尋常小學校 明治初年千葉神社妙見臺に建てられ、明治六年二月道場に移り、後通町大庭に新築して大庭小學校と改め三十九年第一尋常小學校と改稱し、四十一年二萬餘圓を投じて旭町に新築した。

●第二尋常小學校 場所は大橋の上流都川の河岸、舊の寒川小學校である。

●第三尋常小學校 場所は登戸字鷲塚、舊稱登戸小學校

●第四尋常小學校 本校は明治十一年八月現校長山本正温氏の開設にかゝる誠明和塾(後に千葉寺小學校)と其分體なる徳修尋常小學校二校を三十九年七月合併して千葉寺百七十餘坪の地に新設される事になつた。

行事及風俗

◎精進落 承平三年正月三日上州花園村の一戦で良文等將門の軍を破つた時地民は多くの鯉魚を進め、軍中の武者大白を浮べ、鯉を頰ちて食つた。此の戦ひに良文が勝つた爲め、後日千葉氏の起る因ともなつたので、爾來千葉、寒川、登戸の地民は正月三日の晝飯迄は一切肉類魚類を用いず、若し食へば妙見社の祟があるとし、三日の夕に始めて鯉を食つて精進落とした。併し後には妙見社の子氏は何處でも此の吉例に随ふ事になつたと。妙見社記録等に載つてゐるが今では更に行ふ者は無い。

◎節分會 節分に豆を撒く事の外、門口へ細い竹を立て其竹の先へ箒を俯向けに吊し竹の本へは終ししまと胡こ類子の枝を結んで置く習ひがある、以前は尙其他に豆の木を削つて拵らへた箸の間に田作を狹んで共に結び付けたさうである。

◎阜月風 五月端午の節句に鯉幟旗人形の飾物は別に變つた事は無いが、初節句の家では西の内三十六枚張四十六枚張位の大紙鳶を揚げる習慣があり、今でも廿枚や廿五枚の物は揚げる。今迄に一番大きかつたのは柴田仁兵原氏の家で九十六枚のを揚げた事だ。

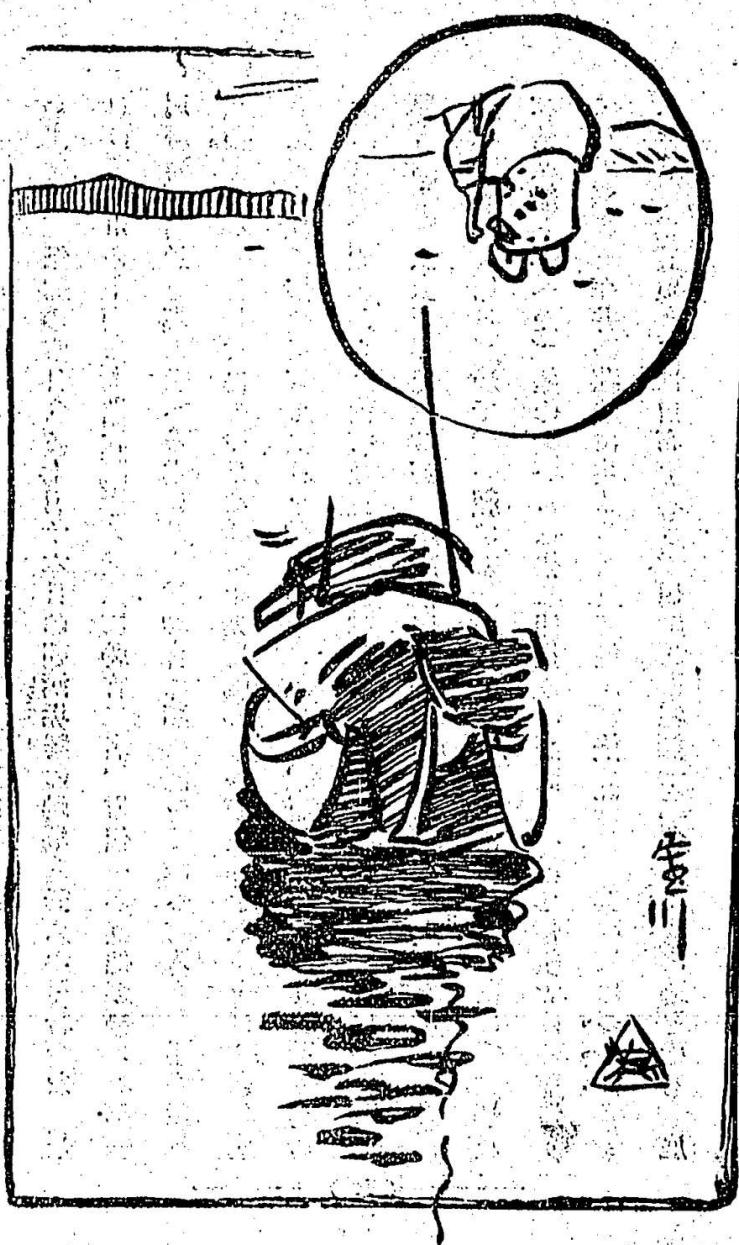
◎盂蘭盆 毎年八月(或ひは七月)十五日が盂蘭盆で、十六日に精霊が遷ると云ひ送火を焚くのは全國殆んど一樣であるが、獨り千葉は新曆八月十六日から妙見社の祭禮なので盂蘭盆會は十五日で切上げ、喜愛一變して翌日は赤飯を焚いて祝ふ事になる。而して此地方の風習として、其年新佛のある家へは、親類縁者等から秋の七草杯を誓いた岐阜燈灯を一ツづ贈るので、交際の廣い家では夫れを家内から軒先に至るまで隅なく點す。

◎盆踊 今は警察が厳しいので出來ないが以前は盆踊と云つて、八月十六日が

ら廿二日迄の祭日にかけて男女手を繋ぎ合せて圓くなり、仮屋附近を盛んに踊り廻つたものだ。

●千葉神社祭典 千葉神社の祭典は天福元年に始まり、八月十六日(陰曆當時は七月十六日)から一週間はれを行ひ、神輿は郡内大和田の邊までを廻つて、廿日には晴雨を問はず神輿を海に昇き込み沖の方まで出る、之れを御濱と云ひ、本祭は廿二日に執行する事になつてゐる、本社祭典は昔から有名なもので、近郷近在から見物に来る者は夥しく軒々には提灯を吊して酒を汲み、各所には山車、睡屋臺神樂屋臺、飾物等が出來盛賑を極め、市中を叩き廻る大太鼓は其大きな人の丈よりも高く、若衆連が太い夫知^{よち}て叩き、とど大鼓の皮を叩き破るのを以て其區の誇りとしてゐる。

以上は現今に於ける祭典であるが、維新前に行はれた祭式に就て里老の語る處



を記せば、祭禮の當日なる七月十六日の朝潮しほこり垢離の神事と云ふのを行つた。是れは未明申の上刻(午前四時頃)と云ふに神官二名、僧侶一名其他多勢の者が寒川海面一名妙見洲と云へる處に赴き、神官は潮に浸つて海へ這入り、手で探ると必ずぬるりとした蕩のやうな物が手先に觸れるので夫れを取り上げ、鬻の刷毛先へ入れて持つて來て夫れを神輿の中へ入れる、而して神輿は其日社の鳥居を潜らず、側通から院内香取社へ行き御假屋に据えて置き、廿二日には各町を昇り廻ると云ふ順序であるが、維新前迄は神輿の外に二艘の大船を出した。一艘は千葉から出る男船で、一艘は寒川から出る女船である(其以前は千葉船及び結城船と稱へた)。船の大きさは幅二間長さ四間許り、總て骨組丈けの荒造りにして蘇我町今井の菰池に生ふる眞苜で網んだ儀で装ひ、真中にはつく柱と云ふを立て、其頂きには白布を巻き、周圍には錦襦きんじゆ十二色段々染の幕を廻らし底

には六輪の車が付いた華麗な造りであつて。斯くして出來た二艘の船は沖に昇き行き、一艘の寒川船は海から上つて君待橋の袂に休み、千葉船は縣廳前安田の前に休み、此所で神酒を汲んで暫し祝ふ時、町内名望の或る家から赤兒を一人盛裝させて其場へ連れて出る習慣があつた。夫れから午後二時頃濱へ出た神輿が還御の頃を計り、梅屋の前邊りまで迎へに出て、神輿及び寒川船の跡に付いて院内香取山に向つて引き揚げ。中途大和橋にかゝると、橋を渡らずに川中を越えて本町に上り、途々船中では奏樂面白く十二段の舞(十二座の如し)と云ふを舞ひ續け寒川船は其日大和橋の際で細かに壞して川へ流し、翌る廿三日には當時の妙見寺で大護摩を焚く時神官も立合ひ、先に神輿の中に納めた潮垢離の襖は神官自から護摩と共に焚いたとの事だ。

●寒川神社祭典 寒川神社の祭典は千葉神社祭典と併せ行はれるので、其の本

祭日は廿一日、以前大船の行事のあつた頃は廿一日午前都川の水の干る時を見て川を渡つて本町へ上つたもので、是れをから船引きと稱へた。

●川施餓鬼 法華宗本敬寺及び本圓寺が主になつて毎年の初秋寒川々口に船を浮べ讀經をなし水死者の冥福を祈るのが例になつてゐる。

●八坂神社祭典 八月十五日、恰度人々納涼に出盛る頃なので、灯ともし頃からは仲々に賑ふ。

●登渡神社祭典 九月五日

●千葉笑 往時は毎年十二月晦日に附近の若者等は、面を包み姿を變へて、千葉寺に集り、地頭や里正の奸曲を罵り大聲を發して笑ひ合ふと云ふ奇習があつた。

●市 暮の市は毎年廿五日市場を元にして本町吾妻町に開かれ、各地からの諸

商人、東京からの縁日商人、濱方の鯉魚節屋杯が路傍に店を露して賑ひ草市は

八月十一日本町から市場にかけて開かれ、月並の市は毎月十日廿日廿八日の三日本町及び吾妻町通りに立ち、主として古着類の店を張り仲々に繁昌する。

●嫁入の時 千葉町附近で嫁を迎へる時は門口に松明なまきを焚いて花嫁に夫れを跨がせて門に入らせる、譬へ火の中でも厭はぬと云ふ誓ひである。併し松明を焚く事を略してブラ提灯を代りに跨がせる家も無いでは無い。尙千葉郡の宇那谷と云ふ處へ行くと、婿を取つた時其婿が區内の若衆に對し相當の交際をしないと、二日許りの後村内の大正寺へ導き同寺の寶物なる二升入の大盃へ煮ひくも返つた酒を注いで飲ませると云ふ奇習がある。

●三ツ日目の祝 出産の折は三日目に三ツ目の牡丹と餅云つて一ツ三四合宛の牡丹餅を三ツ拵らへ重箱に入れて祝ひ返し、各戸へ配り、媒酌人への分は一層

大きくして飯櫃の蓋へ入れて持つて行き、館も其處らのは上總邊のと異つて甘味を付けて置く。

◎按摩 一夜を千葉の旅籠に更かした人は、さむしげに下駄の齒音を立て、行く按摩の多い事に驚くだらう。是れは無論明治になつてから殖えたので、大部分は十七八以下の子供、悉皆では二百名以上もあるとの事だ。

◎葬儀 葬式の時、會葬の老父老母が鉦や太鼓を叩いて送る。

想もお由が無邊の中へ立入る其人は、弱きを助け強きを折じ、氣性を得たるあづま男、千葉の藤兵衛といふものなるが、最前より奥の間に於て始終をたち聞き、傳八が、非道親子の當惑、不びんに思ひ甚れみて、さしかりたる金を残らず立て替、其座を濟して傳八が悪計を脱れさせ、——残る方なく親切に世話をなしければ、お由は更なり親父は藤兵衛を伏し拜み、これしかしながら常々信する成田山の御利益なりとて

(春水——梅兒善美)

遊覽及娛樂

◎公園 縣公園は市場區縣教育會側の地で、爾來草茸々と秀て荒行くに任せてあつたのを、本年五月新築縣廳舎落成の時を待ち、盡く改繕し、多くの樹木を植付る等、手を盡すに至つた、羽衣の松及び池は苑の中央にある。而して千葉町の公園を云へば第一は猪鼻臺上二千三百餘坪の地であるが、第二公園は千葉神社境内、第三公園は千葉寺境内と決しられた儘未だ諸般の計畫に就ては協議中である。

◎海水浴 海水浴は袖が浦なら何處でも出来るが、遠淺なので、干潮の時には餘程沖へ出なければ遊泳は出来ない。又炎日の夕暮都川から扁舟に棹さして、水青くと月の照る沖に出で涼を取るの遊びは貴紳粹客の間に行はれてゐる所である。

●釣 魚 (鮎、鯉、鮒等)

△鮎魚 都川に鮎が居るやうになつたのは何時の頃からだか判らぬが近來は年々増加して來た。廿年許前玉川から砂利を運んで來た時、其石に卵が附いて居たと云ふ説もあるが夫れは誤りで、鮎は其前からも少しは居たと云ふ事だ。并して此所の鮎は二寸位迄は形ちがスッキリして居るが三寸からになるとそろそろ太く短かくなる。釣場所は大和橋の水の落ちる處が第一で、一本橋の樋口、縣公會堂前の都橋の袂の所も好く、期節は六七月頃から九月末迄が最も好時期だが十一月頃鮎の遊あそぶ頃になると都川の水源に近い方で罾釣こまをする者もある。鮎は普通鮎釣に用ゆる蚊鉤と云ふので重鉛釣おもいもすれば、鮎の群れて居る處を覗つて引懸けて釣る仕方もする。

△鯉釣 鯉釣は彼岸から彼岸迄釣れるとなつて居るが秋の彼岸頃が最も好く釣

れる。千葉ての場所は大橋から海の間で毎日潮が一杯になつて夕日の落つる頃になると西河岸荷揚場の材木に腰をして、多勢の釣客が並んで居る。其他船に竿して沖に出て釣る客も亦少なく無い。

△其他 鮎や鯉の外に町の附近で好く釣れる物は、鰯である。是れは西北の風の激しく吹く頃、潮の満ちた時を計つて寒川海邊で釣ると、三寸位の小さいのが澤山釣れる。夫れから又鮒、鯉、鯉等川魚の釣場としては都川の上流や、鮒田の池、千葉驛側の堀溜、大橋際の釣堀等である。

◎汐干狩 潮の干た時袖ヶ浦へ出て貝を拾ふ事は都人には珍らしい面白い遊である。大潮の頃は十丁餘が沖へ出て漸々膝の下位迄より這入らない、殊に毎年舊の六月十五日は一年中で潮の最も干る時となつてゐるので、此日は近所の女子供が朝から出て行き、濱邊は終日非常な賑ひである。并して貝の種類は刺

蛤、沙吹等が主で、一寸二時間も行けば、一升位は悠に取れる。夫れに小さい蟹杯も澤山居るから子供等を遊ばせるには至極好い。併し處々立してある標木から後は組合で飼育してある場所であるから、何人て這入つても取る事は出来無し。

●魚突 十月頃潮の干た時膝頭の上位迄水のある所へ出ると鰈たかひの子や目牛尾魚が澤山居るから足で踏み當てるか又は覗ひを定めて置いて突き差すのは、鳥渡馴れないと六づかしい事だが少し遣りつければ仲々面白い。夫れから又十一月から十二月の寒い夜半に腰から上は綿子を幾重ねも着て温たかくして置いて海へ下り、籠かご燈で水底を照し魚の寝て居る所を見澄して突くと、鰈や牛尾魚や鰻等が澤山取れる。

●短艇競走 短艇競走は毎年晩春初夏の候満潮の時を計つて寒川出州の海面で

行ふので、醫學校及び中學校等の競走會は最も盛んである。

●玉突場 縣公會堂の中にある外市中には吾妻町梅松別荘側に一軒在る。

●劇場衆樂館 吾妻町紅谷横町に羽衣亭と云ふ寄席のあつたのを取拂ひ、株式組織にし資本金五萬圓を募り、二萬圓許り投じて劇場衆樂館を建て紅谷四郎平氏館長となり、三上、相原、石橋の諸氏専ら常務に當る事となつて四十一年一月東京より梅幸、菊五郎等を招き舞臺開きをなし興行を續けて居る中、四十三年一月三周年記念興行の際失火し遂に烏有に歸したが、近く同場に再築せられる筈だ。

(興行場及遊興)

●公會堂 公會堂は吾妻町一丁目にあつて多く地方廻りの劇團、浪花節活動寫眞等を興行し、舞臺間口は三間許りて近頃は廻り道具の設備杯も出來た。

●小川亭 寒川長に洲あり、寄席としては場内も廣ければ建物も新しく一流の浪花節は多く此亭で興行されて居る。

●一葉亭 市場にあり主として浪花節及いろ物の興行をする。

●旅廊 は町の西端新町通りに大門があつて登戸の方へ抜ける、右側は玉曙、武藏、静海樓、左側は小川、中村、原田、山田、静山の諸樓三層四層の屋を連ね、紅燈の下美人羅列して艶娜の色を競ひ、こゝ情界の有頂天國である。

●藝妓 吾妻町二丁目の裏通りに元蓮池であつたと云ふ溜りのある場所を俗に蓮池と稱ふ。此處紅燈綠酒の巷、御神燈の影淡き家々凡世軒はその附近に散在し居て、此所の校書を呼ぶに一名蓮池藝者とも云ふ、容姿を以て優るもの、藝を以て誇るもの凡そ百人に近く、釵影裾香は楚々として人を牽く。

●料理店 梅松（紅翠館） 同別荘 加納屋（樂賓館） 梧月 吾妻俱樂部 常

●安田 魚民 相原洋食店 進樹亭 鳥悦 千城庵 油屋 牧野屋 川萬
等。

木母寺は、梅わか丸の古墳、かみか池はそのは、御前の舊跡とそ。
鳥越に、天慶の變をおもひ、牛島に貞觀の碑をたつね、兼平天神は在
中將の竹をのこし、吾妻の森はたちはな姫のみふねのかたちあり。牛
頭山はうしの御前にとなり、胸かたは、花形につらなる。石濱は、千
葉家の古城、砂利堀に寶篋が石塔を見る。三圓はちかく管子か雨を
ひ、つく波山はるかに嵐雪か雪をのこす。(夏目成美——雙亭記)

偉人小傳

(一) 千葉三郎兵衛

千葉三郎兵衛は誰も知る如く赤穂四十七義士の一人で、祖先は四國から出て居るなど云ふが、兎に角今の裁判所の所に邸宅を構へて居た事は事實だ。其の赤穂の臣に事へた動機に付て一寸記せば、三郎兵衛は凡そ年に一度づゝ千葉から京都へ登るのが例であつた。或年の事、永年自邸に勤めた酒好きの僕を連れて京へ赴く道で沼津へかゝると、其の僕は三郎兵衛より僅か遅れたので失れ迄大事の御供故と酒を謹んで居たが、堪を兼ねて側への居酒屋へ這入つてしたゝかに傾けた揚句過つて其處に居合せた七人の武士の怒りを買ひ、主人から御預りの千葉家の定紋月の輪に一點星の印付いたる槍を奪ひ取られた。事の由を聞いた三郎兵衛は彼の槍は千葉常胤より賜つた家の寶どうでも戻して貰はねば

ならぬと只管に詫びたが許されず、同じく御本宿に宿り合せた赤穂の臣(千崎彌五郎、原惣右衛門等ならむ)も共々に詫びたが彼の七人の士はいつかかな聴き入れず、遂に勝負をする事になつたが、何にせよ七人に一人の仕合ひであるから、若しもの事があつてはと赤穂の臣等が助太刀を申入れた時、三郎兵衛は確く斷り、萬一敗れた時の復讐を頼んで立合つた處、三郎兵衛は劍道槍術に達してゐる武士とて難なく七人を斬り倒した。是が縁で赤穂の臣等と近しくなり間もなくも抱へになつて、元祿十三年の騒動、翌る十四年十二月十四日には四十七士の一人に加はり、吉良家に打入つたのである。

(二) 千葉の忠藏

人若し佐倉宗吾の義を感賞するならば同時に千葉の忠藏の名も忘れずに貰ひたい。忠藏は當時千葉宿の生れ資性剛毅で且つ學識も在つた人、承應年間家職を

報じて里正となつた。時に堀田侯は姦臣の言に左右され、暴虐を事としたので、忠藏は是れを憂ひ千葉組合の里正を猪鼻山に集め、免訴願の協議をして佐倉廳に訴へ出て、再び門訴をしようとする準備中、突如公津村下方に會合せよとの飛報に忠藏は大に喜び、各里正等を伴ない十一月十三日江戸に至り堀田侯に訴へたが用いられなかつたので、衆木内宗吾を推して正總代とし、忠藏等五人は副總代となつて再び久世侯に訴へたが肯ぜられなかつたので、宗吾は忠藏と共に衆を諭して、歸村せしめ、其の十九日夜二人は廣小路の酒樓に會ひて最後の謀を成し、翌る廿日の且愈々宗吾は駿霜を踏んで山中に入り、將軍の御行を待つて直訴に及ぼすと云ふ時、麓迄送つて行つた忠藏は遙かに宗吾を見送り。

行く足のあとに形あり霜柱

の句を咏んだ、一句巧を弄せずして却て感慨の深いものがあるでは無いか、斯

くて忠藏は宗吾が直訴をなしたと聞き喜んで旅舎に歸つたが、間もなく捕へられて佐倉の獄舎に投ぜられ、後裸綯の責は解れたが家財は悉く没收されて十里四方追放の身となり、木内父子が酷刑に遇つた旨を聞き、剃髮して、黒衣を纏ひ、一笠一枚、身は雲水の何れと當てもなく郷を出てたまふ、高野山に登つたと云ふ噂さはあるが誰あつて其の終りを知れる者は無い、諡して遍照明仁居士と云ふ。

(三) 布施丹後

布施丹後は寒川の生れて、其祖先は千葉氏の家臣であつたが、土着して後農となり世々名族として目されてゐた。丹後は人となり公共心に富んでゐて、都川の水を旱田に引くに付ては千葉郡矢作に一の堰を構へて溝渠を開鑿するの設計を立て、慶長十八年正月から私財を擲つて起工し、其子雅樂助と協力し寛永二



大和橋、鄭釣

年十二月、工期十有三年にして漸く竣成して灌漑の便を得るに至つた。其の水
 力は千葉矢作は勿論寒川。千葉寺から蘇我町今井に迄及んだ。氏が多年獨力で
 此大事業を完うした功は實に偉なりと云ふべきである。

(四) 安井敏雄

安井敏雄氏は號を黙濟と云ひ、通稱を謙吉又は謙助と呼び、安井息軒先生の息
 子である。始め文久三年七月の頃迄は江戸に出てゐて半藏門外に居住し、昌平
 校の助教をしてゐたが病を得て歸り、父に隨ひ家塾を授けて居た。當時世は幕
 末多事の際で、息軒先生は時運日に宜しからざると見て營路有司に建言したが
 用ひられなかつたので職を辭して居ると隣家から火を發し家財盡く灰燼に期し
 た爲め二度び王子在に隠棲した。斯く苦境に陥つたので敏雄氏は息軒翁に向ひ
 「今後如何にして日を過したら宜しきや」と尋ねると、息軒翁嚴然とし、吾が平

生の讀書は今日の如き事あるが爲めてある、いて生命の存する限り著述をして世を益するのだ。との答ひを聞き敏雄先生大に感憤し、直ちに旅装を調へ藥籠を負ひて寓を出て上總の東金に赴き安東益齋と名乗つて醫業を開いた處地民の信頼厚く未明より患者參集し繁盛を極めたが後千葉に移り、先代柴田仁兵衛氏の幹旋で妙見社側に僑居を構へ、只管利用厚生の道を開導したが、可惜、明治四年七月三日僅か廿八歳で夭折した。子息敏雄先生に先立たれた息軒翁の悲嘆は一方でなかつたとはさもあるべき事て、遺骸は院内の大日寺に葬られた。其墓銘に曰く「大夢一覺。二十八年。我夢未覺。涕泗潸然」と。因みに先生性温健、孝道を重んじ、父母が東都に在る中は必ず西の方を枕にして寝ねたと云ふ事である。

(五) 孝子長松

長松は性を縑原と云ひ天保十二年七月寒川に生れ身軀短少な不具者であつて、家甚だ貧しき上、父金藏は安政五年の秋半身不隨の妻等五人を遺して病没した。時に長松は僅か十八歳であつたが獨り家計の困難に當り、飴菓子を買つたり又は人の使ひをして貰つた僅かな賃錢は母の藥代と家族を養ふの費に充て、自分は食ふ物を食はずとも母には好む物を購ふて進め、孝養を盡す事四十年の永きに及び、明治三十年一月母は遂に病没するや、長松は悲歎に堪へず號泣して止なかつたと云ふ。而して大日本勸善義會は是れを門戸に旋表し、又曩に明治十七年九月其至孝を賞せられ綠綬褒章を賜つた。母の没後も長松は常に母の追福を營む事には怠りなく、又好く稼業にも精勵し衆の範となつてゐたが、天壽限りあり四十二年八月三日六十九歳にして逝いた。彼の墓碑は今も結城山萬藏寺にある。

附近名勝古趾

蘇我方面

◎大蔵寺（生實濱野村） 天文二年生實城主原胤榮の室龍澤尼公道譽上人に厚く歸依し、此の巨刹を建て龍澤山大蔵寺と號した。後家康公の歸依する處となつて當時十八檀林の一に列せられたので今も毎年四月十七日には法要を行ひ國家安穩の祈禱をする（道譽山上人忌は十月六日）尙本寺は明治二年繪旨に依て勅願所となり、寺内廣く老松森々と聳へ、梢の枝には鷲鷲が巢喰うに住せてあり、境内には山櫻多く、棚の中なる一株の梅は其名を虎角梅と云ひ二世安譽上人が鶯に化して此梅の枝を亘り更に、朝夕其樹下に唱名をむた虎角松に飛び移つて天狗に化したとかで、今も夜に入り同寺附近を歩くに謠ひを吟こぼさむと天狗に魅せられると云ひ傳へて居る。其他寺内には不鳴池、龍澤井等の舊蹟あり、

(94)

享保三年一度火災には罹つたが、今に道譽上人の法衣、光明皇后眞筆の經、宋張思筆の釋迦佛、弘法大師の眞筆、家康公の書翰等多くの寶物がある。

◎初雪や天狗木を傳ふる大蔵寺

集 丸

◎小弓館趾（同） 大永五年新公方義明の原友幸を破つて館した處、義明は英氣熾んの將で後一舉北條氏を攻めやうとし却て國府臺に破れ討死し小弓の御所も陥つたのである。

◎小弓の御所

宗 長

◎本行寺（同） 本寺は顯本法華宗で文明元年日泰上人の開基にかゝり、上人は上總各地の寺院を説きて皆本宗に歸伏せしめた人、現今兩總に三百有餘の法華宗寺院があるに依り、俗に七里法華の稱が起るに至つたのも上人の力に與る處多しのである。

(95)

更科方面

◎お茶屋御殿(更科村) 元和元年家康公東金巡行の砌休憩所を建てられたので、今こそ腐朽してゐるが以前は壯麗な殿宇であつたさうだ。

◎姫の池(同) 古色蒼然たる沼で古來大蛇が棲んで居ると云ひ近寄る者はなかつた。

◎富貴樂の陣屋(同) 北條新造正親諸國流浪し落魄して徳川家の救ひを受け、元禄元年此地に陣屋を設け千餘石を賜はつた。今や古木森鬱と茂つて陣屋の跡は其儘に残つて居り其處より、僅か離れた沼畔には辨才天を祀り、沼に架つてゐる四つの橋は悉く一枚石である。

◎鐘鐺塚(同) 真光寺内にある鐘鐺塚と云ふのは北條正親が梵鐘を鑄造寄進した記念の塚であつて、後正親の息女の骸を此塚の傍らに葬つてから又姫塚とも

云ふ。

◎土中出现童子(千城村) 如意山無量院榮福堂に在り、中興の開山快運師或時虫歯を病んで苦悶し三七日間地藏菩薩の眞言を稱へ修行した處、其朝夢幻の裡に、「境内櫻樹の下に頭痛虫歯の患苦童子埋もれ居る」との御告があり、虫歯はいつか癒えて居たので、直ちに櫻樹の下に馳せ凡そ二丈許を掘下げると果して金色二體の靈像が現れたとの事。尙境内には印度伽羅山より到來の地藏尊の靈木、伽羅松、靈驗竹、坂尾櫻等あり、又本堂には運慶作の佛像、弘法大師、慈覺大師眞筆等の寶物がある。

◎金光院(同) 本寺は寶徳元年二月法印眞成の開基で後天文中原式部大輔胤清の厚く歸依する處となつた。本尊は藥師如來。弘法大師筆の自畫像始め數多の寶物を藏してゐる。

佐倉及成田

◎佐倉城趾(佐倉) 佐倉の町は停車場よりも遙か高い處にある。舊佐倉城は元和元年。土居利勝本町鹿島山の地に改築したのである。

霜枯の佐倉見上る野道かな 子規

◎將門山(同) 佐倉町に在り、天慶の亂に平親王將門の城を構へた所、山上の將門神社には叛臣將門の靈を鎮む。

◎海隣寺(同) 是れ治承三年七月二十六夜、千葉介常胤海邊に立つて月の出を待つてゐた。時に海上に光明の赫灼として沖するのを見、常胤怪しんで網を投じた處、閻浮陀金の阿彌陀尊像を得たので馬加に一寺を建て後佐倉鑄木の地に移した。人尊像を呼んで月越如來と云つてゐる。

◎臼井城趾(臼井) 佐倉町の隣臼井村に臼井城の廢墟がある。城は千葉常兼の

男臼井六郎常康の築く所、後一度破れたが常兼五世の孫胤胤(始め胤胤)の世に至つて復城し、文明十一年俊胤の世に至つて太田道灌兵二萬を卒ひ六月餘りも城を圍んで攻めた時、俊胤短兵を以て縦横に戦ひ道灌の弟圖書を殺し其の軍を敗つて歸せしめた。圖書の墓は今尙同地にありと。

◎圓應寺の八景 臨濟宗圓應寺は臼井與胤幼時竹若と云ひ父亡きに乗じ叔父胤氏是を殺そうと謀つたを侍臣岩戸五郎胤安窺知し、笈の内に竹若を隠し山伏の風をして鎌倉建長寺の僧佛圓禪師の許に通れ、竹若長ずるに及んで再び城を復するに至つた。茲に於て與胤禪師の恩に感じ印旛沼の邊り、蒼々たる翠巒を後ろにした勝地に一寺を建てた。寺に入景がある、曰く飯野の霽雪、瀬戸の秋月、城嶺の夕照、洲崎の晴嵐、光勝寺の晚鐘、遠部の落雁、諸戸の歸帆、舟戸の夜雨。

●ちたつ様(同) 白井城趾を去る東方位遠からぬ所に烈女阿多津の祠がある。

またつは竹若の傳母で、彼先づ胤氏の權謀を知り之れを岩戸胤安に告げた事を後胤氏推知する處となり、直ちに兵を遣つてまたつを追ふた。またつ遂に遁げ了らせずして巧みに路傍の草叢に隠れた處、折悪しく病の爲め咳を發したので追兵の爲め捕へられ悲惨の最期を遂げた。後竹若歸つて城を復するに及んで其處に一祠を建て、祀つた。咳を思ふる者此祠に記念すれば必ず治ると云ふ。

●權限水(同) 白井臺町宗徳寺内(一名日蔭寺)の權限水は偶々家康公是れを喫し、京都の柳の水に酷似してゐると其後屢々汲んで點茶の料に用いられた。

●新勝寺(成田) 天慶の亂に平貞盛が將門追討を命じられて降つた時、不動の尊體と京都神護新勝寺から持ち來つて、成田町を去る辰巳二里餘なる成木新田の原中に置き寛朝僧正勅旨に依つて朝敵調伏の法を修した。後將門亡ぶるに及

んで、京師へ奉還しようとしたが像重くして移す事出來ず此地に止まる事になり、後今の成田に移されたのであつた。同寺の流行繁盛は茲に喋々する迄もなく「色の白いより黒いのか好いか當時成田は大繁昌」の俚語にもある通りで旅館料理店櫛比し、東京及び諸地方よりの賓客四季絶ゆる時は無いが節分會、菊時等には殊に賑ふ。

兼父八や三組一しよた成田道

茶

●宗吾の舊跡(君津村) 印幡郡君津村臺方(成田驛より電車開通)には義民佐倉宗吾及び其四子の墳墓がある、毎年八月六日大法會を行ひ、堂宇は極めて莊麗であつたが、惜しむべし四十三年八月祝融の災に遭ひ烏有に歸した。尙所謂口の宮神社は内郷村大佐倉にあつて、酒々井を距る半里程の處に位し宗吾の靈を祀る。

検見川方面

●夫婦の梅(幕張町) 字長作の長胤寺境内にある枝垂梅で、花は白と赤の源平實も二つづ、並んで生ると云ふ不思議な樹である。

●鷲神社(検見川) 近衛天皇の御宇上總之介平廣常、金田小大夫、三浦之介義澄等奈須野ヶ原の妖狐を退治する時日本武尊に祈誓をした。其後寛永年間頼次の後胤金田正明當地を領するに當つて命の神體を江戸の邸から此所に遷し奉つたのである。

●八坂神社(同) 承平年中検見川蛭峨神社の附近から素盞鳴尊の神鏡を發掘し文祿年間今の花輪の岡に祠を建て祀つて八坂神社と稱するに至つた、大祭は毎年一月十四日。

●御野立の碑(稻毛) 明治十五年四月十五日大演習の際、畏れ多くも、今上陛

下の御野立あらせられた場所て記念の碑が立てられてある。

●稻毛の風景(同) 稻毛は袖ヶ浦の西端で、遠く安房の山々上總の浦々を望み翠松偃蹇して風光掬すべさの地。且つ氣候も好く、夏は炎暑を忘るゝ程涼しいので都の遊客は殊に多い。

船橋方面

●意富比神社(船橋) 本社は日本武尊東夷征討の途此地の濱に立ち遙かに伊勢大廟を祈ると、忽ち何處よりか白幣を立て神鏡を懸けた扁舟が來たので、尊鷲も恭しく收めて征服の後天皇の頼を得、伊勢大廟を朝日の宮と號せるに對して夕日の宮と名づけられた。降て天喜年中奥夷征討の際には源義家鎮撫の祈願を籠められ、後幾度か戦亂の爲め社殿は荒廢したのを、天正十九年徳川氏に依て造營せられ結構漸く備つて今では縣社の一になつてゐる。

●茂侶神社(同) 意富比社の攝社で淺間山丘陵に在る。祭神は木華咲耶姬命、延喜式内の舊祠で、遠く安房の岬を望み、快俗言語に盡し難い。

●遠ヶ淵(同) 或ひは釜ヶ淵と稱へ、カ貝及車蝦の名産地である。昔平親王の妾桔梗此所に閑居して海に没したと云ふ。又徳川秀忠公東金に御狩の途次船橋に宿した時魚介を獻じたのが例になつて、年々魚介を幕府に献上した爲め菜ヶ浦の名もある。

●鐘ヶ淵の鐘(同) 當町大峯山慈雲寺は鎌倉建長寺二世の祖佛光禪師の開基で堂塔美を盡して居たが、里見氏の亂の折兵燹に罹り焚鐘の如きも奪はれて市川の淵に沈められ、今に鐘ヶ淵の名が遺つてゐる。

●三咲の櫻(八榮村) 三咲の櫻は近年東京よりの遊客多く、同村大字本郷の寶成寺の椿は花輪の大きいので有名である。

●阿須波神社(葛飾村) 娑竭羅龍王を祭り、旅人が行途に上る時杯は、本社に小柴を捧げて拜すと恙が無いとの事、尙本社の際らに石芋と云ふがある、これは往古高野大師が日没此地を過ぎて一茅屋を訪ひ老媪に一宿を乞ふたら、土間に多くの里芋が積んであり乍ら、食が無いからと斷つたので、大師は誠めの爲め加持して屋外の畑の芋を盡く石に化せしめて了つたと、其芋は年々葉を生じて今も残つて居る、祭禮は俗に芋祭と云ひ、芋を食ふのを以て例としてゐる。

今更に妹跡さめやいぢしるき阿須波の宮に小柴さすとも

俊頼朝臣

●葛羅の井(同) 大字本郷葛飾神社の境内にあつて水脈は龍宮に通じてゐるとさへ云ひ、如何に大旱でも涸れる事なく、一度び此れを飲めば味醱くして虐を患はないと蜀山人の題吟もある。

●時平神社(大和田) 船橋を去る二里餘、其邊住時は藤原時平の莊園であつた

のて其靈を此處に祭つたのであつて、地民は菅公に所縁あるを以て梅の樹を忌む事夥し。

市川と中山

◎鴻の臺(市川) 鴻の臺は武總の間を流るゝ江戸川の下流桃の名所として知らるゝ市川渡の北方を歴して立てる臺で、往古國府の在つた處、始め太田道灌此處に據て白井城の敵を夷げ、新公方義明は小田原の北條氏康を攻めんとし此地に陣を布いて敗れ、安房の里見氏又北條氏と戦つて敗績した古戰場である。臺は老樹鬱蒼し、登つて見れば蜿蜒たる市川の流れ、渺々たる行徳の海を望み、願みれば往古の千葉野を一眸の中に收むるを得、風光明媚の地だが今は惜哉陸軍の所轄に屬して登る事は出来な。

夕立や日の脚見ゆる鴻の臺

里

組

◎弘法寺(真間) 鴻の臺に列なる丘陵真間山には弘法寺と云ふ日蓮宗の巨刹があり運慶作の仁王尊、富木常忍作の釋尊を安置し、境内には多くの楓樹があつて龍田、高尾に比べられてゐる紅葉の名所である、有名な繼橋は今も存し、橋は在昔太い柱を川中に建て二個の橋梁を支へてゐたとの事。又境内に手古奈(未婚の處女と云ふ意)の古祠があり一樹の老松が墓標となつてゐる。此は往古葛飾の貧女が絶世の美貌なのを見、多くの痴漢の云ひ寄るのを手古奈は外貌を慕ふ人の心の淺墓なのを嘆じ、世を果敢み真間の入江に身を投じて果てたのを、後文龜元年弘法寺の僧夢に手古奈の靈驗を知つて、此所に祠を建てたのだ祭禮は毎年九月九日。

鶴岡に古き佛や弘法寺

跡

葉

◎八幡の籤(八幡) 八幡不知の籤は、廣さ僅か四五十坪で、往古は八幡宮を勘

讀した所で、一度び入ると出る事が出来ぬと云ふが、其譯は恐らく此所は行徳の入會地なので、八幡村民の濫りに入るを許さなかつたのであらう。

◎法華經寺(中山) 所謂中山の鬼子母神と稱し有名なるもの、本寺は昔文應元年土豪富木播磨守常忍(後の日常)深く法華經の功力に感じ一字を建て、日蓮上人を招いて百日間法を聞き、上人自ら四菩薩の像を刻んで安置した所は今の奥の院で、寺内の鬼子母神堂、祖師說法堂及び各殿等は莊嚴數寄を悉し驚く許りである。常唱堂の後の大公孫樹は一名泣銀杏と云ふ、其由來は常忍の息子なる弘法寺の開山日朝、父常忍の怒に觸れ、屢々謝するも許されないのを深く悲しみ、此樹の下に踞づいて慟哭したので其名があるのだ。

◎安房須明神(同) 里見忠弘の男長九郎弘次十五歳ではじめて父に従つて軍に臨み將に破れひとするに當つて、單騎敵中に斬入り味方の敗を挽回せんとした

時、敵の驍勇松田右京亮と引組み、右京亮忠弘を組み伏せて將に刺うとしたら忠弘の風丰美しく花のやうなのに心鈍り、窺かに助けようとしたら、忠弘下より「吾れ敵の憐れみを受け命を遁るゝ如き者に非ず」と怒號したので、松田は泣いて首を敲り、亂平らいて後名を浮世と改め墓を立て、此所に忠弘の冥福を祈つたとの事である。此他本社付近には里見家の驍將正本大膳を祠れる高石明神ある外、中山の北方に妙正が池と云ふのがある。此池に就ては種々の説が傳へられてゐるが、一も信ずるに足らぬ。

○新編雜句集(加舎白雄)

○北總千葉宗風禪刹に春をむかふ

歳わりて般若の聲を三の朝

○道の爲には旅行をすゝめ酒に對しては杯をかくし老かいのち長かれと切を盡せし保告先生(白雄の門人)なくなりて忽三歳正當日の今

日北總和國亭にありて亡いら埋し一字遙に情心こかれ飛思ひを
體寺に雨の降る日て宿の花

実 眞 版 参 照

□津田沼養魚會社 由來津田沼町に於て^せりとすべきは阿部吾市氏等の經營にかゝる養魚會社の存せる事なり。同地は鹹水と淡水との調和宜しきを以て鯉、鰻、鰯等の魚を取交ぜ飼養するを得、且つ同社の養魚池の如き約三十萬坪の面積にて資本金も百萬圓の大規模を以て益々事業の擴張を畫りつゝあり、飼養せし魚は毎日需要の状況を見て適度に魚河岸に出し居る故、一般漁業が不況續きの際と雖遺憾無く市民の食膳に新鮮の魚を供するを得世の利便尠からざるなり

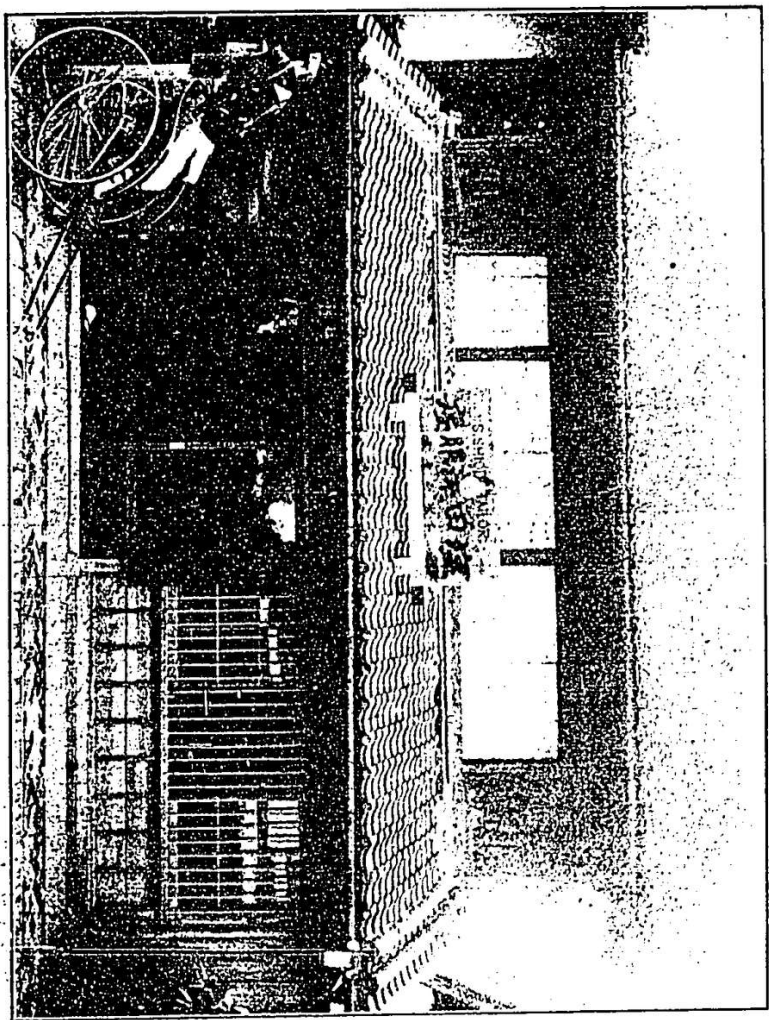
□田村病院 院長田村六三郎氏は廿六年千葉醫校を出て、後大磯病院副院長及び^{しもた}下館病院長となり、卅七年獨乙へ留學しドクトル、メヂチーネの學位を受け

歸朝後千葉町本町二丁目に開業し、東京日本橋具服橋病院をも經營し耳鼻咽喉皮膚、花柳病科の専門醫として其名は廣く世に知られ居り殊に淋疾の療法に就

ては新器械をも發明され好評噴々たり。(電話一四五番)

仁山堂病院 仁山堂病院は新通町に在り、始め君津郡奈良輪の人久城籍五郎氏の經營にかゝり奈良輪病院と稱せしが後今の名に改め縣下第一の眼下専門病院として夙に其名高く、殊に東京帝國大學に醫科を學び、京都醫校を卒業せし息子起一氏代りて院長の職を繼ぎてよりは籍五郎氏の名と共に起一氏の名又現れ爾來専門眼科の治療に従ひしが現今にては内外科の診察をも併せ行ひ、患者の信頼益々厚し。(電話一三二番)

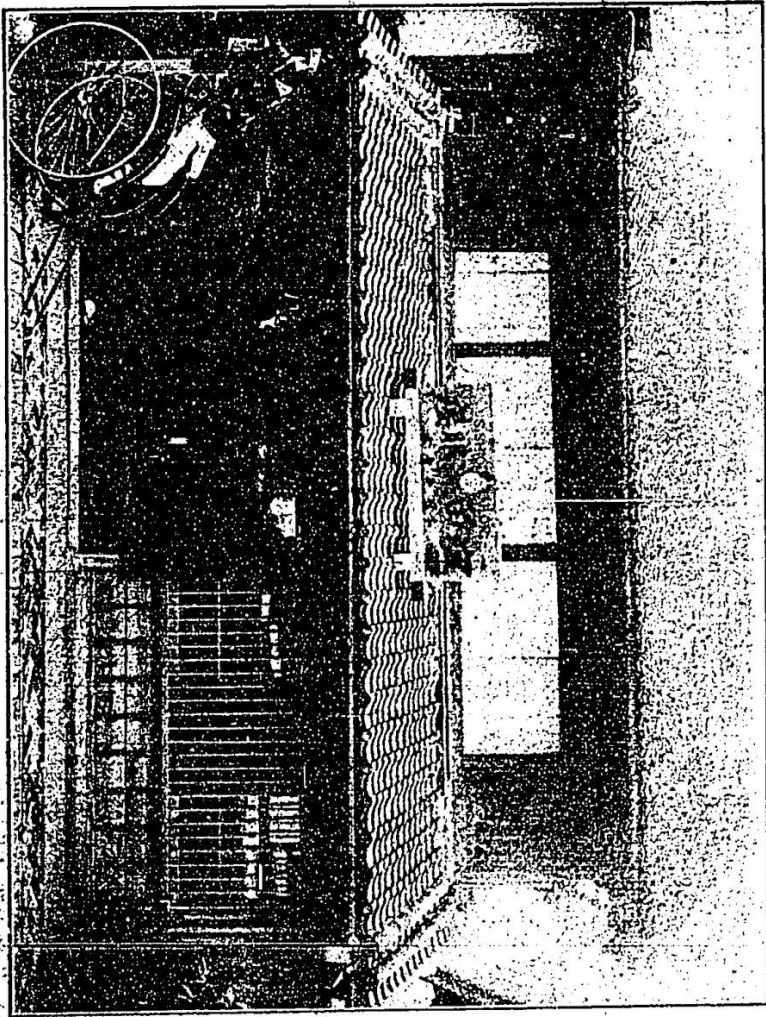
内田醫院 院長内田實氏は印幡郡旭村馬渡の出身にて卅六年千葉醫學専門學校を出て引續き縣立病院に於て井上博士指導の下に内科を専攻し千葉師範、千葉中學、女子師範の校醫となりしが後辭して醫院を開設し、懇切且の熱心に一般患者の診察に従ひ信用頗る厚く、武藝運動等に多くの趣味を有せらる。場所



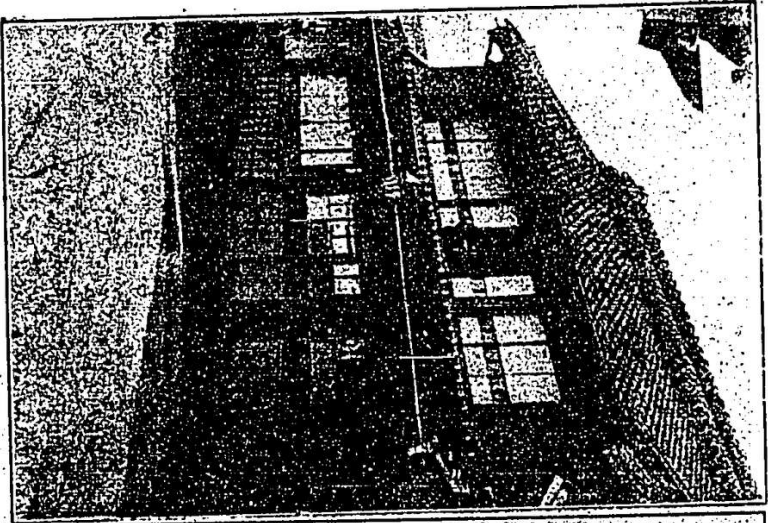
千葉縣三浦市

ては新器械をも發明され好評噴々たり。(電話一四五番)
 仁山堂病院 仁山堂病院は新通町に在り、始め君津郡奈良輪の久久城藩五郎氏の經營にかゝり奈良輪病院と稱せしが後今の名に改め縣下第一の眼専門病院として夙に其名高く、殊に東京帝國大學に醫科を學び、京都醫校を卒業せし息子起一氏代りて院長の職を繼ぎてよりは籍五郎氏の名と共に起一氏の名又現れ爾來専門眼科の治療に従ひしが現今にては内外科の診察をも併せ行ひ、患者の信頼益々厚し。(電話一三二番)

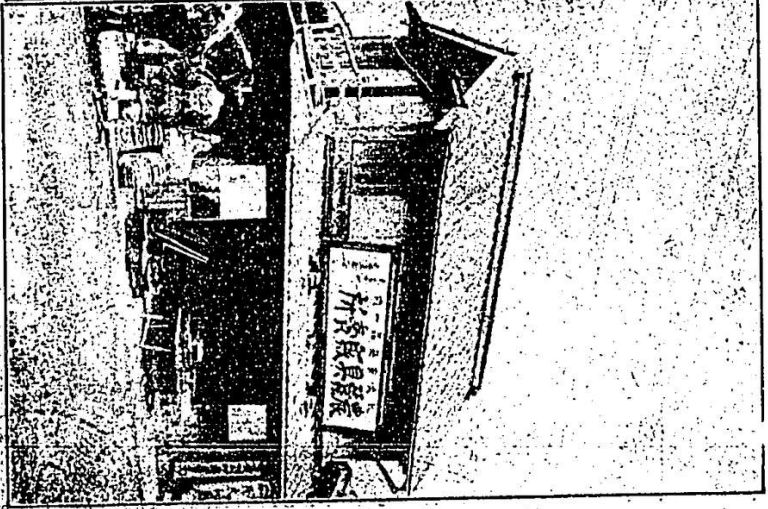
口内田醫院 院長内田實氏は印旛郡旭村馬渡の出身にて卅六年千葉醫學專門學校を出て引續き縣立病院に於て井生博士指導の下に内科を専攻し千葉師範、千葉中學、女子師範の校醫となりしが後辭して醫院を開設し、懇切道の熱心は一般患者の診察に堪ひ信用頗る厚く、武藝運動等に多くの趣味を有せらる。場所



千葉縣立第一醫院



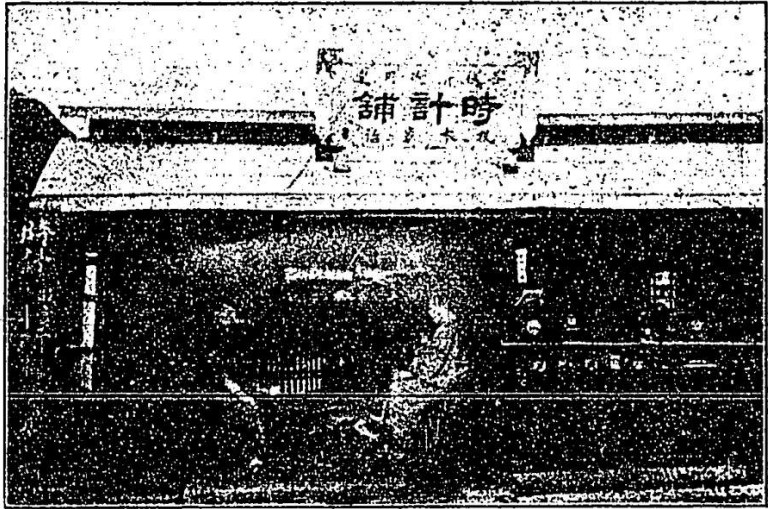
香妻町富澤農具店



本吉田屋旅館

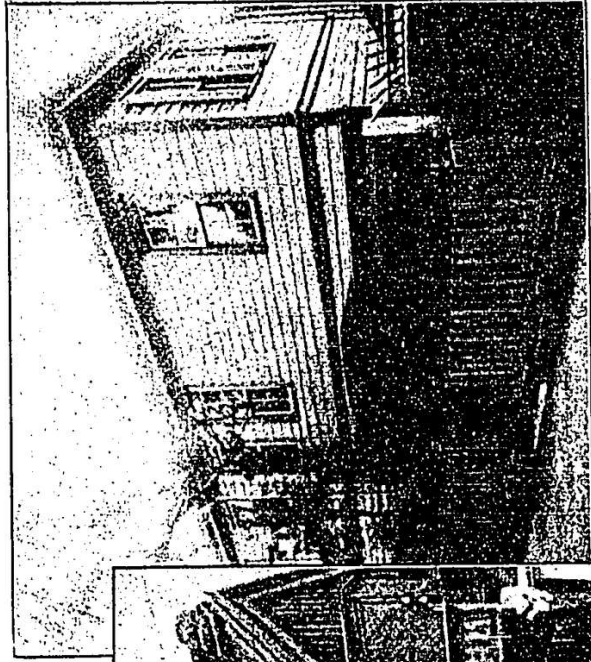
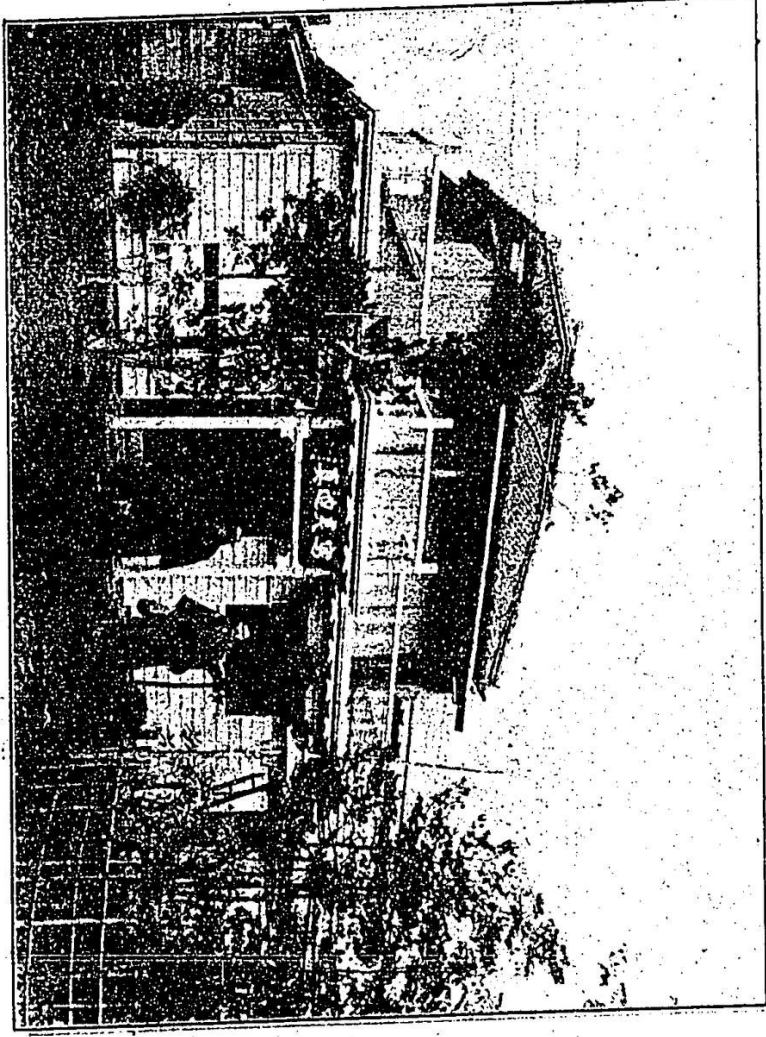


香妻橋際料理店魚民

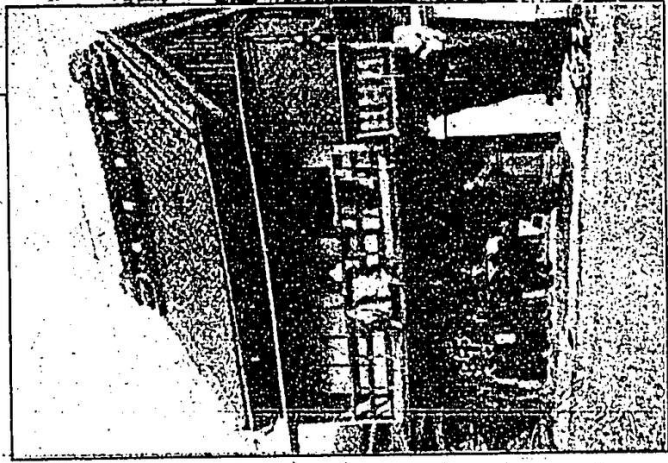


市場本時計店

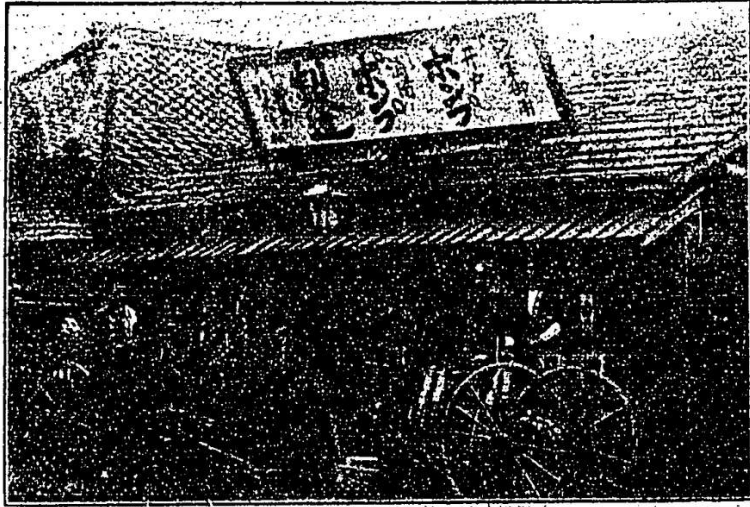
池 玉 水 珍 眞 館



市 場 和 原 洋 食 店



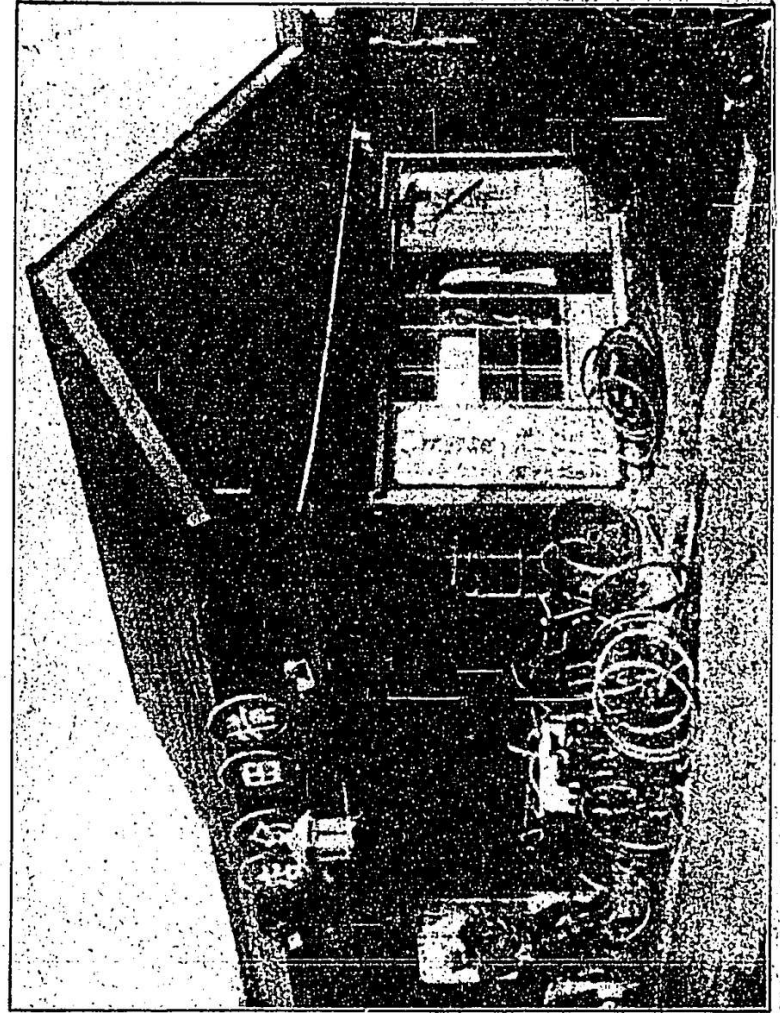
同 販 賣 部



通町野木唧筒店

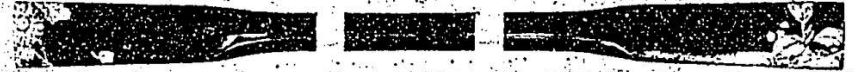


千葉車場前萩原寫真館



川橋田白轉車店

東 京
白 牡 丹 代 理 店



婦 人 小 間 物



千 葉 縣 千 葉 町 本 町 三 丁 目

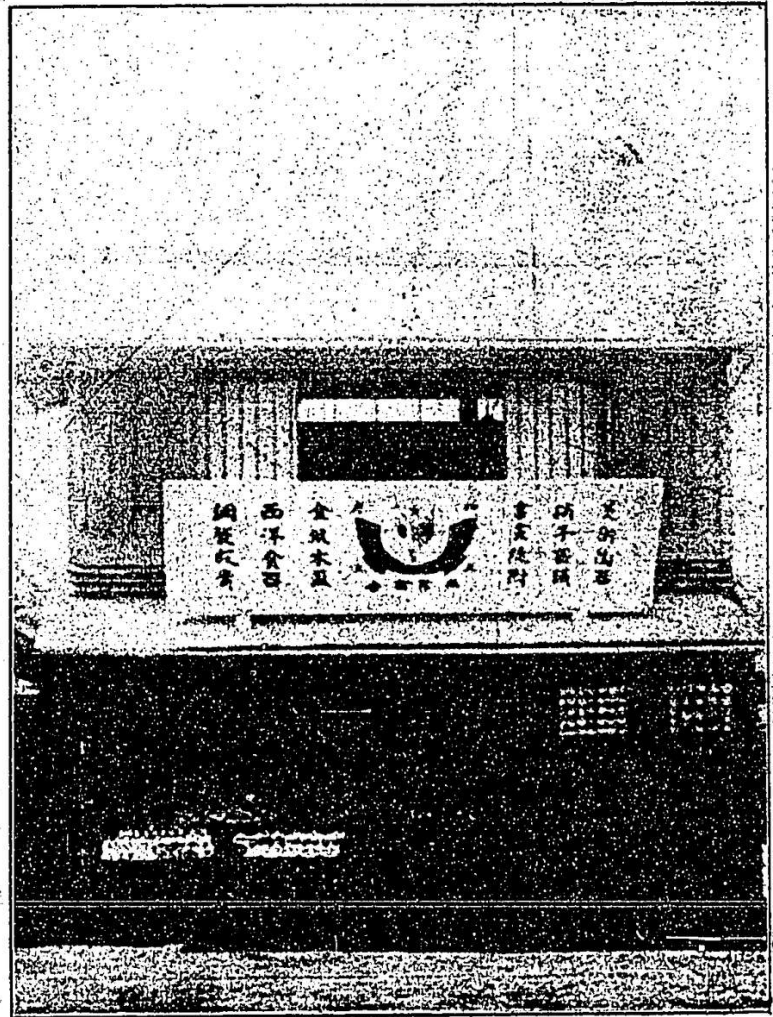
大 阪 屋

千 葉 縣 佐 倉 町 新 町

大 阪 屋



千 葉 縣 神 戶 前 理 代 店 林 亭



千葉神社前雨宮盂製所

家 具 香

營業品目

漆器、指物
 荒物、世帶
 道具一式

千葉本町三丁目

大

紅茂
 商店

電話五五四番

萬 染 物 長

千葉町南道場

櫻井瀧藏

千葉町吾妻町三丁目

勝山時計本店

千葉町本町三丁目

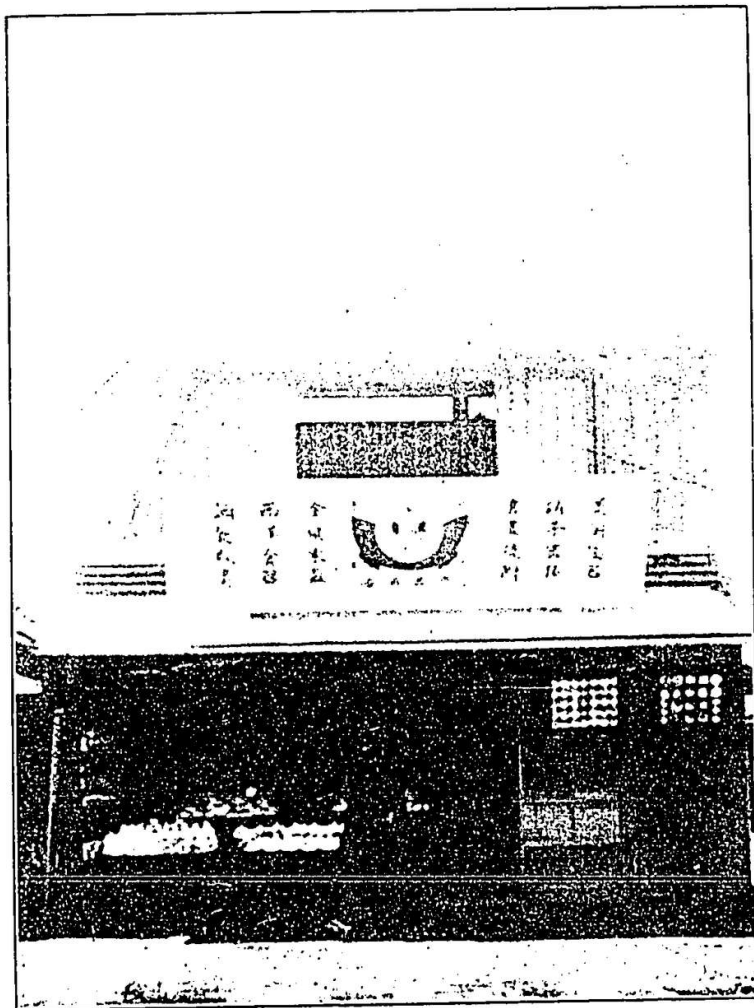
勝山時計支店

印旛郡四ツ街

勝山時計支店

韓國鎮南浦册映通

勝山時計支店



千葉神社前宮蓋調製所



御 料 理

吾 妻 俱 樂 部

千葉県千葉市二丁目

(電話一六〇番)

天ぷら

天

ど

ん

出前仕り候

千葉県公園前

天

彌

祝 千 葉 縣 共 進 會 開 會

千葉新地

原 小 中 武 山 玉 靜 靜

田 川 村 藏 田 曙 海 山

樓 樓 樓 樓 樓 樓 樓 樓



滋養 効顯 人參 飴

眞島屋

(洲長町葉千縣葉千)

衛生 滋養 林檎羊羹

寫眞撮影

肖像畫調製

コンテ一畫油繪各種依
頼に應ず

浴之鼻下

松井進盛館

同館之側

海水浴温泉

室内浴清潔深誦病ニ奇効アリ

滋養 貝せんべい

千葉袖ヶ浦名産

口にせば味ひ甘く香りよし

海にあそびし心地なりけり

千葉縣千葉町市場

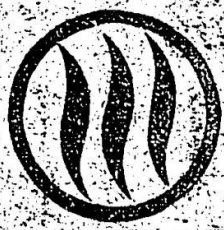
製造本舗元祖

豊月堂

◎類似品あり本舗豊月堂に注意ありたし◎

共進會
の
好土産

一本店 東京市日本橋區檜物町
 一創立 明治七年十二月
 一資本金 壹百萬圓
 一積立及繰越金 百五十拾貳萬貳千五百圓
 一諸預金 貳千萬圓



合資 川崎銀行千葉支店
 同 銚子支店
 同 佐原支店
 同 佐倉出張所
 同 松戸出張所
 支店所在地 (東京富澤町、山城京、都常陸水戸、常陸石岡)

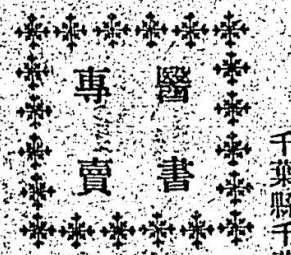
一創立 明治十二年七月
 (川崎家一族の設立にして重役同無限責任)
 一資本金 五萬圓
 一積立及繰越金 參拾萬六千九百四拾六圓
 一諸預金 八百九拾四萬圓



株式 川崎貯蓄銀行
 東京市日本橋區檜物町
 (東京市内支店代理店) 麴町區三番町、神田區松任町、本所區相生町、牛込區神樂坂、芝區西久保町、日本橋區富澤町、府下王子町
 (地方支店代理店) 山城京都、常陸水戸、常陸石岡、下總千葉、下總銚子、下總佐原、下總佐倉、下總松戸



和 洋
 御菓子司
 千葉縣千葉町院内
 魚市場角
 太平堂



千葉縣千葉町市場病院阪
 醫學
 專賣
 明文館
 支店

東京灣汽船株式會社

千葉縣千葉町寒川汽船取扱所
 海陸
 淺倉運送店

(電話 二四一番)

和洋
珍菓



新柳菓子舗

(電話三〇〇番)

千葉縣千葉町吾妻町

千葉縣千葉町停車場前院内

野口藥舗

賣藥
化粧品

仲介業廣告

一土地建物之賣買

一金錢の貸借信用並ニ抵當

但シ縣下ニ限リ遠隔之土地ニ雖モ大町歩巨額ノ物件ニ候ハ、特ニ取扱被可申

當舎が多年正確に取扱ひ居候事は既に諸賢の知る處、尙益々業務を擴張し疑の遺
近を問はず大方諸氏の御依頼に應じ一ツは公衆の便益に供し一ツは社會仲介業の
眞正を保ち以て社會金融機關名の實を失はざらんこと敢て敬告仕候也

千葉縣千葉町千葉四四二番地

眞成舎

會主

佐

々

治

辯護士
法學士

前判事

牛込龍藏

東京市芝罘櫻川町三十番地
電話芝罘九武四番
千葉縣千葉町吾妻町三丁目

事務所

時計附屬品一式

手葉縣千葉町本町一丁目

長谷川時計店

高梨産婆學校

高梨齒科醫院

千葉町長洲公園前



十四金製 二匁七分付 金九圓五十錢
 十八金製 二匁六分付 金十圓八十錢
 二七金製 二匁三分付 金十五圓三十錢

流行の金線眼鏡

模金製美術工藝品製作販賣

稲垣商店

千葉町寒川片町
岡原赤せき街紳士貴婦人用

として最も流行せるもの金
 質の正確と價格の低廉とは
 弊店の特色に御座候尚地方
 より御注文は近眼老眼御
 指定の度を合せ御送仕り候

營業種目
 洋服裁縫
 洋服洗滌
 洋服色揚

千葉町本町一丁目
第一小學校前

玉川商店



料理菓子折
臺ノ物一式
製造販賣
卸小賣

千葉縣千葉町寒川師範學校下

御園生平米

營業品目
煉灰
製造元
石灰

千葉町千葉停車場通り
煉化建築請負業

販賣司片岡商店

川武郡大網町大網停車場前
片岡煉化工場

營業概目
手工科用器
卸小賣
雜配帳類
卸小賣
都文堂
大澤
惠八
電話千葉(三)百七番
文房具一式
書畫用其他和洋紙類
千葉縣千葉町本町三丁目
同師範學校附屬小學校下
繪葉書
船舶來書
同中學校補內
美術額縁類
印刷物引受
同雜品
和洋製本
陸地測量部發行地圖
同販賣部

和洋 御菓子

おろし

小賣

千葉町吾妻町二丁目

東屋本店

千葉名物

八才、羊羹

吾妻堂

千葉町吾妻町

三丁目

和洋御菓子舖

千葉名所

カル、ス煎餅

歐米新造

靴行賣



丹澤靴店

千葉町院内停車場通角

人造石

人造石用材料一式

販賣及人造石タ、

手請負業

千葉縣千葉吾妻町二丁目

高長谷常吉

電話三百八十八番

千葉町通

榮木屋金物店

實用衛生手洗器 (一名自働手洗器)

特約一手販賣

銅 鐵 地 金

萬金物卸小賣

ユークス

セメント 石灰 角又海草

塗料一式

スコップ、シヨベル

富貴寵特約販賣

は千葉町院内。(電話一三五番)

□有吉堂醫院 院内に在り皮膚、梅毒花柳病の専門醫にして其の分院は佐倉にあり、院長は有吉義春氏にして親父義正氏又院務に預り患者の數頗る多し。

(電話千葉一五六番)

□清吉平吉氏 氏は明治元年五月千葉町寒川に生れ、廿四年七月今の中央大學の前身たる英吉利法律學校を優等にて卒業し、爾後研鑽を重ね辨護士試験に及第、廿八年千葉町に於て開業爾來法律事務に預るに熱心忠實なるを以て信用自ら厚く法曹界鏘々の士を以て目せらる。

□中川眞太郎氏 氏は明治十九年專修學校法律科を翌廿年英吉利法律學校を出て、始め辨護士となり、後判事として山形、仙臺、前橋、千葉の諸地方を歴任し卅九年再び辨護士となり懇切法律事務に鞅掌し本町三丁目通稱官宅に住す。

□今井製絲場 千葉郡蘇我町今井の同工場は明治卅七年十一月高橋茂七、長谷川半五郎の兩氏共同にて創立し卅九年十一月擴張以來十磅の汽鐘十二馬力の專賣製紙機を用ひ製紙の量一ヶ年約十萬本(一本八百枚、四十米)に及べり。

□小泉製絲工場 千葉郡蘇我町に在り場主を小泉惣治氏と云ひ、多くの職工を^{しき}使庸し大規模業務に従ひ居れり。

□鹽田洋服店 吾妻町二丁目鹽田商店製の洋服は意匠の嶄新と品質の確實を以て誇りとなし且つ誠心誠意忠實に業務に盡し私利にのみ拘らざる爲め信用厚く華客は廣く縣下一般に有し、諸官省及び各學校又多く本店に其の用を達し居れば業務は日に月に擴張せられ、今や三十有餘名の店員は頻りに來る註文に應じて調製に忙しく或ひは常に各郡に出張して華客の申込みを聞く等懇切到らざるなく珠に特別契約に依り月賦販賣の便宜法も設けられ居れば店前に顧客絶ゆる

事なく繁盛を極め居れり、主人は鹿田鹿藏氏(電話一二〇番、電信略號シン、振替口座東京一八五五八番)

□松葉館 當町繁華の中心點本町三丁目に在る旅館にて樓は三層の大夏、營業に熱心にして待遇宜しき爲め旅客は四季を通じて多く、又主人秋元茂氏は牲義に厚き人、土木建築請負業を營み千葉稅務署等の大建物にて氏の手に成れる物殊に多し。(電話一五三番)

□吉田屋 本町一丁目の旅館にして、主人夫婦は同情に富み、客に對して極めて丁寧なるを以て知られたり。

□相原肉(及洋食)店 當町一流の生肉店にして、各軍隊學校等の用を勤めて販路廣く、殊に肉店と通接せる猪鼻山下の同洋食部は材料の豊富と美味を以て評判高し。(電話一〇六番)

□進樹亭 千葉神社鳥居前に聳立せる高樓は生蕎麥及び料理を以て當時繁盛を極める進樹亭しんじゅていにして幾棟の増築に加ふるに昨年新設せる洋館は美を盡し又宴會等にも適せり主人は加藤豊次郎氏。(電話二四三番)

□魚民 市場區吾妻橋の袂にあり新鮮の魚類を料理し蒲燒類等又評判好く、加ふるに酒の美、潺々たる都川の流れを枕に洵然と酔へば轉た憂若を忘るるの思ひあらん。

□富澤商店 主人富澤源太郎氏は農産業に造詣深き人、本店にて發賣する特許清水式噴霧器、特許測量繩其他蠶卵臺紙、製絲器一式、鋤鉞等の一般豊具は廉價と確實を以て評判好く其他本店にては種豚の分譲、蠶絲時報の發刊等となし廣く本縣農産業の伸張を計りつゝあり。所在地は吾妻町二丁目、

□薄利多賣堂支店 東京日本橋區室町に於ける洋物店薄利多賣堂(本局二二四

○番)は卅一年創立以來商品の嶄新と、正札付の低廉を以て其名周く帝都に轟く處、同堂千葉支店も先頃本町郵便局側に開店以來大方の好評を博し既に當町同業者間に冠絶するに至れり支店主人は矢野正吉氏年三十一、熱誠の人なり。

□大坂屋 千葉本町一丁目及び佐倉新町に在り孰れも第一流の小問物店にして同店にて販賣せる袋物、簪及び諸化粧品類は東京の流行に一日も遅るゝ事なく且つ業務に對し着實なれば上下を通じて華客多く今や他店の羨むも及ばざる處となれり

□玉水館寫眞店 本店は東都にて著名の大舗玉水館(兩國寫眞館)にして支店は當町狹斜の地なる蓮池に在り、技は精巧を以て賞せられ器機又好く整ひ且親切なるは既に定評ある處、本書寫眞撮影も半本店に依囑せり。

□荻原寫眞館 千葉停車場側に在り聯隊の華客は大部分本店の占むる處、熟練

の技は迅速に仕上るを以て評判好し、されば本書掲載の寫眞撮影も半同店に依頼し、蓮池玉水館と相對して當町斯業の鎮たり。

□長生館 主人鹿倉善次郎氏は長生郡冬祭村の出身滿十一ヶ年間醫學校の事務員を奉職し四十年退きて患者の下宿を營業とし入院患者身元保證の需めにも應じ深切を以て聞え居れり。

□横田自轉車店 當時自轉車店多しと雖も確實にして鞏固なる寒川の横田自轉車店に如くは無く、縣下各地よりの申込み益々多しと。

□野本ポンプ店 縣下各郡の消防組合漸く整ひ唧筒の需要増加せるに共ない本店の業は益々盛んなるに至れり。

□根本時計店 市場通にあり主人章司氏は篤實の人故華客の信用頗る厚く又諸官省の御用をも務め修繕等も親切を旨とし價も低廉なる故客足常に絶ゆる事無

く繁昌の店なり。

□雨宮盆店 千葉神社鳥居前の雨宮盆店は當町唯一の盆關製所にて金銀木盆を始め陶器和洋食器等何品にても製作し主人雨宮光氏氏の技は書畫焼付に精巧を極め居れり。

千葉町案内終

明治四十四年四月廿四日印刷
明治四十四年四月廿七日發行

定價金貳拾錢

著者

增島信吉

發行者

千葉縣千葉町本町一丁目七百七番地
田村鐵雄

印刷者

東京市牛込區水道町二十五番地
福山福太郎

印刷所

東京市牛込區水道町二十五番地
福山印刷製本所
電話番町二九九六番

發行所

千葉縣千葉町本町一丁目七百七番地
千葉町案内發行所

同

千葉縣千葉町香妻町三丁目千四百四十七番地
長谷川書店

同

東京市牛込區管地町十六番地
東亞出版協會

明治四十四年四月廿四日印刷
 明治四十四年四月廿七日發行

定價金貳拾錢

著者 增島信吉

發行者 千葉縣千葉町本町二丁目七百七番地 田村鐵雄

印刷者 東京市牛込區水道町二十五番地 福山福太郎

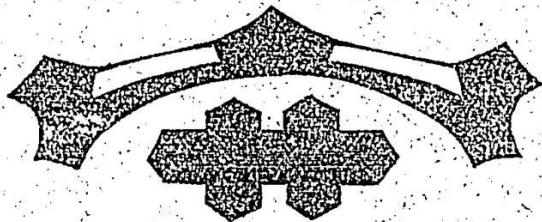
印刷所 東京市牛込區水道町二十五番地 福山印刷製本所
電話番町二九九六番

發行所 千葉縣千葉町本町二丁目七百七番地 千葉町案内發行所

同 千葉縣千葉町善妻町三丁目千四百四十七番地 長谷川書店

同 東京市牛込區築地町十六番地 東亞出版協會

最上醬油



醬油釀造元
 米穀肥料
 官鹽元賣捌

內外國米肥料
 落花生雜穀類
 一切醬油官鹽

千葉縣千葉新町

本店市原染吉

振替口座 電話一三三番
 五四二六番 電話イチ又はヤ

千葉縣印旛郡八街
 停車所前

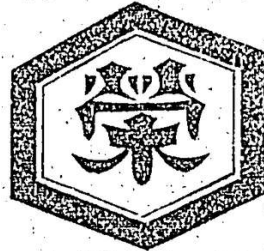
市原出張所

(電略ヤマ)

議 論 穩 健 記 事 正 確 材 料 豐 富
 千 葉 縣 千 葉 町 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町
 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町
 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町 千 葉 郡 蘇 我 町

千 葉 縣 千 葉 町

商 標



最 上 醬 油

醬 油 味 噌

釀 造 元

澤 元

榮 吉

千 葉 縣 千 葉 郡 蘇 我 町

元 祖 清

賀 喜 餅 都 煎 餅 都 煎 餅
 都 煎 餅 都 煎 餅 都 煎 餅

煎 餅、賀 喜 餅 生 地、製 造 問 屋

丸 清

丸 清

支 店

本 店

◎ 右ノ外御注文御好ニ應ジ調進仕俟◎

(千 葉 町 蘇 我 町 一ノ角)

(千 葉 町 新 町)

蒲燒
鳥料理

千葉縣公園前

安田

(電話貳〇番)

御旅館
御下宿

縣立千葉病院前

上總屋

(電話 一一八番)

入院患者御仕出し



大船旅館

千葉町寒川踏切際

旅館

諸大醫處方調劑

一般醫業衛生材料

千葉縣千葉町通

弘仁堂藥局

藥劑師 小倉龜太郎

(電話二六二番)

千

千葉縣千葉町本町二丁目

大塚勇之助

諸國

御茶處豐倉園

印
車
木村碧玉堂



鳥料理

千葉町市場

鳥悅

營業品目

金物類
 建築材料
 硝子板
 壁用呂
 度量衡器

千葉郡千葉町通町
 千二百六十二番地

大島屋支店

(電話番號 二四九番)

御料理 橋月

千葉町蓮池

(電話 百三十七番)

牛豚肉
 卸小賣

肉なべるい

千葉町院内

濱田肉店

(電話 貳四貳番)

◎大勉強親切◎

御差入品取扱所

千葉郡都村監獄前

松井タツ

陸海軍御用
硬質陶器

一名落シテモ破レヌ瀬戸物

千葉縣千葉町停車場通り

日本硬質陶器株式會社

特約店 加洲屋

大勉強
牛豚肉販賣

千葉町長洲

石橋肉店

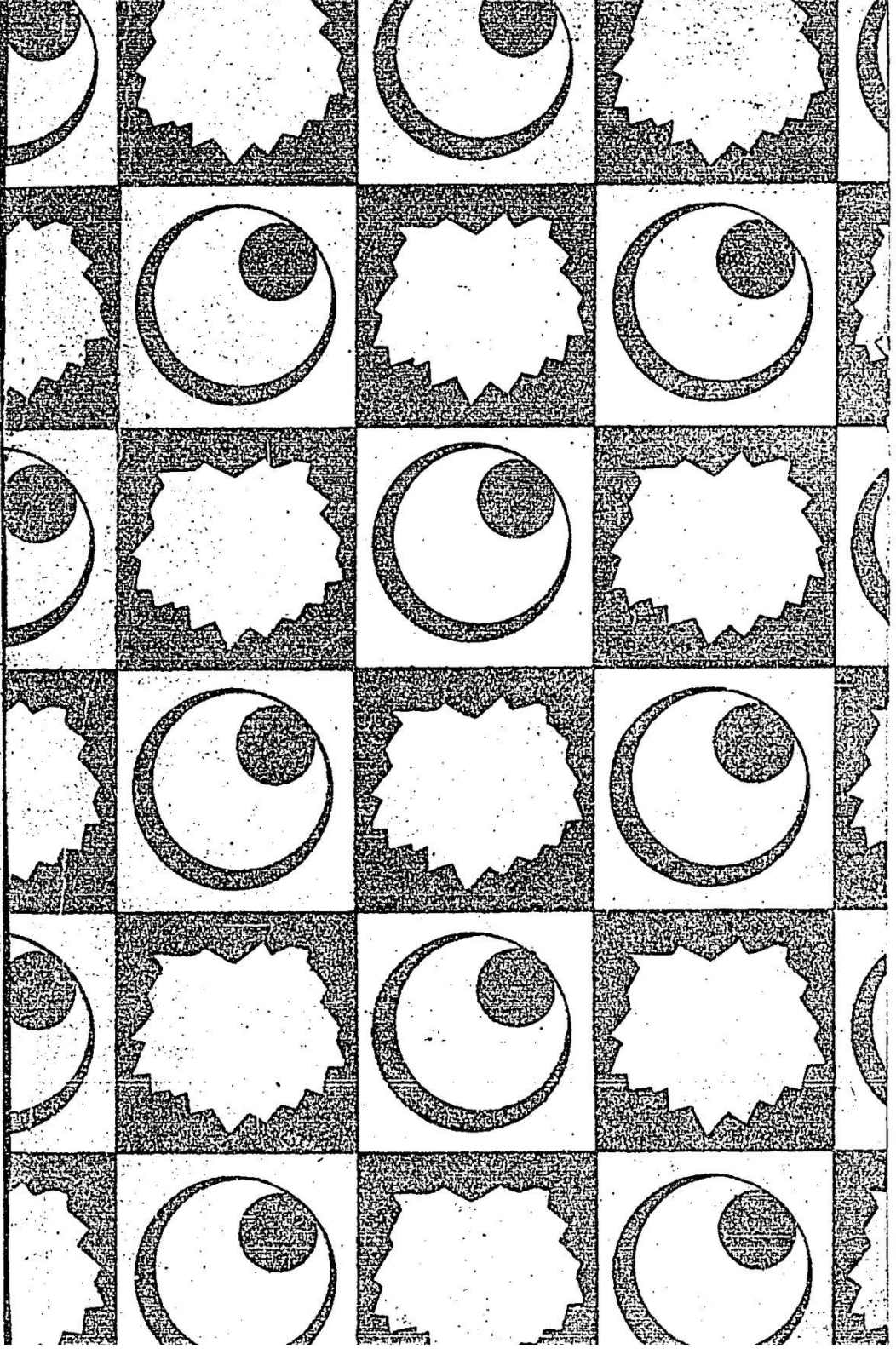
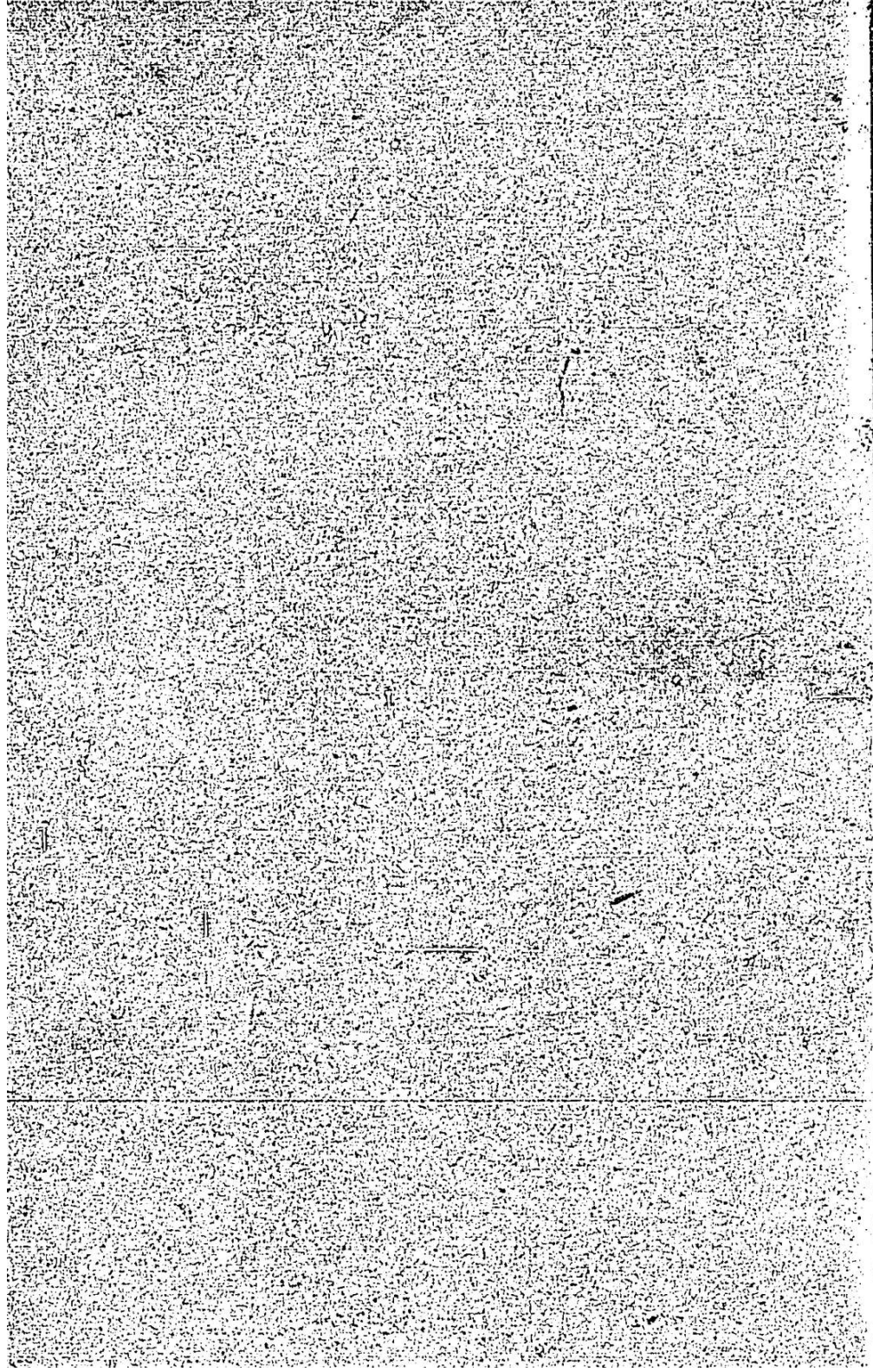
(電話 一三三番)

萬菊旅館
三上館
病院賄所

千葉町市場

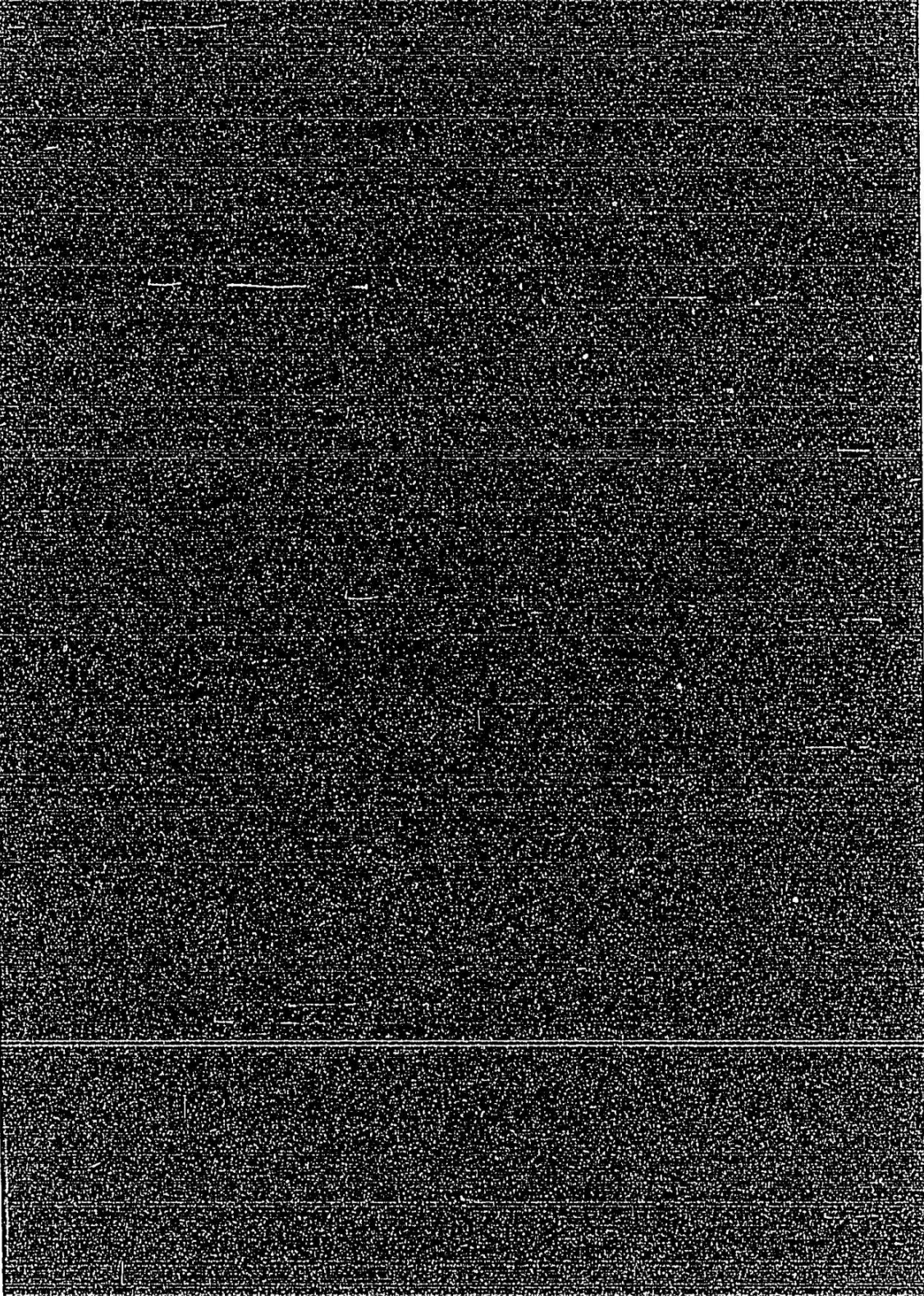
三上梅吉

電話(五)四番三上館(菊)
二七〇番



8

2.



82
685

024014-000-4

82-685

千葉町案内

増島 信吉 / 著

M44

ADC-1126



